
心の欠片

羽鳥 玲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心の欠片

【Nコード】

N7183Q

【作者名】

羽鳥 玲

【あらすじ】

* 神の蔵の守人を引き継いでの本編。

超能力者の出来損ない、結界だけを張ることができる結界士の谷口都は超能力者である仲間達と共に人々の負の感情が産み出した『邪』を祓う毎日。

そんな最中、世界を揺るがすほどの大きな力を持った邪が仲間を傷つける。当然とばかりに都はそれに力を貸そうとするが、仲間たちはみな関わらないように都だけを隔離する。もちろんそれほどまで

に大きな力を持つ敵に仲間達は苦戦して傷付いていく。それを知っても尚、都は隔離され守られる。その理由とは……………。

危険な自由、安全な不自由（前書き）

この話を書いていたのはちょうど10年くらい前です。
下書きをしていたのは更に5年くらい前。

書いてたのは本当にルーズリーフで学校のノートの下に隠して書きためて、先生によく何書いてるんだ！って怒られてた。
そんな走り書き状態だったからうちのお母様に「ゴミ」扱いでそのルーズリーフを捨てられてた事に気付き、必死に忘れないうちにパソコンで編集し直したのがコレです。

その頃のは挿絵も描いていたのに（笑）

危険な自由、安全な不自由

第一章 危険な自由、安全な不自由

自分たちの力を疑ったことなどない。

自分たちは神に力を与えられて生まれ落ちた神の子供。その証拠の能力を…恥じたことなどない。

助けに来て…………。

「何処に行った？」

「悠宇、あまり余所見をするな」

「そんなこと言ったって遥佳…………」

走るのをやめて天を仰ぐ。ビルの隙間から夜空が明るくなり始めてきている。もうタイムリミットだ。急に動くのを止めたおかげで下を向いた途端に汗が水を被ったみたいに溢れ出てきた。

「仕方ない…切り上げよう」

先にそう言ったのは遥佳だ。あきらめが悪い自分は遥佳をキツと睨んでしまう。間違っているのは自分だって分かっている。そして、少し遅かったら自分がそのセリフを言っていたと分かっている。

だが、ゾクつと寒気を感じた。ただ、恐怖を感じた。

自分は直感が鈍くてこういう事に気付くのはいつも遥佳の方だったはずだ。遥佳の方を見つめても何も察知していない様子だ。気のせい…………か。

「遥佳、帰るならすぐに帰ろう」

やっぱり嫌な感じが拭いきれず子供のようには遥佳を急かした。その瞬間…………。

遥佳の胸が黒い刃で貫かれる。自分の身体に流れているものと同じ血液が吹き出るのをスプラッターの映画を見ているような気分で見つめている自分がいた。黒い靄に包まれていく遥佳の身体をただ

見ているしかできなかった。

それは永い悪夢の始まり。長い後悔の始まり。

一重一族。

“ 遙か昔のこと。その祖先である存在は、人間在らざる力を持ち、様々なものを創り出した。その恩恵を受けた人々はそれを神と崇め、讃えた。時と共に神は、人々に溶け込み伝説と化した。

そしていつの日にか人々は神の恩恵に甘え、習性のように争いを好むようになる。

争いは決して人の手だけで行われることはなかった。

争いの影には必ず奴らが存在する。

人々が争いを起こすから存在するのか、争いを彼らが起こさせるのかは不明。

ただ、邪な人間の心に取り憑き、その行為を代行する者達を私達は邪者と呼んでいた。

邪者が横行する時、神は現れる。神が現れる時、邪者もまた神の力に引き寄せられてその血を目指す。

ある時、神の一人が人間との子を成した。子はその力を誇り、力をより強く自分の子孫、末裔に残すべく子孫同士の婚姻を行うようにさせる。

いつの日にか、その傲慢な人間の血を引く人間にしか、神憑きが起こらなくなった。

それはその人間に対する憎しみの深い、神からの復讐だったのかもしれない。

神に生まれ運命を定められると言うこと、決して幸せなものではないのだから……。

”

人間と婚姻を結んだ神々の内の一人、名を「みやこ」という。これが一重に伝えられている伝承のうちの一つ。

一番深く、一番ポピュラーなものだ。

今でも一重はその恩恵を信じ、生き神『ミヤコ様』が本当に存在

するとされてる。実際に自分達は『神の子』とか『能力者』とか呼ばれ、神に近い力を持って生まれてくる。

だが現代にあつて身内同士の婚姻などいくら一族が大きいたつて続けられているワケもなく、一族外に出てしまった人間も多にいる。それらに『ミヤコ様』が神憑きされることは前例としてなかった。本当に純血じゃないと流石に神は憑かないらしい。

だから、ダメなんだ。

せめて人間の血が混ざつても神に成れる人間がいればこんなに古い伝承になんてしがみつきはしないのに……。

そしてこの現代に一重は大きな権力を持っていた。『ミヤコ様』の力を持ち、普通の人間と同じであるはずがない、コレが一族の見解だ。

現代の社会に於いて、一族の各々の家は政治にすら口を挟めるほどの権力を持ち、絶えることなく神の力を継承した人間を中心にしてこの家を繁栄させてきた。むしろその行為は宗教的では収まりついていない。一国の政に携わる者達の話。

鷹崎モデルプロダクション。

大手中の大手のプロダクション。そこに飛澤奈月は所属している。3年前、中学生でファッション雑誌の表紙を飾って活躍していた頃から比べると今の仕事は少し辛い。

来る日も来る日も食事制限（甘いものが好き）。ウォーキングの練習（努力が嫌い）。

だけど遣り甲斐もある（人から誉められるのはやっぱり好きだし）楽しい仕事。

ショーモデルとして活躍するようになったのはここ最近で、だが自分にとつてもう残り少ない自由を満喫しておきたかった。

（大人になってしまえば、こんなこと続けさせては貰えない。）

（政略結婚だったらまだ、遣り甲斐があった……）

一重一族のちょっと特殊な位置にしかも能力者として生まれてしまった彼女の苦悩は続く。まず生まれた家が一重の中でも特殊な飛澤家だから。

神憑きを一度も排出していないその家、その割に力を持ち、そして確立していく。

理由は一つ。自分たちは巫女の資格を持っている人間を排出できるからだ。

巫女が居なければ神はその力を自由に扱えない。そのためにこちら、飛澤家も独立して血を絶やさずに来た。だからよくあること、従兄妹同士での婚姻なんて……。

何の意味も持たないその婚姻は、なくても良い。ただその血を……子供さえ出来れば後は自由なのだ。自分たちの親は少なくともそうだった。自分にどれぐらい兄妹が居るかはわからない。両親は婚姻すらせずに自分をつくった後、忘れたかのようにお互いに別々の家庭を築いている。自分を、忘れたかのように……。

このまま、繰り返される。

このしがらみ全て、なくなってしまう方がいいのに……。

「何ぼーつとしてるの？」

カメラマンの泉実拓也が愛用のカメラを片手に近づいて来た。

前回の撮影で初めてあった彼は若手ながら注目を集めているカメラマンだ。

不思議なイメージの持ち主で、自分のお気に入りだ。撮る写真も絶妙な感じが気に入っている。

「泉実さんは……、どっかに逃げたいって思ったことある？」

「……最近の女子高生ってそんな凄いことを考えてるわけ？」

「あつ、なんかオヤジ発言……」

「だってオジサンだよ。君より10才近く離れてるんじゃない？」

「泉実さんて年齢不詳。わからないもの」

見た目高校生でも通ってしまいそうな彼にそう悪態付いて見る。少なくとも彼は22才以上だ。大学卒業してからこの世界に転向し

たつて聞いている。

「27才」

「………つて、マジ？もつと若く見えるよ……。つーか10才以上上じゃん。私16才だもん」

「ありや？マジで？奈月ちゃん大人っぽく見えるね、18以上だと思つてたよ」

お互いにお互いの誤解を笑うと少しすっきりした顔になれた気がした。めいつていた気分が一掃される。そう言う力の持ち主である種的能力者みたい。

「そういえば、カノンの新作コレクションのイメージモデル、応募したんだって？楓ちゃん達が大騒ぎしてたよ。飛び入りだから……コネでも使ったんじゃないかって」

使つてないし……。

楓はモデル仲間だ。彼女は雑誌モデルだがどうやってか芸能界入りをしたいらしく最近色々なオーディションを受けまくっている。どうせ同じオーディション、ブッキングしたんだろう？

結構嫉まれている自信はある。そんなに高くない身長でも選ばれる。

視線を引くね、て泉実拓也が言った。他のカメラマンもプライベートな写真集に呼んでくれたりする。

「カノンの洋服、好きなの。自然っぽいトコ。なのにカワイイ系。キレイ系だと私のイメージじゃないでしょ？それに……絶対やりたいし」

オレンジや赤を貴重としたそのブランドカラーが好きだった。だから楓や他のライバルなんかに負けない。自意識過剰なんかじゃなくて……それでも思わないと自分にすら負けてしまう時があるから自分にだけは勝ちたかった。

じゃないとあの人に負けてしまう。

平穩で、いつもと変わらない日常。

つまらない、乾いた日々。

雑踏と周囲の音がまるで自分には何も関係ないってお互いがお互いに思っている街。

東京・私立紅城学園高等部はそんな場所にある。品川駅にほど近いその高校は都内でも有数の進学校で、通っている学生の大半は有名大学へ進学し、残りはエスカレーター式で紅城大学に進学する。

勿論親が通わせている理由はそんなものではなくその学園は格式高いブルジョワな高校であることだ。小・中・高までは一貫教育をうたっているため、外部受験者は殆どいない。

そしてそこへ通っている学生のほとんどの親が資産数億円クラスだということ、それが最大の特徴だ。つまりは息が詰まる所。自分たちは、少なくともそう心得ていた。

高校から外部受験で入ってしまった藤井桜花はそろそろ自分の迂闊さを後悔している。

「何そんなにしかめっ面してるの？」

教室の窓際でため息を吐いてた自分に話しかけてきたのは自分の彼氏、沖野和美だった。

小柄な彼は自分が初めて告白してできた初めての彼氏で、普通の女子高生らしいことの最後の砦である。

まず、自分は本当に高校生をやる必要があるのか否か、その問題に突き当たってしまった。IQ180という天才的指数を小学生の頃はじきだして、おかげで14才でアメリカの大学を卒業し、現在は工学博士号を持っている。

立派に勉学的な学校を卒業している分、この学校から得られるものがあるのかないのか、そこがポイントになってしまうのだ。

最も、この高校を辞められない最たる理由は別にある。

沖野和美を含めた、この学校の少ない友人達。決して和美以外の人間は良い意味ではない。和美をこの学校に残して自分が辞めたとしたら絶対に後悔してしまう。

谷口都、彼女に自分の居場所を盗られてしまう気がして、学校を

辞められずにいた。

実はね彼女、都も自分と同じく工学の博士だ。都の方は自分より早くからの英才教育でその若さですでに学会ではその名を轟かせているという強者。

同じ土俵だからこそ、尚更強いライバル意識が優先されてしまうのか……。

だから決して仲は良いとは言えたモノではなかった。

「谷口さんいつまで寝てるの？今日はアンタんちで話があるっていったのはアンタなの！」

「ん、んーっ！寝起きに大きい声で耳元で喋らないでえー」

舌つ足らずな喋り方も気に障る。

長い髪を緩く結んだ彼女は机から少し顔を起こした。整った顔が覗く。

彼女、学校内では当然成績はトップクラス……ではなく、彼女は成績も最下位に限りなく近い成績を納め、劣等生を演じている。授業は殆ど睡眠時間、出席日数もギリギリ、及第点をしっかりとって進級している辺りが先生の神経を逆撫でる。当然頭は良いのだから授業で当てられようものならのりくらりと答えて適当にかわす。

「藤井さん、血圧高いでしょお？私、メチャメチャ低血圧なのよ、すぐは動けませんて」

眉尻を顰めて彼女はそう言い放った。素晴らしい言い分だ。百点満点中十点ってトコね。

「じゃ、まあ……………帰るけど」

やっとまともに起きあがって彼女は言った。タイミング良く、というか絶対見計らっていたのだろうが飛澤尚哉が現れた。彼は都の彼氏であり、一重有数の能力者である。

彼女、都と彼、尚哉は立ち上がると和美を呼び止めて同行を依頼した。

三人が並んでこちらを向き直る。

三人、オーラが違う。特別な雰囲気を持つ彼ら、自分だってきつ

と他から見たらそうなのかもしれないが私達は特殊だった。

（近寄りがたい…よね？）

ピンの時はともかく…自分たちが連んでいる時に近寄る者は居ない。

「まあ…いいや」

文句の一つでも言おうかと思ったのだが周りの聞き耳立てていそうな雰囲気を押されて言葉を呑み込んでしまった。

自分も能力者なのだが、最近力に目覚めたため殊更彼らの異質さがわかる。因みに自分は精神感應能力者でテレパスと言えば聞いたことのある人もいるんじゃないかな、と思う。

簡単に言くとテレパシーとかを遣える類の能力者。どちらかといえば自分は洗脳とか、全然種類が違うけど回復とか結界を張ったりする方が得意。人の頭を覗くこととかは普段やらない。強い想いとかは勝手に拾って来ちゃって頭痛のタネになる。ま、こんなトコ。

和美は生粋の回復能力者。結界とかも張れる。攻撃はあまり得意ではないらしい。

谷口都、このことに関しては自分の力が勝ってる。コイツは結界士。結界士は能力者に成りきれなかった人間の名前だ。つまり結界以外は何も出来ない役立たず。

尚哉はオールマイティーに何でも、しかも結構器用に使いこなせて…一族の中では一目置かれている。自分の婚約者でもあるが、谷口都と付き合っている。まあ、自分も和美と付き合っているのだから文句は言えないが…この女の何処が良いんだか…。

「なんだよ？俺の顔じつと見て…なんか付いてる？」

尚哉が少し困ったような表情をしてこちらを向いた。見てたことをばれてしまったらしい。笑ってごまかした。

「藤井さん、悪いんだけど家でのお話し合いはまた後日。今日はこのまま何も言わずに九希ちゃんのとこへ行ってくれない？」

「一重総本家？」

「違うわ。白金台のマンションのほうに今日は居るから」

「何しに？」

「私が話しちゃったら九希ちゃん怒っちゃうかな……知りたい？」

「別に知りたくない」

本当にこいつのこの言い回しがむかつく。

シンプルなつくりで、相変わらず人の暮らしているような感じが全くない。

この部屋の主・一重九希もそんなイメージの人間だ。21才だがそれよりもずっと年上のように落ち着いていて、達観している、そんな感じ。

（だから…人間と喋っていると言うよりは、白雪姫に出てくる鏡に話しかけてるみたいで）

気味が悪い。

だが、間違いなくこの人は自分達・『能力者』^{だけに}を束ねる一重の当主様で今代の『都様』でもある。その都様が一体自分何のようなのか？

「桜花、なんで仁王立ちしているの？座ってよ」

「え？……あ、ゴメン」

仁王立ち、そして普段使ってなさそうな応接セットのシングルソファでくつろぐ彼を見下ろした状態の自分に痺れを切らして彼は言った。躊躇いながらも向かいのソファに浅く腰掛けた。

「桜花、よく来たね。一人で来るのは初めてじゃないか？」

年相応の人懐っこい笑顔を向けられて少しだけ警戒心が和らいだ気がした。あまり、この人と喋ったことがないって言うのは事実。何故、ここに自分が一人で呼び出されたか、自分は分かっている。理由は一つしかない。

双子の兄の安否だ。

兄・皐月は稀な能力の持ち主でその能力は大きく、自分で扱うことが出来ない。皐月は自分からこんなのかなにも役に立てないから、そう言って一重の屋敷に身体を拘束された。在るだけで暴走す

る力、溢れ出て抑えられない力、だから皐月は自らを封印した。一重の見解はこれで一件落着。だが、九希は違った。九希は幽閉された皐月を別室に内密で移し、自分と取引をした。兄の自由を取り戻す代わりに自分達の力を『一重九希』個人の兵力として使わせる、自分の部下になれ、と。そう言った彼は笑っていた。ヒトの人生を弄ぶように。

皐月は今も封印を解くことは出来ない。でも以前とは違う。だって皐月は今、レベルアップの為の修行を積んでいるのだから。力が抑えられるようになったら、自分から封印を解く、九希はそう言っていた。

「別に……馴れ合うつもりはないし」

「まあ、それでも構わない。でもあまり都とケンカしないで……仲良くした方がよいよ」

「有り得ないわ」

九希がふう、と息を漏らして首を振った。呆れられちゃったかしら……。

「皐月がね、修行の最終段階に入ったと……都から報告を受けたよ」

「谷口さんが？」

『ミヤコカラ』？アイツは一言もそんなことは言わなかった。ケンカ売ってんのか？すぐ近くにいながらわざわざ九希に言わせるとは……。

「知らなかったのかい？皐月の面倒や、修行の指標を示しているのは都だよ。性質や波動が似ていてシンクロしやすいんだ。よく様子を見に行ってくれている」

「……余計な、こと」

「桜花、君に仕事をあげるよ」

「仕事？」

「そう、仕事。邪者の始末をつけて貰いたい」

初仕事。自分が九希の私兵になってから、だ。一重に依頼されて解決したことはある。

そう、問題はない。

「どんな？」

「ちよつと特殊だね。和美と尚哉を付けるから、都にはばれないように動いて貰いたいんだ。できる？」

「…………… っていうか、カズミちゃんと尚哉つて一重でもトップクラスの能力者でしょ？正直、私は必要？」

「桜花が必要なんだ。都に嫌われてるから内緒で動きやすいだろ？」
キラワレテル、はつきり言われるとちよつと傷付くゾ！まあ、自分も毛嫌いしているのだからなにも言えないか。

「…………… で？」

「邪者の正体を調べて貰いたい。あ、倒そうとか考えなくてイイからね」

「バカにしてる？私には倒せないって言われてるみたいに聞こえるよ」

「今回の件は必要なこと以外は話せないんだよ。ゴメンね」

ゴメンね、って柔らかく先に言われてしまった。

取引は自分が劣勢なのだ。全ての面に於いて。

「ターゲットは都心のビル街で人を襲っている辻斬りだ。話くらい耳にしているだろう？」

「若い…………… 人中心に狙われている連続通り魔事件？」

「そう。被害者は胸の辺りに大きな穴が開けられている。犯人は女の姿。っていうか人間の乗っ取りを成功させているらしい。本名は加藤鈴香。昼間はOLだが夜な夜な辻斬りとして暗躍。まだ完全に身体を乗っ取られているわけではないが、まあ時間の問題だな」

「そんな…………… 邪者、倒せばその人助かるんじゃない？」

「邪者に取り憑かれるような人間が悪いんじゃないか？こっちは慈善事業でやってるワケじゃないんだ」

「じゃあ…………… それだけ調べ上げておいてなにをまだ調べるっていうの？」

「その後ろで操っている黒幕の正体を」

「く、黒幕？邪者って連むの？」

「三邪って言って、邪者にも派閥があるんだ。邪者の存在理由って知ってる？」

存在理由、なんて大それたものがあるというのか？首を横に振った。

「この世界を無くすことだ。喩えそれが自分を消すことになったとしても。三邪はそれにより近き者。歴代の一重の能力者と戦い、こちらが敗戦を強いられてきている。弱者は強者に媚びるのは当然だ」

「……………負けてんの？」

「勝ってたら、ここに邪者はいないだろう？」

「そんな話…初めて聞いた」

「一重の人間はみんな知ってる。当たり前で口に出す者もないよ。負け続けているから能力者の数も少なくなった。もう戦いは最後かもしれないね」

「つまり…戦うんだ、アンタ」

「で、都を巻き込みたくないんだ。あのコだけは……………大事な」

「……………大事な？」

伏せていた顔を上げ、ニコツと笑って九希は言う。

「妹だからね」

……………曲者。（っていうか食わせ者？）

もう一人の妹への口止めは良いのか？まあ、別に彼らの家庭の問題も興味ないし…言いふらすつもりなんて毛頭ない。

「あ、尚哉とカズミちゃんはこのこと知ってる？」

「……………知ってるよ。そうだね…事の詳細は二人に聞いてくれ」

……………アイツらもなかなか凄いね。

「都さんってホントに桜花ちゃんの神経逆撫でするの得意だね」

和美が呆れながら言った。駅の近くのコーヒーショップでアイスカフェラテを啜りながら。尚哉も少し呆れながら頷く。

「藤井さんって沸点低いんだもの。もう少しゆとりがあった方が人

生樂しめると思う」

アイスコーヒーを口にしながらシレっとそう返す。

「桜花ちゃんなりに楽しんでるよ。人のペースがあるんだからそう言わないで」

「ま、正直どうでも良いんだけどね」

「都さん…」

そう切り捨てられるとフォロー出来ないよ、と和美が情けなそうに声をあげた。本音を言っただけなのだが。第一、彼女の話をするためにここで話しているわけではないし。

「あのさ和美くん。最近…なんか変わったことある？」

「……………いきなり本題ですか？ソレはどういった意味で？」

「先に…………報告があるわ」

尚哉、和美を一瞥し仕切り直すとゆっくりと事務的なしゃべりで彼らに定期報告を行う。これは月例のもので一重の様子と九希からのものだ。私的に会う時も結構あるのだがそんな機会もない時は自分が九希から言付けられる。

「瀬尾との定例お茶会があつて、向こう側も新しい当主が就任したそうです。名前は瀬尾七希。若干23才。能力は不明。瀬尾の直系で…力は弱まっているとは言え、またいつ一重に刃向かってくるかは分からない。警戒を解かないように」

「へえ、でもここ百年睨み合いは続けてるけど向こうが手を出してきたことはないんだろう？そこまで警戒する必要性が感じられないな」

「尚哉、私は九希ちゃんじゃないから分からないけど…実際恐いのは能力者の末裔である瀬尾の人間の身体が邪者に乗っ取られてしまう事よね。だから監視はずっと続けるみたい」

監視、というか護衛というか。睚み合っている、協力しなければいけない（しかも一方的に）。尚哉も和美も自分も…納得はいかないのは当然。

「あと、私が仕入れた情報で遙佳が本家の系列病院に重傷で護送さ

れたって、聞いた？」

二人とも目を見開いた。驚くのも当然だ。尚哉と肩を並べる強い能力者である遙佳が重傷なんて自分も耳を疑った。しかも本家系列病院に護送されたって事は邪者による損傷。

「悠宇ともまだ連絡取れていないけど、どんな邪者なのか……九希ちゃんに聞いたら一重側の仕事だから判らないって。あの人が判らないなんて有り得る？」

一重側の能力者である真前遙佳（兄）と悠宇（弟）は自分と幼なじみで特に仲良かったから知り得た情報だ。遙佳はずっと自分の王子様で、悠宇はふざけてばかりで自分をいつも困らせていた。寂しい時はずっと側にいてくれた。今でも、時々連絡くれて。

そんな二人が急に音信不通になったのだ。一生懸命自分の力をフルに使って調べ上げたのがコレ。一重方の仕事をやっていたのは知っていたがまさか遙佳がこんな目に遭うとは。

「言う必要がないから言わないんだろ？それに一重側の仕事をお前が横取りしたら九希の立場が悪くなる」

「尚哉…わかつてるよ」

「わかつてない。どうせお前は今日俺らを集めて『自分達で解決しよう』とか言うつもりだったんだろ？冒険ゴツコしてる子供じやないんだからそんなバカなことを言い出さないでくれ」

「ひ、酷い………」

「酷くないよ」

尚哉は苛立ったように頭を掻きむしった。あ、怒ってる。

「つ、冷たいなあ。尚哉は遙佳とよく連んでたし、和美と悠宇は仲良かったのに……だから教えてあげたのに」

涙がジワツと込み上げてくるのがわかった。

「とにかく都さん、悠宇には俺から連絡取ってみる。心配だし。何かわかったらすぐ都さんにも連絡するよ」

和美が尚哉を抑えながらそう言ってくれたのがわかった。和美に感謝しつつ席を立った。そこにいたら泣き出しそうだったから。

「私、これから人と会っの！じゃ、ね」

「つ、冷たいなあ。尚哉は遙佳とよく連んでたし、和美と悠宇は仲良かったのに……だから教えてあげたのに」

あ、泣く。それが判った。

パツと手を出して都さん、と一度声を掛ける。目線をあげる彼女に笑顔で伝えた。

「悠宇には俺から連絡取ってみる。心配だし。何かわかったらすぐ都さんにも連絡するよ」

だが、まだムツとしている尚哉に目を合わせた都はすぐに席を立ち、逃げるようにこう言った。

「私、これから人と会っの！じゃ、ね」

「あ………」

「な、何？」

「気を付けて。またね」

やっぱり目線すら向けない尚哉に都はまだ涙ぐんでいた。可哀想に……。都は気が強いクセにそう言うトコ弱いよな。

「尚哉……都さんが言ってた遙佳の重傷って……桜花がメインの事件だよね？桜花大丈夫かな？それに都さんに言わなくて良かったかな？なんか罪悪感が残るよ」

「それで……バカみたいにヘラヘラしながら都のフォローしてたわけか？」

「ヘラヘラなんかしてないよっ！第一尚哉の言い方がきつすぎるだけで俺のは普通。コレが地です」

「ムキになるなよ。九希が桜花を選出したのはお前の性格のせいだよ。都に情に絆されて喋っちゃいそうだし俺がメインだと夜伽で喋っちゃいそうだし。その点桜花は喜んで都をハブるだろ？しかも俺たちはメインを差し置いて喋っちゃうのはさすがに躊躇うだろ？」

指摘が素晴らしくマツチしていて何も言い返せない。

言い返すのを止めて残ったカフェラテを一気に飲み干した。尚哉

は一息吐いて続ける。

「正直、桜花がメイソってのはお飾り程度だから俺らがやらなきゃいけないんだろうけど」

「うん。あんまり危険なこととして欲しくないし」

「まあ、都が関わらないから俺は安心だけどな」

「……………まあ、守らなきゃいけないのが一人減って、俺も安心だよ」

「……………九希ちゃん」

和美と尚哉に別れを告げてから間もなく白金台の九希の部屋を訪れた。人気のないその部屋に小さな声で問いかける。その相手がぴくりとも動かないことを確かめてからそつと彼の部屋に進入した。

九希は軽く目を瞑ったままソファに腰掛けている。

彼、一重九希は自分の兄であり主である。

5年前の冬を覚えている？九希の誕生日だった。自分は忘れることはない。彼と自分、一重の中枢の人間だけで行われた一重九希の当主就任の儀式。自分は九希と瞳を交換した。

夢のような出来事、幻だったかもしれないと時々瞳を触って確かめる。現実でありますように祈ることもした。大切な誰にも壊されたくない日のこと。

この右目は、一重九希の『力』を灯している。九希のこの右目は自分の右目で……。

何で九希がこんなコトをしたのか、わかつている。自分が一重には認められないほど弱かったから、同情された。九希が一重での自分の権力を上げる為に自分に瞳を与えたのだ。

だから、『力』も結界士としては有り得ないぐらいに強くなったね。これが、何もかもを持って生まれた兄が何も持たずに生まれてしまった妹への愛情だとわかっていて、それでも縋ってしまう。

「九希ちゃん、私……目が、視力がまた落ちたのよ」

「……………」

「寝てる……… wakeないよね？ 聞してる？」

「聞いてるよ」

「九希ちゃん、私…九希ちゃんの力を持っていられるほどキャパがないんだよ」

ゆつくりと瞳を開ける九希を見つめた。ぼやけて見えるその視界を更に歪める涙。プレッシャーで押しつぶされてしまいそうで、もう耐えられそうにない。

「約束まで…もう少しだ」

「え…？」

「もう少し、僕のモノだけでいてくれないか？ まだ離れていかれるのは寂しいよ」

冗談なんだか、本気なんだか、いつも解らないこの人の心の中。空気のようにつかみ所のない微笑みで交わされる。

「九希ちゃん、私だけ仲間はずれなの？ 藤井さん来てたんでしょ？」

「…………… 何のことだ？」

「和美と尚哉に遙佳と悠宇のことを話してきたの。二人の反応がちょっと不自然だったし、あと私が席を立った時に二人が喋っていた内容が気になったから見てたんだ」

「見てた？」

「私、読心術ぐらい使えるのよ？ 『ミヤコサンニイワナクテヨカッタノカナ』って和美くんがはつきり言ってた」

「へえ…何のことだろうね」

流石、一重総本家をたった一人でまとめる男。確かに和美が店で語った内容だけでは九希が絡んでいるとはわからないのだ。

だが、自分を差し置いて彼らを危ない事へと巻き込むのはいつも彼なのだ。誰がどんな仕事をしようと正直どうでも良いんだ。少しでも役に立ちたいという自分の思いと危険な目に遭って欲しくないという九希の思いは交わることのない。

「都、悠宇が…」

「え？」

「悠宇が会いたいつて言つてたよ。彼も傷付いている。優しくしてあげなさい」

九希の手の中にある紙を、ピラピラ自分の目の前で振ってみせる。
『ホーラ取つてご覧。取つたらこんなトコにいる場合じゃないよ。仕事が出来てヨカツタネ。暇だつたんだろ?』みたいに言われているようで凄く悔しかった。

悔しさに手が震えながらその紙を受け取る。下唇を噛み締めながら……。

「いいモン。勝手に私はやるモン。後で協力しろつて言つても遅いんだからーっ!」

悠宇の居場所の書いたメモを握りしめながら脱兎のごとく走り去った。チクシヨウ!

「桜花ちゃん、こつち!」

和美がキョロキョロしている桜花に手を振った。都と別れてからのことだ。桜花の携帯にメールを入れて同じ店に呼び出したのだ。2杯目になるコーヒーに口を付けながら桜花が挨拶し、和美の隣に掛けるのをジツと見つめる。

「尚哉、何? ケンカ売つてんの?」

「別に……。ただ、お前つて和美のことがスゴイ好きなんだろつなつて」

「なんで?」

「いや、もの凄い嬉しそうだったから」

「……………悪い? だって大好きなんだもん」

「悪くないよ。でもウザクならない程度にしておくといい」

もの凄い常夏の中にブリザードが吹いているような空間になつてしまつたが……こつちは都を仲間はずれにしなければならないつて事を少し考えて欲しい。イチヤイチャしたいのはこつちも同じなのだ。見せつけられてばかりいられるかつて。

「さて、本題に入ろうか。九希の仕事は承諾してきたのか?」

怒っている桜花後目にズンズン話を進めようとした。和美はいつものこと、とフォローせずに立ち上がって桜花の飲み物を買いに立つ。

「仕事は受けた。サポートに二人が廻るって聞いたけど……」

「ああ。お前は指揮を執ってくれればいいよ」

「……………私だって役立たずじゃないんだから！」

「俺達で済むと思うけど？お前の手を煩わせるほどじゃない。メインってそういうことだろ？」

嫌な言い回しをワザとした。桜花だってバカじゃないんだから、その言葉を読みとって顔を顰めた。和美がそれを後ろで聞きながら一呼吸置いて戻ってくるのを見つめる。聞かなかったフリというのが質が悪い。コイツは全くフォローする気がないらしい。

まあ、和美がフォローすれば桜花は調子に乗るから話はうまく進まない。和美が居ない方が楽だが少しぐらいフォローしてくれるくらいじゃないと本当に虐めてるみたいだな、つと後ろめたくなってくる自分もいた。だが、本題に入る前に桜花を蚊帳の外にしておきたいというのも本音だ。

「……………わかった」

桜花は小さな声で、浮かない顔をしてそう呟いた。

「じゃあ、取り敢えず仕事の概要を話すよ……………」

やっと近づいてきた和美がテーブルにカップを置くと立ったまま桜花を見下ろした。ニコツと笑ってそう切り出す。イイよな、コイツは笑ってりゃ許されるんだから。

憎まれ役はツライデスヨ。そう感じながら自分は天井を見つめた。

メモを奪って中味を見てびっくりだ。本日中に辿り着けたこと自体が驚愕ですとも。

鎌倉・一重総本家

高度で厳重なセキュリティ、高い塀の内に純和風の屋敷が見える。平屋建てのその屋敷。

一重九希の生家であり、自分の父親の実家である。

自分の姿と声を監視システムで認識、照合すると機械音と共に開門する。この機械的な門が一重の象徴だ。

本邸に入ることなく別邸の方へ歩いた。本邸の一重のお歴々にはできれば会いたくない。多分…向こうもお互いに。

「この部屋って…皐月くんが居るトコだよな」

眉尻を下げて唇を噛む。どういう魂胆だ？九希か、悠宇か、企んだのはどっちだ？

ここには藤井皐月の軀が安置されている。一重の中枢の人間の力が及ばない場所。だが、九希の力すら及ばない場所。一重の屋敷に九希は近づかない。それがわかつているのだから自分は安心して良い。ここには悠宇が待っているだけだ。

そう思っているのに、手が、足が竦むのは何故だろうか？この『一重九希』という人の影響力は自分が一番知っているから。

入るべき部屋の前で立ち止まって、ドアノブに手を掛けてから10分ちよつと。決心が付かないでいるとそ扉は中から開けられてしまう。

「都ちゃん、何やってんの？」

急に扉を引かれて、ドアノブに体重を掛けていたためそのまま身体が崩れるように倒れ込む。だがその手はいとも簡単に自分の身体を掴んで平衡を取り戻すように立たせた。

この長身の男が真前悠宇。九希の私兵に名乗りを上げている私達とは全く反対の位置にいる一重側の能力者。九希のために動いている自分達とは違う。

何が違うかって言えば一重側の能力者は政治やビジネスに関わるような仕事が多いこと。そして相手が邪者だけに限られていないことかな。人間相手にだって時には能力を遣う。呪いとか、洗脳とか…手段は問わないのが一重の能力者。そして九希の私兵は一重側の能力者として選ばれないほどの微々たる力しか持たない者か特殊な地位により一重の犬にならなくて済んだ者だ。自分は前者。尚哉、

和美、桜花は後者。数少ない九希の私兵。

悠宇と遙佳は一重の中でも有力な真前家に生まれ、本当なら一重の能力者として働かなくても良い地位を持っているが彼らの強い力を一重上層部が目を付けた。そして九希が自由を手にする代わりに、そう九希の代わりに…人質だ。

「都ちゃん？」

「なにやってんのはこっちのセリフよ！何で一重本家なんかにいるのよ！何で遙佳のトコにいないの？」

放心から意識を取り戻して悠宇に怒鳴り散らした。何で苛ついているのかわからない。ただ、ここに悠宇が居ると言うこと、つまり遙佳を一人にしていることが何か嫌だった。「実は軟禁されてるからさ」

いつも通りの軽い口調、そして笑顔で悠宇は言った。重大なことを。

「だって…アナタ好きに動いてるじゃない……」

「うん。でも『待機』命令が出るから動けないんだよね。遙佳の代わりに出たいのは山々なんだけど」

「出たい？」

「遙佳の敵討ちに」

ニツと笑った悠宇はもう何かを心に決めているようだ。この兄弟、仲が良かったがまさかそこまでとは。感じ取ったモノに嫌悪感を覚えた。同族嫌悪だ。

「都ちゃん、取り敢えず入ろうよ」

自分の身体を支えていた手がゆっくりと腕に掛けられた。少し屈んだ悠宇が目線を併せて『ネ？』と言う。唇をもう一度噛み締めて頷いた。

皐月の身体に触れた。まだ、目覚めの時には早い。そう感じ取って。

簡素な造りの部屋。理由は盗聴などを避ける為に仕掛けやすいモ

ノを全て排除されている為だ。窓もない。内線もない。あるのはベツドと簡単な応接設備、黒電話（普通の内線の付いたようなデジタル電話は盗聴され易いからアナログ電話なんだって）そして水場に繋がる扉のみ。安い空調の音が響き渡っている。

「なんでここに私を呼び出したの？」

「都ちゃんは遙佳に会いたいたろうって…思ったから。俺は外に連絡取ることできないし。だから九希にお願いしました。ナンカヘン？」

「……………もしかして…勘違いだったらゴメンナサイ。私を巻き込もうとしている？」

「ウン。遙佳の敵討ち一緒にやろうよ。っていうかナオリン貸してよ」

しかも必要なのは『谷口都』じゃなくて『飛澤尚哉』かよ。まあ、遙佳に匹敵する力を持つのはヤツしか思い当たらない。悠宇は防御関係の能力が皆無だし。

「俺、結界とか張れないから都ちゃんの力も必要だと思ってるよ」

「思ってたなかったらマジクロス」

「イヤーンコワイ！」

この大馬鹿者！呆れてそれ以上口を開く気になれなかった。

「じゃあ、ナオリンはヨロシクね」

「……………今連絡取ってみるわ」

携帯電話を取り出して部屋の隅に寄った。電波がここだけ入るのだ。数回の機械的な呼び出し音が鳴って通話が始まる。

『都？何？』

「尚哉？やほー」

昼間の会話を思いだして急にギクシャクした口調になってしまう。自分も電話する前に思い出せよ！遙佳の敵討ちはもう断られたんじゃないか…。

「あの…え……………」

『うん？』

尚哉の声と共にザワザワした外の音が聞こえてきた。女の声・藤井桜花の声だ。ちょっと待て、今……………もう23時廻ってるぞ。

『ミヤコサンニイワナクテ……………』

アレだ。そう思った。自分に内緒の九希の依頼。

「尚哉、今忙しいの？」

『……………大丈夫だよ。どうした？』

少しの間と優しい声。こんな時はウソを……………ウソばかり。

「都ちゃん、代わって」

悠宇が肩をポンと叩いた。素直にその電話を渡すと自然に流れ出てくる涙を拭って小さく声を漏らす。通話相手に聞こえてしまわないように。

悠宇は自分の頭に手を置いて通話を開始する。

「コンバンワ〜尚哉君。悠宇です」

『お前、どうして都と一緒に居るんだ？行方不明だったんじゃないか？』

「ここは一重の屋敷の中だし」

『……………ああ。そういえば……………遥佳のことはご愁傷様』

「俺たちが失敗したの知ってるんだ？」

『いや、ちよつと都に聞きかじっただけだよ。大怪我したとしか聞いていない』

「そつか。ねえ…ちよつと協力してくれない？」

『ダメだな。その仕事、多分俺らに廻ってきたんだ。つまりもう一重の管轄から外れてる。九希の仕事になったんだ。一緒に仕事するわけにはいかないだろ』

「……………そつかあ。なんだあ」

『あ、悪い、話途中だけど……………』

悠宇が携帯電話と睨めっこ始めた。通話が終わったんだ。

「どうしたの？」

自分の頭を撫でていた腕がいつからか強ばったように動かなくなっただけを気付いて。

「都ちゃん、向こうで何かと接触した音が聞こえたよ。何かあったんだ」

「悠宇、それって……私がハブられてる仕事！」

「ハブられてるの？ダサ」

「それ地雷っ！それ以上言ったら協力しないっつ。交渉決裂！」

「それなら今、アイツらが片づけているよ。片づけられないならもう……それこそ九希が出ていかないと無理だよ」

絶望すら、悠宇の顔に浮かんでいて、本当に悔しいんだろうな。

どうして自分達の力は誰かに管理されているのだろう？勝手に遣ってはいけなんなんて、何て不便で迷惑な力。

自分達の無力さに、打ち拉がれてしまう。

「都ちゃん、こんなトコに呼び出してゴメンネ。今のことを忘れて良
いよ」

「悠宇……」

「ところで、こんな時間になっちゃったからには泊まっていくんでしょ？部屋用意させようか？」

「うっん。できれば……ここにいさせて。皐月くんの様子を見て行きます」

「ああ。まあ、会いたくない人も多いだろうし朝誰にも見つからないうちに帰ると良いよ。煩いこと言われたくないのはお互い様だよ
ね？」

もう憂いの顔はしていない悠宇の言葉、私達って哀しいな。

「あ、ちよつとゴメン」

ポケットから悠宇が携帯電話を取り出し、電波の良い方へ歩いた。
急ぎの電話のようだった。

「……え？そんな！……わかったよ。わかった、今から向
かう」

通話を切った瞬間の悠宇の泣きそうな顔が印象的だった。何が、
彼にそんな顔をさせたのか、興味があった。

「何？……誰？」

「天下の九希様」

嫌味を混ぜたその言葉。そして嘲笑を浮かべるその表情。九希は一体何を言ったというのか？悠宇も……彼もまた自分を除け者にして尚哉や和美のチームに入ってしまったのか。

「九希がさ、次の仕事を一重からわざわざ持ってきたんだって。九希は手が離せないから俺にやれって。遥佳の安否だって殆ど伝わってきていない俺に！アイツはバカにしているのか？……なあ、都」

九希が、何を考えているのか。この瞬間から本当にわからなくなつた。

泉水のよく使う白金台にあるスタジオでの撮影が終了して、長引いてしまった分帰るのが遅くなってしまった。泉水のプライベートの写真集のお仕事に呼ばれて喜んで参加したわけだ。時間も忘れて撮ってもらつて……まあ、実家から飛び出て一人暮らしの自分には帰宅時間を気にする必要もない。

メイクを落として、同じ写真集に載るモデル仲間が次々と帰つていたり、呑みに行ったり。（私は行かないけどね）

「さて、と」

今日は泉水拓也と食事の約束がある。あの人と喋つてると楽しい時間が過ぎて……夜、良く眠れるから。

口紅を塗り直して急いで立ち上がる。待たせすぎかしら？と時計を見ながら。

扉を開けてスタジオへ急ぐ。早足になつている自分が妙に可笑しかった。別に、好きな人に会いに行くわけではないのに……。自分の好きな人・飛澤尚哉に泉実は似ている。話し方とその独特の雰囲気。

「ゴメン、遅くなっちゃった」

スタジオの扉を勢いよく開けて相手の姿を確認する前にそう言った。カメラを弄っていた泉実は急に大人びて笑う。（もともと……大人の人だったね、軽口聞いているから忘れてた）

「行こうか。何食べたいんだっけ？」

「あ、ハンバーグ！」

「ハンバーグ？お子様ランチか？」

「違うよ！おいしいハンバーグが食べたいの！」

「……………おいしい、ね。ファミレスじゃダメだよな？」

「ふぁみれす？」

超嫌そうにそう言うをやっぱりダメか、とほほと泉実と言う。

ホントはわかってる。お金無いんだよね。新しいカメラを買って言うてたものね。お金が湯水のように出てくるのなんてうちの一族だけなのだ。それが最近ようやくわかってきた。

「良いよ！デザートも頼んで良い？」

「オツケーオツケー！そこなら何でも頼んでください」

「やったあ！」

デザートに本気で喜んで手を挙げていると自分が入ってきた扉がもう一度勢いよく開かれる。

「なっつきちゃ〜ん、あ〜そ〜ば〜」

そう言うて現れたのは制服を身に纏った藤井桜花だった。一度二度…一重の公式行事で見かけた、もしかしたら挨拶ぐらいはしたところあるかも知れない。それに尚哉様と同じ学校に通っている。彼女の情報がタイプライタで弾き出すように頭にアウトプットされた。

とどのつまりが顔見知り程度。仲良くはないはずだ。

「桜花さん？で間違ってないですよね？何か…あつたんですか？」

こんな風に彼女が現れる理由は…思い当たるとしたら我が主・尚哉の身の安否。

「何で？奈月ちゃんと遊びたかったから来ただけだよ！あ……………もしかして援交でもしようとしたの？奈月ちゃんカワイ〜んだからそんなことしなくても十分モデルで稼いでいけるわ。それともそれじゃ足りないくらいにお金が必要なの？それなら私が貸してあげるから考え直して！ネ？」

一気にまくし立てる桜花に唖然とする泉実を見つめ、今日は食事

やめようか……どちらからともなく話は進んでいった。

「で？何の用なの？……藤井桜花さん、ほぼ初対面のアナタに私のプライベートを口出す権利はないと思うわ。誰から、言われたの？」

やっぱり怒っていると思われる奈月は桜花をスタジオの外に連れだし、こう切り出した。別に人の恋路だろうが何だろうが邪魔する気はない。所詮他人事なのだ。だが、彼女の身の振り方が自分の仕事の善し悪しに関わってくるのだ。だがやはり彼女にもその『仕事』の内容を喋ることはできない。ならばやはりこの方法が一番良いだろう。

「尚哉に」

につこり微笑んでそう伝えた。ホントは九希に、でも彼女には一番コレが効く！

「アナタは今からすぐに帰宅して、暫くスタジオには出ないこと。帰宅に関しては私がマンションまで送ります。これは命令よ」

駄目押しで彼女は随分怯んだ様子。楽勝かな？と感じた瞬間に彼女は反撃をしてきた。

「桜花さん、アナタに守ってもらうほど私は弱くない。一人で帰れます」

「尚哉からの依頼だから、果たさせてくれない？」

「結構です。私、アナタと仲良くできるほど心は広くないの」

「……私が……尚哉の婚約者だから？大変よね、飛澤家は。尚哉は血筋を絶やさない為の子供と血筋を発展させる為の子供を作らなければいけないのよね？」

つまり、前者の子供の母親が奈月で後者が自分だ。そして正統な妻になれるのは自分。奈月は他に嫁ぐことも決まっている。本当に真から愛している男の子供を作って……作ったら作っただけで捨てられてしまう、そのやり口。正直賛同できないし、自分は他の人を愛しているから更に尚哉と結婚する意思は薄れていた。

だが、尚哉の思い人・谷口都。彼女にも婚約者が居る。それが自分の愛する人・沖野和美で……更に話を複雑にしていると言うこと。

「ケンカ売ってるの？つまり、アナタとは少しも一緒に居たくないわけ！諦めて帰ってください」

「………煩い小娘ね。私は構わないのよ。アナタが尚哉の妾として存在しようとして別に逃げてくれても構わないし」

微笑んだ。彼女は私の地雷の周りで小躍りしているのだ。誰も好きでもない男との婚約を喜ぶはずがないと、自分の愛してる男が他の人の愛する人間と同一ではないということを早く気付いてもらいたいものだ。ともかく、奈月は自分の敵だ。

「尚哉を独占させてあげられなくてゴメンナサイね」

奈月の表情がどんどん青ざめていくのがわかった。それと共に彼女の口調が冷静なものになっていく。感情を殺したんだ、一重の人間らしい判断だ。

「桜花さん、アナタは私の敵ではないわ。私の本当の敵は他にいるから。………行きましよう。送ってくれるんでしょう？」

訂正・感に障る上に一言多い小娘だった。

スタジオを出ると空がザワザワしていて嫌な感じがまとわりついてくる。遅かったか？

今回のターゲット・加藤鈴香。このスタジオのADをしている。昼間は普通に生活をしているのだが深夜、自分がターゲットイングした人間を付け狙って辻斬りを働いている。犠牲者はターゲットとされた人間と目撃者全て。

今回のターゲットとされたのが飛澤奈月嬢で、だから自分はここに来たのだ。彼女を安全な場所に逃がす為に。今回の被害地域はスタジオの半径3km以内の高層ビル街周辺。

本当なら事が起こる前に彼女を逃がすことができたはずなのに……自分がムキになってしまったからだ。

「あ、加藤さん？」

奈月が呟いた。影から見ていた和美が走ってくる。

自分も有無を言わずに奈月の手を引っ張って走った。高層ビルの合間を練って。

「な、何なの！事件なの？理由を言って！」

奈月の声は風にかき消されてしまう。ビル風が向かい風で走るのに障害になっていた。和美は足止めをしているのだろうか、やってこない。ああ、これでターゲットに接触してしまったことになるのだろうか？任務失敗だ。

落ち込みながらも尚哉と落ち合う場所に走った。よくよく考えてみるとどうしてか尚哉が指揮官のようなポジションだ。

うでを組んで自分を待っていた尚哉を見つけ……………やはり自分は安堵した。

彼は強いから。

「……………あ、悪い。話途中だけど」

自分の名前を呼んで走ってくる桜花に気付き、自分は通話を切った。桜花……………というよりはその後ろに連れている予定外の者に。

自分の妹同然に育った従妹・飛澤奈月。

「何やってるんだ？」

「アナタこそ何やってるのよ？悠長に電話？こっちは大変だったんだから！」

息を少しずつ正常に整えながら、桜花は言い返した。

奈月を……………部外者を巻き込まないというのは第一条件ではなかったのだろうか？

「少し時間をくれ。都が動けないように手配するから」

「はあ？」

「……………都が……………悠宇と一緒にいる。悠宇から間もなく事件の真相が伝わる。足止めをするよ」

「足止めって……………なんでアナタも……………九希も。そんなに谷口さんのことを閉じ込めようとしているの？自由にやらせればいいじゃ

ない？アナタなら守ってあげられるでしょう？」

「馬鹿言つなよ。アイツは自分から危険な地域に飛び込んでいくんだ。そんなのいちいち守ってられるかよ」

「……………確かに。まあ、別に良いけどね」

桜花は目を反らしてそう言った。なるほど、奈月を気遣ってか。

しかとして携帯でサツとメールを打った。九希へ、だ。心配事は今のうちに対処しておくに限る。

「で？何があつたって？」

「加藤鈴香とブッキングしちゃった。ゴメン」

「和美は足止め中か？危険なコトしてるね。あいつに抱えきれるか？」

「ゴメン……………とにかくターゲットである奈月を隠すのが先かと……………」

取り敢えずここで桜花を責めても仕方ない。だが和美では荷が重いだろう。何せ遙佳で重傷。和美なら確実に殺される。

ここはまだターゲットの活動地域範囲内だ。奈月を安全に出すことより自分達の側に置いた方がよいかも知れない。高層ビルを見上げた。正直こういう場所は戦いにくい。

ふう、と一回ため息を吐く。

指揮官に桜花を選んだのはやっぱり失敗だったと思うよ。手段を選ぶ人間はダメだ。

「奈月、こつちにおいで。事情は話せないんだ」

「……………はい尚哉様」

手を差し伸べるとそおつとその上に奈月の緊張した手が置かれた。久々に会う従妹は自分を愛しすぎていて重たいぐらいだった。

そのまま身体を引き寄せてお姫様だっこをすると桜花に合図して走り出す。奈月は驚いた顔をしたが何も言わなかった。

「尚哉、こつち！」

和美の姿も見えてきた。加藤鈴香に話しかけている。邪者に変身していないのには驚いた。

「和美！」

「あ……尚哉、桜花。奈月ちゃんも」

顔を上げた和美と敵が増えたことに反応してか、加藤鈴香の顔が変化する。

いけない！

「和美、離れろ」

「え？」

奈月を降ろすと和美の元へ。その瞬間に手から光弾を放ち桜花も咄嗟に走っていた。その瞬間に大きく空間が歪む。

三人が消えた。それが自分にとっての絶体絶命を意味したと言うこと。

自分を庇う為に側に置かなかった尚哉は考えていたのだろうか？加藤鈴香だった者に対峙して彼らの仕事の内容を理解した。この女には大きな力がある。自分達では敵わないような……。だからその力の対処・対策を考える為に偵察をしていた。そんなトコだろう。この任務は危険なのだ。だから谷口都も外された。

彼女は一重九希の一番大切なモノだから。

「辻斬りの加藤さん、一人目の犠牲者は……前日にアナタのことを横領していると言ったヒトだったね」

口にしてから後悔した。あおるようなこと言っただけでどうするんだと。だが、自分には彼らほどの力がない。人間として理性を持って接する、これしか考えられない。

鈴香は理性のある顔を少しした。だが次の瞬間に異形へと完全に変わる。大きな黒い軀。牙のようなもの、手は辻斬りの使用した凶器の特徴に似た大きな鎌のような右手に、槍のようにとがった左手。これで引き裂いたのか……。

自分は失敗した。

鈴香の魂は邪者に喰われてしまったのだ。

とどめを刺してしまった。口を覆い、震える。それが恐怖からか、

哀しみからか、絶望からか……。

「に……げなきや、尚哉様のこと……報告しな……きゃ」

腰が抜けたようにストンと座り込んだ。力が入らなくて立ち上がることもできない。鈴香だったものの牙から滴る液体がコンクリートを溶かしその匂いが鼻に付く。

「あ………」

声が出なくなった。叫ぶことすら……。

その瞬間自分の身体が後ろに引きずり込まれるそれはスゴイ不思議な感覚だった。

壁に塗り込まれるような、だが痛みも何もない。

「……奈月、大丈夫？」

「………」

鏡が後ろにあった。自分はこの鏡から引きずり出されたんだ。

ここは……一重九希の自室だろうか？初めて見るその部屋に、だが確実に安堵を覚える。

「喉やられた？」

「……あ、ん………」

「少し……休んでいなさい。話はゆっくり聞こう」

自分の身体を支えてソファまで連れて行かれた。奥からもう一人出てきた。お茶と蒸しタオルを持って。

一重伊織、一重九希の実の妹であり一重側の能力者であり……一重九希の婚約者だ。自分が尚哉に心酔しているように伊織も九希には相当尽くしている。

長く綺麗な黒髪を耳に掛けて自分の顔に掛からないようにしながらタオルを喉元に当てた。それを受け取る。まだ、自分の手は震えている。だが……早く言わなければ。

「……あ、尚哉様達が………」

伊織がコクンと頷いた。掠れた声で続ける。

「加藤さんに異空間に飛ばされ……たんだと思………」

「そうか……。巻き込んでしまってすまなかったね」

「いいえ……私が……」

本当は自分が尚哉を守るべき立場だってコト、そして加藤鈴香を人間ではなくしてしまった。もう取り返しの付かないこと。

嗚咽が込み上げて……涙が頬を伝うのを感じた。悔しくて、悔しくて……。

悠宇が出ていって……。自分はすぐにでもここを発たなければいけないことを悟った。悠宇を引き離して、こんなトコに自分を遠ざけて……東京でアイツらは何をやっているって言うんだ。

「帰ろう」

そう言っつてその扉に手を掛けた。

……開かない。鍵が閉まっているのか……。閉じ込められたんだ。

「どうして？……どうしてこんなことまで！」

その時、部屋に置いてある黒電話がけたたましく鳴り響いた。恐る恐る受話器を取る。

『都？』

「九希ちゃんなの？」

『そうだよ』

「尚哉達はどうしたの？無事なの？」

『……いなくなっちゃったよ』

「はあ？どういうことなの？」

まず……状況を自分に説明する九希が怪しいのだ。こんな状況下で『都の察したとおり、桜花に任務を与えたが……失敗して行方不明だよ』

簡単に言う。前々からこういう言い回しが多い人だったけど洒落にならない。

「そつちにすぐ向かうわ。人手が必要でしょ？」

『僕はすぐに動くつもりは全然ないんだ。それに……都、命令だ。暫くそこにいなさい』

「はあ？嫌よ！何で？」

『お前がこつちにいると足手纏いだよ』

九希は容赦なく自分を切り捨てた。言い返せなくて、悔しくて、そのまま反論せずに受話器を降ろす。ここは監視の目もない皐月の部屋なのだ。落ち着け。

白い壁、小さな扉、間接照明、電話……そして皐月の身体が置かれているベッド。この部屋に存在するもの。これらで外に出る為に利用できるもの、それはコレしかない。

「皐月、皐月くん！起きてよ」

まだ修行の終わっていない皐月を起こすと言うことは賭だ。一か八か、出られるか出られないか……。自分はなめられているのだ。男ではないこと、能力者ではないこと、だから脱出なんてできない。たとえ縛り上げなくても閉じ込めるだけで十分だと。

「起きて！桜花だって大変なのよっ！」

九希は自分は助けるつもりはないと、そう言ったのだから。

「……………誰？都さんじゃないよね？」

妙な確信。

谷口都と同じカツコウをした女にそう問いかける。

ここは自分の意識下だ。修行中である自分の中に入ってくるのはシンクロできる都以外にはいなかった。今までは。

だが、その女は今までの谷口都とは全然違う気を持っていた。鋭い刃物のような……いや、切り出したばかりのダイヤモンドのようなヒト。そんな印象。

姿形は都と同じものののに。その女は自分を見下すように笑う。

「皐月、まだ修行が終わらないわけ？」

「アナタは誰？」

「私は都よ。アナタも知ってるでしょ？」

「俺の知ってる都さんとは喋り方も性格も違うように思えるけど？」
「うっん、ね」

にぱつと笑って誤魔化されてしまった。まあ、実際彼女が誰であろうと…目的の方が重要なのだから。

「で？何の用？」

「私と取り引きしない？」

「……………なんで？」

「“どんな？”って訊くのよ、そう言う時は」

そんな取引は必要がないと思ってるから、敢えてそう言う訊き方をしたんだってば。

「私が貴方の力を引き出してあげるわ」

「どうして？」

「“どうやって”じゃないの？」

「どうしてそんなことをするんだ？」

「……………私をお願いをきいてもらうからよ」

「なら取引はしない。俺は誰にも従うつもりはないよ」

「貴方の姉上、ピンチなのには？」

「えっ？」

その時だった、自分の身体に接触する誰かの声。

『皐月、皐月くん！起きてよ』

それが本物の谷口都の声で、それと一緒に胸に打ち付けられる力は…彼女が拳で自分の胸を叩いているから。自分の修行の進度を知っている彼女が自分を起こさなければいけないほどの事態が……………。谷口都と同じ姿の彼女をみつめた。

「気が変わった？ん？」

だからといって自分がここから何が出来るって言うのか……………。

『起きて！桜花だって大変なのよっ！』

その都の声で自分の気が揺らいだのは否めない。その隙を付いて彼女は言った。

「交渉成立だと思うので…」

そして彼女の腕は自分の身体へのめり込んでいく。犯されていく…。やめて。

「臯月くん！」

「……………痛いよ」

胸を思い切り叩いた時、臯月に反応があった。ゆっくり起きあがるその姿を見てもまだ信じがたい。だってまだ修行を切り上げられるような時じゃないんだ。

数年掛かるって言われていた。まだ眠りの周期に入って一年も経っていない。

「そんな驚いた顔するなよ。君が呼んだんでしょ？」

そう言って臯月はガチガチに固まった身体をほぐしながら起きあがる。

まだ信じ切れない自分はそおと彼の身体に触れた。こんなコトってあるのだろうか？

「桜花が……………どうしたって？」

奇跡の理由が、彼のその言葉で理解できた気がした。双子の繋がり、彼の……………思いを自分は知っている。自分の奥底に存在する思いと被るその心は桜花にだけ向いていて、火事場の馬鹿力のようなものだって理解した。

「桜花と和美と尚哉が行方不明よ。九希は助けるつもりはないって。それに私も動くなって……………」

言った瞬間に目頭が熱くなって涙がこぼれ落ちてきた。

悔しかったんだ。無力な自分が。選ばれていない自分が。大切な人達すら助けてあげられないこの手が。

「都さん、泣かないで。大丈夫だから」

「泣いてないっ！」

「泣いてるよ、思いつきり。その目から流れ出てる水は何だ？意地張るのも大概にしるよ」

「汗よ……。君を起こすのが大変だったのよ！」

自分の言葉に自分ですら呆れてしまう。臯月は横向いてプツと吹きだしているし……。

「ともかくっ！私をここからだして…ねえ、お願い」

皐月に縋り付くように懇願した。形振り、そんなモノはとつくに捨てた。

皐月の肩を掴んでお願いする。

九希があんなことを言った本当の理由を考えなければいけない。

『助けない』じゃなくて『助けられない』だったら。

桜花や尚哉や和美を見捨てて普通に生きてられるような人じゃないって自分が一番知っている。近くて遠い場所で見えていたから。

九希を助けてあげられるのは自由な位置にいる自分以外にいない。

「行くよ」

目の前に差し出された手と、皐月の目を交互に見つめて重要なことを問い質した。

「…できるの？移動能力使えるようになったの？」

「……………ん、多分」

その言い方に一抹の不安を覚えながら皐月の手を取った。自分の選ぶ道はコレしかないのだから。

その瞬間に大きく空間が歪む。黒い闇が自分達を包み込み…そして…………。

「普通ね」

桜花が呟いた。その場所が今までいた場所と全く同じ状況であるから。

だがそこは違う空間に存在する。今まで一緒にいたはずの敵の姿も、奈月の姿も、それどころか何処にも人が存在しない空間。人も邪者も。

場所自体は動いていない。でも時は干渉されている。

誰に？そんな大きな力を持った邪者ではなかった。ならばこれは九希の言うとおり黒幕の登場なのかもしれない。置いてきてしまった奈月に不安が残る。

「尚哉、奈月ちゃん…大丈夫かな？」

つつい顔色を伺いながら尚哉に話しかけた。尚哉の眉がピクリと動く。ああ、やっぱり怒ってますよね。

（でも俺のせいじゃありませんて…）

睨まれて肩を竦める。八つ当たりも良いところ。会話にもならない。

「……………あいつだって…能力者の端くれだ。逃げてくれなければ困るよ」

飛澤の名を汚す気か？みたいなセリフに些か呆れてしまう。もつとちゃんと心配してあげて欲しい。奈月の思いすら罪みたいな言い方をするんだ。

「どうでもいいがこつちだって絶体絶命みたいなモノだぞ。自分達为一体どういう状況に置かれてるか位はわかると良いんだが……………おまえの御神託は？」

「俺のは御神託じゃなくて直感。今調べてますから……………」

だからそんなに眉間にしわ寄せないでくださいな。

尚哉は自分よりも優れた能力者だ。それだけは偽りない事実。だが自分が秀でてる部分もあるのだ。『感覚』『直感』とかいうものだからここで自分達の状況を調べ上げるのは尚哉ではなく自分なのだ。

目を閉じて感覚を研ぎ澄ませる。全神経を周りに溶け込ませていけば自ずと伝わってくるその存在の意味・意義が。

「ここは……………」

絶望を感じた。ここは柔い結界の中だ。

「……………時間軸とは切り離された空間だ」

「それくらいわかってるよ。しっかりしろよ、御神託！」
だから神じゃないって。

実際の生き神を知っている人間のセリフとは思えないセリフに更に呆れてしまう。

さっきから黙りの桜花の様子も気になった。責任感じて悩んでるのではなからうか？

「人間が万能じゃないって知ってるだろう？俺は人間だ」

神・九希と一線を引くセリフに今度は尚哉があきれ顔した。失礼なセリフだと気づきそれ以上墓穴を掘らないように目を反らす。いけない。ここに都か伊織がいなかったことに感謝した。二人が聞いたらもう二度と口を利用して貰えないかも知れない。当の本人はともかくとして。

「つまり、時空間の中だよ。ここは何処でもないココで、時空間の中をあてもなく自分達だけ閉じ込められて漂わされている」

「謎かけみたいで抽象的すぎてワカリニクイ」

「パラレルワールドに閉じ込められて…もとにいた場所からズンズン時間軸だけ離れていつている。ここで結界が解けてしまつたら俺達は時間軸の水雲。せいぜい生きながらえたかつたら結界が途中で解けてしまわないように祈ることしかできないね」

「お前…嫌なこと言うな」

「じゃあ尚哉は時空間移動できるの？俺は出来る人間を一人しか知らない」

たった一人だけ、許された人間を知る。神にも許されていない禁断の領域。

「皐月…」

桜花が思いだしたように呟いた。そう、藤井皐月以外にここからの脱出を謀れる者はいない。その皐月だって修行中で力を制御できない。となれば後は術者を締め上げること以外にここから出る方法はないと。そこまで三人の考えが一致して目を併せた。

「和美、残念ながら都は足止めしちやつたんだ」

ちよつと浅はかだったと尚哉が続けた。

「そつか…外から敵を倒してくれるくらい力を持つてる人間って…」

……悠宇と都さんだったら出来るかもって思っただけだな

「あいつ時々ムチャクチャやるし足止めさえしてなければ絶対来る。でも今回ばかりは無理だ。本家に物理的に閉じ込めたんだ」

「尚哉も無茶するね」

「となると…敵さんが痺れを切らして自分からこの中に入ってきてくれるのを待つしかないのか？」

桜花がチツと舌打ちするのが聞こえた。

「桜花？」

「カズミちゃん！ね、どうして九希が助けてくれるとかは言わないわけ？アノヒト全知全能の神様なんでしょ？なら私達を助けられる可能性が一番高いのはアノヒトでしょ？」

「一重九希だからだよ」

自分は当たり前のように言った。だがそんな答えではやはり納得してはくれない。桜花は癩癧を起こして持っていたカバンをアスファルトの地面にたたきつけた。

「俺たちはコマで代わりはいるけど、アノヒトの代わりには誰もなれない。だからアノヒトが助けに来るなんてあり得ません」

「でもっ！………それじゃあ私達って何？」

「道具かな？少なくとも代わりはいると思われてるよね？」

尚哉を振り返ってそう言うのと彼もやはり大きく頷いた。代わりが居ないと思われているらしき某『谷口都』嬢には足止め・畏・ハブに全力を尽くしても自分達を全力で守ることはしない。っていうか、神を守る為の私兵が守られる神に助けられるなんて自分は嫌なんだが（それなら死んだ方がマシだな）……桜花とは考え方が違う。多分育ちのせいだな。

「まあ…今できることはケンカじゃないよ」

「そうだな。誰が助けに来てくれるとしても…来てくれないにせよ、やることは一つだ」

「尚哉は誰が気付いてくれると思う？」

「都か悠宇か……奈月が生きてれば奈月。まあ、都のマンションの前とかが妥当じゃないか？そんな遠くないし」

「じゃあそこで」

二人で納得して桜花の方へ向き直った。

「都さんのマンションまで歩くよ。都さんが歪みに気付いてくれた

ら助かるから。そこで体力温存。結界を張って出来るだけ動かないようにしよう……………ね？」

こう言った自分達に対して桜花はたった一言低い声で。

「有り得ない……………」

斯くして谷口都所有のマンションのある高輪までの移動を余儀なくされた。

「都？都ちゃん？みくやこちゃん」

口を押さえてしゃがみ込む自分にふざけた声のかけ方で彼、皐月は話しかけた。

ここは…………自分のマンションの一階エントランス。皐月の空間移動は成功した。かのように……………見えた。いや、実際自分はココにいるのだから術は成功している。だが自分はもうダメだ。

「気持ち悪ひ……………」

酷い酔い方をした。足下からクルクル回って落下するような感覚にもうどうにもならない吐き気を覚えてしまった。

「そんなにダメだった？」

「ん……………ごめ……………口」

開けない。と続けようとしたが続かないでそのまま……………おええええええええと胃の中ものを吐き出してしまった。大失態である。

気を取り直して……………いや、まだ都は復活していないが、桜花達の探索を行うことにした。

ふらふらな都はマンションの中庭の噴水に腰掛けさせた。時間感覚があまりないが腕時計は深夜の2時手前だ。少し離れて自分は念を飛ばし始める。

「……………さ、つきくん？」

「ちよつと黙ってて」

ここに着いたのは自分の失敗か？絶対意図してここに着けたんだ。桜花達が近くににいるから。ならば自分は桜花を見つけられる。腕を

開き総てを受け止めるように自然の流れに身を任せた。

中に入ってくる感覚を素直に受けければ良いんだ。

「あつちか……」

なんとなくの方角を突き止めた時、側でパンツ！と大きな音がした。目を開けて振り返ると都が下を向きながら頬を叩いた後だった。決心を固めたような顔をして…頬を少し腫らしながら立ち上がると「違うわ」と続けた。そんな時は彼女が神に見える。

「皐月くん、ここに結界の切れ目がある」

「どうということ？」

「ここにあるよ」

理屈じゃない、そう言っているかのように繰り返した。

そしておもむろにそこに手を突っ込んで気配を探る都をちよつと微妙な面持ちで見つめた。手の先が消えていて不気味なのだ。

「時空間が切り離されているね。結界解くのは簡単だけど時空間を繋げなければ結界解いただけなら大変なことになる……よねえ？」

最後に急に同意を求められて身体をビクつかせた。

「ああうん」

「じゃあ……時空間繋げて貰えます？」

「は？そんなの出来る訳ないだろ？時空能力者って普通は空間移動とかする能力者じゃん」

「だってやらなきゃみんな助からない。やれれば、試さないで諦めるの？大丈夫、あなたと繋がってるモノが向こうにあるんだから……」

「……何があるって？」

「桜花とあなたは一对でしょ？絶対に引き合えるハズだから……私は助けたい。だから離れ業でもやるわ。ここで時空の結界を保ちながら手探りできるだけの穴を開放してあげる。私と繋がっていればこの場所にいられるわ。向こうを探せたら皐月くんはこっちまで引っ張ってきて！そしたら結界をこじ開けるから」

見事に強引な作戦。でもそれしかないって、はじめからそのため

に自分を連れてきたのではないかと思ってしまうくらいに。

そしてこれはどちらが欠けても、神であっても代わりの出来ない作戦だった。一族一の結界士・谷口都とこの世で唯一の時空間能力者の自分と。

「わかった。やろう……………」

まあ、狭い東京都内で結構位置的には近い位置にある。

六本木からの移動は簡単に済んだ。都のマンションの前に着くと、和美が不機嫌を顕わにし足を投げ出して座り込んだ。温厚な彼がそんな態度に出るのは至極珍しい。尚哉はすっかりシカトして辺りを散策している。事実上二人にされて……………いつもなら喜ぶけどこんなに刺々しい人、どうやって接すれば良いんだか……………。

「か、ずみちゃん」

「え？何？」

「どうしたの？」

「別に……………。体力温存しなきゃいけないから弱い結界を張る準備をしてるだけ。桜花は何もしないの？」

「え……………」

何もしていないのは尚哉も一緒だと思うのだが、問われて焦った。何か……………することはないのか？そう焦って探しても簡単には見つからない。何せ、尚哉や和美と比べて微力な力しかない自分は。

「……………尚哉は、結界の綻びを探してるんだね……………」

ボソツと言われたことに心が痛む。尚哉も何もしていないわけでは無いんだ、そう念を押されて。自分の、できること。それは何だろう？ここに在る意味を、護られているだけではない確たる証拠が欲しくて。

「結界……………私にも張らせて」

「え？……………やめてよ、そんな恐いことできません。桜花は結界下手じゃん？」

一笑して否定されてしまった。確かに……………結界は下手だ。

「じゃ、じゃあ……………」

「落ち着いて、桜花。君の頭の良さはこういう時に使おうね」

「え？」

「臯月を起こせるかな？」

『起こす』という単語が頭の中で踊った。答えは無理、だってそんなテレパシーみたいな力は持っていない。

「やる前から……………諦めたでしょ？」

和美は大きくため息を吐いた。そして一回目を伏せて独白。

「あつちは諦めていないみたいだけどね。もう少し……………待つてなさい」

時々、和美の言葉が理解できないよ。唇を軽く噛んで言葉を呑み込んだ。

「美味しそうな臭いがすると思ったらこんなに上玉」

悦の声が耳に伝わってきた。人の言葉を介し、人の姿をとる、その正体は人間在らざるモノ。その名を邪者という。ゴクリと生唾を呑み込む。この邪者は結界に干渉したのがばれてここに駆けつけたのだろうか？それともただ能力者の臭いに惹かれてここに辿り着いたというのか？

「その結界に触ろうっていったって無駄よ、結界士でもないなら何も媒介なしには解けるわけもないわ。それは私が張ったのよ？」

どうやら前者のようだ。コイツがああ三人の相手。……………そして遙佳と悠宇を倒した女。

姿形はそこらに転がっているOLと同じ。でも明らかに違うのはその瞳。充血して異常な色をしている。結界士ナンドス。とか自己申告したら逆上して一瞬で喰い殺されてしまいそうだ。ともかく間合いを取るために早急に結界を5枚ほど自分の前に作り上げた。

臯月が時空間をダイブしている間、時間を稼ぐ。それが自分の仕事だ。臯月が戻って来さえすれば尚哉でも、和美でも、（あまり役に立たなさうだが藤井桜花もいるし）この邪者を始末つけてくれる。

あの三人は一度してやられた相手になるわけだが次は大丈夫だと確信が持てた。

口元で少し笑う。彼女は致命傷を負っているのだ。三人の誰かがやったのか？それとも九希とか伊織がやったのか、までは判断が付かない。だが肩口から腕にかけての大きな傷は致命傷だ。それを治したいという一心で能力者の臭いにつられてノコノコと出てきたのだろう。

だが戦闘能力を全く持っていない結界士である自分は抵抗する手段を持っていない。一刻も早く彼らにココに戻ってきて貰わねば自分は今より殺されてしまう。

「ま、やれる所までやってみましょうか」

「何をボソボソと呟いているの？今の私にはこんなモノは足止めにならない」

そう言った邪者は結界を触れるだけで全て解除した。さっきまでの嘲笑にも似て取れた口元の笑みは空笑いとなって消える。

「マジでさ、嫌なんだよね、そういうのっ！私頭脳派で肉体労働苦手なのよっ！！」

皐月と繋がったままの左手を放すことができないため、ちゃんとした印を組むことができない。つまりちゃんと真剣に結界を張れない。更に本当なら右手も使って向こうの結界を干渉していかないと、皐月が向こうをこっちに持つてきても解けないのでは意味がない。

本当、マジで頼む。邪魔をしないでくれ、と。

空いている右手をアスファルトの地面に叩き付けた。血が滲む。でも、これではまだ足りない。

おもむろに右手の甲に噛みついた。悲鳴をあげている場合ではない。肉ごと剥ぎ取るかのような勢いで。

滴る血を媒介に私は結界を張ろう。

端くれと言えど、能力者。私の血は神の血を汲む。

自分の道は自分で開くしかない。

それが九希を騙してでも勝ち取ろうとしている自由なのだから。

ただ、一緒に生きただけだった。

ただひとつのモノを求めて生まれてきたのだって事実で、だから俺の手は……………掴むことができる。

『桜花……………っ！手を……………』

あとは、彼女が手を伸ばせば叶うのだから。

「さ、つき……………」

ほら、リアルタイムが繋がった——

危険な自由、安全な不自由（後書き）

一話目は何度書いてもこんな風になるんだろうなって今でも思います。

これを書いてる頃、和みたいな素直な男の子がタイプでした。ともかく自分の好みを小説に反映するのが趣味なんです。
スミマセン。

> i 1 8 0 6 4 — 2 4 3 8 <

谷口都

心の隙間、寂しさの温もり

第二章 心の隙間、寂しさの温もり

そこに突然現れた腕を自分は知っていた。

その光景は異様で和美と尚哉は警戒をしたが、そんな声など自分には届かなかった。その腕へとフラフラと近寄り、そして声を掛ける。

「さ、つき……？だよね？？」

『っ！！？……桜花？ちゃんと居るんだな？』

喋っている声と言うよりは機械を通してのような“音”が伝わってくる……確信へと変わる。

和美と尚哉が自分の腕を掴みその腕から引きはがそうとした。畏だと、彼らは思っているのだろう。でも絶対自分は間違えたりしない。

第一、双子の繋がりを当てにしていた和美がそんな態度なのは興ざめだ。二人を振り切って腕に触れた。

『桜花…良かった』

皐月の安堵が伝わってきた。彼もまた確証のないまま自分を搜索していたのだろう。触れることでまた、自分の所在も無事も確認できた、そういうことなのだ。いつの間にか能力までちゃんと遣うことが出来るようになった皐月の腕は以前にあつた時よりも遅くさえ思えた。

『泣いてるの？』

「ふえっ？」

皐月の指摘で自分が泣いていることに気付いた。心細かったからではない。ずっと会えなかった自分の片割れとの再会を……。

そうか、私は寂しかったのか。

『バカ、泣くな……片腕じゃ、抱きしめてあげられないよ』

「泣いてないよっ!!? 決めつけないでよっ!!」

『そう?じゃ自分の足でここまでおいで。誘導してあげるから』

「誘導?」

『結界を張れる?そしたら結界ごと引きずり出す。こっちもあんまり余裕がないんだ。そっちのことまでは面倒見切れない。空間移動させるからバラバラになつてしまわないように……結界で保護して。いいね?』

皐月、一人なのだろうか?結界を張る人間にはプロフェッショナルが居た気がする。しかも遠隔操作でもそうとう強力なモノを張る強者。

(あんま認めたくないけど谷口都は結界士としては自分達なんかは足元にも及ばないはず)

都がいれば安全にこちらまで移動できそうなものだ。っていうか……結界を張る行為そのものはデیفェンス。攻撃的性格な自分はそういう術が一番苦手なのだ。繊細さとか、理論とか色々必要とするから。

ホラ、と言ったように皐月の手は自分の方向へ差し伸べられた。

恐る恐る結界陣を引いて弱々しく消えそうな結界が3人の上に出来上がった。和美と尚哉が青ざめるのが分かる。

(ああっ……退いてるし。いかん、ここで弱気になってわ!)

「大丈夫よ!ドドンとどっからでも来いよ!!」

その言葉と同時に尚哉と和美は新たな結界を上から何層にも施した。

できるなら最初っからやってくださいってば!

そして僕は彼女の手を取った。

血を媒介にして作った結界にはその邪者の力は及ばなかった。助かった、これで自分の力が尽きるまでは大丈夫、そう思った。10枚の結界を張り終えたところで大きな疲労感が伝わってくる。

至る技だつて本能が分かっている。手が震えた。

私、今から能力者の真似事をするんだ。この力は結界士には許されない領域だつて分かっている………でもまだ死ねない。この手は少しでも長く生き延びれる方を掴み取っただけ。

力を放った。力ある結界を凝縮したモノが勢いよく飛び出す。その様は銃弾さながら。

だが威力が強くて上手くコントロールが利かず掠っただけに終わる。掠った………だが大きく開く傷から人間の赤い血が噴き出した。効いているんだ……。第二波を撃とうと立ち位置を直そうとすると頭が真っ白になる感覚に襲われた。酷い貧血症状に襲われる。手から力が抜け掛けてハツとする。

（まだ………大丈夫よ）

『へえ………見つけた』

耳元近くにそんな男の声が聞こえた気がした。人在らざる美しい声だった………。

「みやこちゃんは死にたいんですかね？」

まだ明るい街灯と自分の間に立ち長身で光を遮って居るその男は、駆けつけるはずのない……悠宇。

「なんで？仕事は？」

絶対逆らうはずない。だつて今は人質として遙佳を一重に預けているのだから。

彼は絶対に来られるはずがない。

「はる………かは？」

掠れた声で訊いた。遙佳を捨ててここまで来たのなら………自分は失望するだろう。

一瞬、少し困った顔をした悠宇はすぐにはに cand ように微笑んで言った。

「仕事ならもう終わったよ。まだ報告してないけど、通りすがりに都ちゃんが襲われてたから助けに入りましたとき。これなら九希サ

「マ文句言わないっしょ？」

そんな話をしていううちにダメージから回復した邪者が足下ふらつきながら二本脚で立てないことを悟ると獣のように四つんばいになってこちらに向かってきた。息を呑む。右脚はさっきのが被弾して妙な方向に曲がっているのに普通の人間の痛覚は感じていないのだ。頭で解っていることと違うことをする相手は紛れもなく異質。自分は迷ってはいけなかった。

悠宇は応戦する。彼の能力は接近戦を得意とする自分の力を道具に見立てて具現化する力。得意な具現は『刀』。その刀は邪を断つ。だが彼は一度負けている。為す術もなく血にまみれた遙佳を背負って九希の前に現れたと聞いた。そんな彼だから今の状態は危険だった。左手に……力を込めた。

（早く……早く……）

手遅れになる前に。人間在らざる動きを見せる彼女はすでに人間の形を取っていることすら不思議だった。いつその最後の砦を手放したっておかしくはないのに……。それが結果的に功を奏していて悠宇にも互角とは言えなくとも同じ舞台に立ててる。

だが長くは保たないだろう。悠宇の刀身が彼女の身体に当たっても全く傷が付かない。

この手はなんて無力なのだろうか。何故自分には為す術がない？ 祈ることしか出来ない？ 自分で解決する力がないという事実を目の当たりにして血まみれでも戦う悠宇にすら嫉妬した。

血を流してもう立ち上がる体力すらなくて……もちろん結界を張ってやる力すらなくて……自分に出来ることはもう残されていない。祈ること以外はない。

「……お願い」

涙なんか流している場合ではない。ギュツと握った左手に血まみれの右手をのせた。意識が朦朧としてきているのを感じて絶対放さないように、と。

「ねえ、お願いだから皐月くん！桜花を早く連れて帰って！尚哉！

尚哉！助けてよ」

助けてよ、もう一度声にならない声で祈った。皐月の腕を両手でしっかりと握り直して。

「……………九希ちゃん……………ん、九希ちゃん！聞こえてるんでしょ！助けて！何でもするから！もうこんな無茶しないから！」

神に……………そう祈った。

「誓うか？」

急に耳元で聞き慣れた低い声が聞こえた。その声に即座に頷くと細く白い腕が自分の血まみれの腕を覆った。ぱつと振り返って……その目で見たのは自分の腹違いの妹。一重伊織だった。九希の実の妹でありながらその稀代の力を評価され、九希の婚約者である。

じゃあ先ほどの声は？あの声は幻聴か？そんなはずはない。あれは確実に九希のものだ。「お姉ちゃん、もう大丈夫」

その透き通るような伊織の声に安堵した。そう、もう大丈夫だ……。

伊織は目の前で簡単に皐月の腕を引っ張り上げて芋蔓式に桜花達を引き出される。

その様子を見届けてゆつくりと意識を手放した。

数日後。

目が覚めた場所は一重本家の皐月が眠っていたあの部屋だった。空調の音が煩くてうなされた気がする。まだ視界が晴れなくて実はまだ夢を見ているのかもしれない。

「都ちゃん」

優しい声が現実へと引き戻していった。その行方も状態も不明だった真前遙佳その人。

勢いよく飛び起きて両手で彼の身体を掴む。現実であることを確認してもう一度……………ゆつくり彼を抱きしめた。それに応じて彼の腕も自分をゆつくり包み込んだ。

本当の安堵がここに訪れたのだ。

止め処なく流れる涙が力強いその腕が自分に生きているコトを実感させる。

少し落ち着いてきて涙を拭くと部屋の隅でニヤニヤとこちらを見つめる悠宇を見つけた。

「何よう……」

「いやゝ？最愛の人に再会したような熱烈ラブシーンをアリガトさん」

茶化すように悠宇が言った。遙佳は何も答えずにお茶の用意をはじめ。

悠宇は部屋に置かれていたパイプ椅子を広げて無造作に腰掛けた。
「イチオウ報告。桜花、和美、尚哉の3人は無事救出。皐月も目覚めたと言うことで生家に戻ったよ」

「あ、ありがとう」

そうだ、悠宇が居なければ自分は確実に自分自身で命を落としていたに違いない。今考えると恐ろしいことだ。命を『力』に替えて攻撃する……なんて。

「邪者は捕り逃しちゃいました。いっぱい能力者が現れたからね」
和美・皐月・桜花・尚哉・悠宇に伊織。まるで戦隊ものの構図だ。一対複数で敵を抹殺する。力こそ正義！ミタイナ。そりゃ逃げるわ。遙佳にミルクの多めに入ったティーカップを渡された。咄嗟に右腕を上げて自分で作った傷を思いだす。

「右腕の傷は桜花がしぶしぶ治療していったよ。助けて貰ったお礼だとか何とか言って」

「まあ……あれは一種の照れ隠しでしょ？素直にアリガトって言えないのかしらね？」

「良く分かり合ってるんだね」

「いや……合ってはいないでしょう。どう考えてもさ」

苦笑しながらミルクティーに口つけた。遙佳もパイプ椅子を広げて近くに腰掛けた。穏やかな雰囲気の遙佳の側にいると心が温かく

なる気がして桜花への嫌味も口から出てこない。まあ、傷が残らなかったのは実際感謝はしているのだが。

「都ちゃん、体調はどう？」

「それはこっちの台詞。遙佳、傷は？もう平気なの？」

「俺も桜花に会ったんだよ、傷は大丈夫」

「……………よかつ……………た」

「都ちゃんは俺とは違った重傷だったはずだ。生命力を使い切っていたから」

「うん……………まあまだ本調子じゃない感じはするね」

その答えを聞くと遙佳と悠宇は深く頷いた。そして悠宇が何かを取り出した。

「本調子じゃない方が好都合なんですよね。早くいまの意識を封じることが出来るのなら」

「え？悠宇？何言ってるの？」

「みつやこちゃ〜ん、一重に於ける真前家の宿命を知ってつかい？」
相変わらずふざけた調子で会話を進めようとする悠宇に遙佳は眉を顰めた。

でも何か……………この二人のいつもと違う空気を感じて……………生唾を呑み込んだ。

「真前は一重以外で唯一神を排出する家なんだよ。但し邪神と呼ばれる神ばかり……………ね」

「な、に？二人のどちらかは邪神なの？」

「ちがくて……………。君はボクらの従妹でしょ？更に一重の血筋もひいている」

「母は谷口の間人間でしょ？従妹と言っても真前の血をひいてる訳じゃないでしょ？」

「谷口と真前は元々同じ血筋だよ。真前の女系を谷口と呼んでいるんだ。知らなかったの？興味無さ過ぎだよ都ちゃん」

「だから何が言いたいの？」

「邪神の名前はいずれも『谷口都』。真前で生まれて谷口に出され

るから。一重で生まれて真前の血を引き谷口都の名前を持つ『都ちゃん。君の名前は九希が付けたんだろ?』

相手に届くか届かないか……ぎりぎりの声でそうよ、と答える。すると悠宇は鍵の付いた古びた日記帳のようなものを目の前に出した。

字が……書いてあった。サインだ。『MIYAKO』と。
「私の字?」

そんなハズはなかった。だがその筆跡は自分のモノとそっくりで既視感のようなものが自分を襲う。記憶が……身体が……血が。嫌がっていた、思いだすのを。

何を彼らが求めているのか、わかってしまうのがとても怖かった。彼らが求めている恐ろしいこと、九希に成り代わって自分が『都様』になったとして……何がしたいのか。

考えがまとまらなくて肩を抑えて俯いていると側でパイプ椅子を引く大きな音がした。

「は……るか?」

「悠宇、都ちゃんにソレ渡して。帰ろう」

「え? 待てよ、遙佳」

焦ったのは悠宇だった。自分は遙佳の急な行動に身動くことすら出来なかった。

「都ちゃん、ごめん……早まったって思った。本当はその本読んで欲しい。それは『都の書』。詠めば力は手に入るよ。ただ資格のない者には閲覧出来ない。鍵が……無いからね。君に渡しても読めないなら君は選ばれていないことになる。逆に読めるなら君は望まなくても『都様』である……神である運命だ」

「みやこちゃん、俺らね、目的があるんだよ。この間の敵さんから遙佳が呪いを掛けられてるんだ。敵さんの親玉は必ず邪神と共に動いていた『邪者』だ。だからみやこちゃんに『都』になって欲しいんだよ。神なら呪いだって返せるだろ?」

彼らの意図が……急にクリアになった。

遙佳が本家に隠されていた理由。傷は回復したとしても呪いが解けなかったせいだ。

それに多分呪い返しを九希が拒んだのだろう。手段は二つ。呪い返しか……敵の抹殺。

呪い返しは九希が矢面に立つ羽目になる。

「はるか、身体は？」

「大丈夫だよ、ただ……能力を使えば死に至る」

「え？」

「能力者には普通の人間と違って二つの器があるって話を聞いたことがあるだろう？」

遙佳の言うとおり……。能力者、まあこの場合は結界士も含まれる。そう呼ばれる人間は普通の人間が持っている生命力以外にも一つ力を持っている。それら二つは器があつて力を遣いければ生命力なら死を、もう一つの力なら能力者としての終わりを……。能力を遣いきらなければ生命力として転化出来るという説を唱えた故人が居たらしいがそれは定かではない。だが確実なのは生命力を能力として転化することが出来ると言うこと。それは自分が行ったことで証明出来ている。

使えば死に至る力。

「貸して、読むわ」

大切な人を失うことが怖くて決心を付けたつもりだった。

「来たね、桜花」

九希の穏やかな声が逆に怖い。再び彼のマンションに招かれたわけだが今の心境としては叫んでここから逃げてしまいたいぐらいだ。理由は初の仕事を大失敗に終わらせた上に彼の妹君（憎き都嬢）ともう一人の妹君（この人はナゾだけど伊織サン？）を巻き込んでしまった大失態。そのお説教に呼び出されたのだと思わずと床の方に目を泳がせていた。うつつ情けないけど顔上げられない。

「桜花、皇月くんのはまあ都が強制的に引きずり起こしてしま

つたわけで半分しか能力を開発できなかったんだ」

「え？」

皐月のことを言われてつい顔を上げてしまった。

っていうかこれで契約不履行が判明した。強気に行かなくては！

「どういうこと？まだ暴走癖が治ってなかったら……」

「一応もう修行は終わりってコトで大丈夫だと思っただけ？」

あっさりとアツケラカンと言う彼に多少なりとも殺意を抱いた。

じゃあなんで今まであと一年かかるとか言いやがったただか。

「そう怒らないでくれよ。暴走癖を直すぐらいならすぐに修行自体は終われるはずだったけど皐月が望んだんだ」

「何を？」

「『桜花を守る力』を。皐月との契約は護れなかったけど君との契約はこれで十分果たしてるよ」

その詞に顔が熱くなるのを感じた。『守る力』って……妹バカな兄を持って恥ずかしいやら……嬉しいやら。自分も十分兄バカだった。

「暴走癖も治ってるし簡単なことなら出来るようになってるはずだから後は焦らずコントロールに努めると良いんじゃないか？」

「有り難う……」

とここで気付いてしまった。契約不履行をしたのは自分だけだと言っことに。

につこりと微笑んで相変わらずの優男の態度を崩さない彼だが少し威圧感を感じた。

「桜花、別に怒ってないけど少しぐらいは僕の役に立って貰いたいね」

「……………はい。ゴメンナサイ」

「じゃあ新しい仕事だ。やれる？」

差し出された新幹線の切符らしきものを受け取った。山形？

「瀬尾の当主に会って来るのが仕事だ」

「せ……………なんで？」

「共同戦線を張る必要が出来たからだよ」

「だからっ！それがなんでか聞いているのよ！」

イライラしていた。九希は自分の聞きたいことをわかっていてワザと遠回しな言い方をする。

「君が逃した敵はそれだけ大きかったってコトだよ。今の一重の能力では瀬尾に気を配りながら敵と戦うことは困難だ。相手を刺激するなどと言ったかな？」

急激に九希の声色が変わった。これなら分かる。この人は一重の当主だと、気圧された。

そして相手はもの凄く怒っていることも理解できた。

「休戦協定を組む為の大使になれてコト？」

「共同戦線を張るって言っただろ？瀬尾の戦力も借りたいんだ」
「でも……」

瀬尾は殆ど力がないから一重が守りつつ警戒している、これが状況なら期待できる戦力は少ないのでは？言葉を選んでいると九希が目伏せて柔らかく微笑んだ。

「大丈夫。瀬尾にしか出来ないことだってあるんだ。一重には出来ないことをして貰おう」

ごくりと生唾を呑み込む音が聞こえた。自分のものと気付いて、相手に伝わっていないことを祈った。

「それは……つまり暗殺を？」

返事は返ってこなかった。

そつと渡された二枚の往復の東北行き新幹線の切符が心細さを増幅させていた。

マンションの外で和美が待っていた。二枚目の切符の用途がわかった。

「荷物はもう平気？」

「和美一緒に行ってくれるの？」

「……いや、九希さんに呼ばれてるから俺じゃないんじゃないな

いな？」

「ちが……うんだ？」

「尚哉だと思っただ。俺次男だから俺が行くより効果あるから」

「家柄の問題なんだ」

「まあ………交渉ごとだし、真前の家って由緒あるし」

わかってないな。カズミちゃん、私はアナタと一緒にいきたいですよ。一緒にいけるならどんな無理な契約も取って来ちゃうかもよ？なんてひとりごちる。

見かけに寄らず大きな手が頭の上に降ってきた。この人のクセ、頭を撫でること。

「頑張つて行つてらっしゃい」

少し人目を気にしつつ触れるか触れないかの頬へのキス。こんな公共の場でこういうコトするの珍しいな。励ましてくれてるんだ。妙に可笑しくなつていっぱい笑ってしまった。

「な……なんだよ」

和美の優しい手が照れ隠しに自分の額を小突いた。すると上から影が降ってくる。

知ってる気配……知らない表情の皐月が和美の手から自分をさらう。

「俺が着いてくから心配ないよ、カズミちゃん」

その行為が間違いでなかったことを証明するために浸食を赦した。今までの自分が全てこぼれ落ちていつてしまった。

浸食か…脱皮か…自分自身解らなくて……それが成る可くして成った自分だと理解することしかできなかった。結局ただそれだけのこと。

ただ、この掌に宿った新たな力だけが全てを物語っている。

新幹線ってあんま乗らないから勝手が分からないなあ…と。

東京駅からだよな？何新幹線？ニュースでやってた新しいの乗れ

る？

…寝てたんだもんね？知らないよね？

はしゃぐように、沈黙を怖がる様に山手線に乗りながら桜花は喋り続けた。

こんな調子で新幹線はどうする気なんだか。過呼吸にでもなってしまうそうだ。

「ううゝ皐月、あんま見ないでよう…用事があるなら目で訴えないで言葉にして下さい！」

「見たいんだよ。ずっと会ってなかったんだからこれくらい許してよ」

双子、って一括りにされても桜花と自分は別物で性格も違う。外見も幼い頃とは違い段々別のモノに成りつつある。

掛け替えがないんだ。

代わりに出来るモノのない半身なんだ。

もう女らしさが出てしまっている彼女の身体のラインと、守る為の力が欲しいと思った事で彼女と違う力に変化してしまった自分と…全く違うモノになってしまった。

全く違うモノを求める今の感情を何て言うか知ってるか？

「皐月？」

「桜花…」

駅に着いていっぱい人が降りたため席が空いた。そこに桜花を通して自分も横に座り肩に手を回す。肩越しに彼女の顔を見つめると仄かな色気が感じられた。既に一つのモノじゃ居られなく成っちゃったんだ。だから求めて止まないのか、それでも求めてしまうのか。狂ってしまいそうになる。

手にしてしまった力を後悔しても仕方ないのなら、やるしかないのだ。

傷つけないればいい。バレないればいい。

たとえそれが儚い嘘だとしても真実にしてみせれば良いんだ。

大切なものを守るのに手段なんて選べる程自分は強くないのだから

ら。

「あのねっ！」

「桜花、何があったか…なんて聞かないけどお願いだから無茶をしないで」

「え？」

「九希さんと取引してたんでしょ？しかも任務には失敗したんだって？」

「失敗ってか…」

「おれは桜花が危ない事するとおれが助けに行かなくちゃいけないから困るの」

「た、助けなんて呼んでないよ！一人で脱出できたよ！」

「こらっ！天の邪鬼ムスメ！！『タスケテ』ってピーピー泣いてたくせに」

「泣いてない！」

「おれが来て嬉しかったくせにっ」

頭を撫でて桜花の顔を覗き込んだ。上目遣いで『悪い？』って訊く。反則だと思った。

緑色の列車が丸の内口のレンガとビルの際間からの光を浴びて東京駅のホームに滑り込んで行った…

おかしな事に…信じてるつもりはないのにそれが…ただ、怖かった…

差し出されたのはただのノートだ。開いたって何も起こらない事だっただけ。でも、もしも本当に神様の力を目覚めさせるものだとしたならどうしたらいい？

そして兄・九希の奇行と符合が合いすぎる気がして…自分を戦闘から遠ざけるのはこの身体が死ねば交換した瞳から力を搾取することが出来なくなるからだ…としたならば……。

九希が自分を守るのには大切にしてくれてるからだ、って不自由な事もある程度はその確信だけで耐えられた。

心が墜ちて行く…ただ…墜ちて行く。

これが自由だと気付いた時に自分はこんなもの要らなかったことに気付いた。

でもただ愚かで、ただ傲慢だった頃にはもう戻れない。

「奈月が、居ると良いんだけど…」

隣りから聞こえる呟きで自分が遙佳の手を握っていることに気付いた。タクシーでスタジオに向かう……遙佳がそう言ってた。雨が強くなってきたから車を用意するよ、って……順々に飛んでいる記憶を繋げるように自分を確認していく。まるで髪の毛から足の先までを存在しているか確かめていくように……。

握りしめていた遙佳の手を爪で深く抉って血が滲んでいた。普段通りの自分ならこんな力が出る前に気付いて放した筈なのに……。力を抜いて、傷つけた事実を確かめるようにその血に触れた。

「さすがにそれは痛いな」

「ごめんなさい」

「泣かなければいいよ」

「…うん。まだ泣けないよ？」

ギョツと目をつぶった。手を握る代わりに。

ただ、何に考えを巡らせれば良いかすら分からなくて…吐き気がする。世の中の闇を全て消してしまいたい。

漠然とそう感じている自分がいた。何かが変わってきている。

ゆっくりと確実に…あのノートを手にした瞬間から浸食は始まっていた。

「奈月ちゃんを巻き込むのね？」

「飛澤奈月さんにあったことある？」

「尚也という時に何度か。多分嫌われたわ」

遙佳が「らしいね」と言って苦笑した。人に…特に同性から嫌われる事には生憎慣れている。だが相手は尚也に好意を持っているせいからの敵意だ。争いになってしまふのはある程度は仕方ない。

彼女の必死さは、一族に流されないようにもがく様は、自分を重

ねるようで苦手だ。でも必死に尚也を求めるのに平静なふりをするのは自分にはない美德だが……。

「私、九希が欲しいの。手に入るかしら？」

小さな声で尋ねた。遙佳が目を動かした。哀しそうに目を伏せて大丈夫だよ、って言うてくれた。ああ、この人は『谷口都』が好きなんだわ。段々神聖化していくこの身体を欲しながら、基の人格を愛してくれてる。

可哀相な遙佳、可哀相な都。良かったね、九希。

もうすぐ貴方の望んでいた都になる……

正に神鳴りだ。

自分の心を表現するかの如く荒れる空を見てそう思った。そんな既に神様気取りの自分が少し面白い。

タクシーを降りて正面玄関の方に移動をする。あまりにも近くで雷が鳴っていて周りの音がそれだけになっていた。

スタイリッシュなビルがそびえ立つ町並みを一瞬にして暗黒の雲が覆い隠す。雷はともかく、この黒雲は自分のせいでは無さそうだ。遙佳の身体に呪いを刻んだ邪が自分達を歓迎すらしているように……。

白い筈の高層ビルに一面霧の様なものが掛かって上の方は全く見えない。

話題の飛澤奈月嬢はこのビルへの出入りが一番自然に出来る立場にある。このビルに事務所を構えるスタジオに良く出入りしているモデル、その立場が重要だ、そう遙佳は説明してくれた。

学生の自分達が安易に出入り出来る場所ではない事を示して。事件もやはり奈月の周辺……もっと詳しく言えばスタジオ周辺で事件は起きていた。そこに親玉が潜伏していても不思議ではない。

ビルの前で悠宇が携帯を片手に手を振っていた。

「奈月ちゃんは今降りて来るよ」

「中に居たんだ？良かった」

遙佳が自分の手にギュツと力を込めた。

少し強張った表情、珍しい位の緊張、悠宇もだ。ここに乗り込む事がこの二人にとってどれだけの恐怖だったのだろうか？

「ごめん、カッコわるいだろ？」

そう言う遙佳の手を上から握った。

これは罪ですか？力が欲しい…ただそれを叶える為にこの人達を利用する事は……。

本当は…本当に利用しているのは自分なんだ。力さえあれば『谷口都』が舞台上上がる事が出来る。『一重伊織』と同じ九希の妹なのだから。

力が在れば伊織に取って代われるんだ。

自分が九希の子供を産む資格が産まれて来るんだ。

抑え込んでいた欲望が片っ端から溢れ出て来る様だ。

九希を愛してる、自分だけのものにしてしまいたい、一重なんて関係ない、何もかも、たった二人だけで良いんだ…って。

尚也も悠宇も遙佳も何もかも…九希にとっての重要な人物だから敬っているだけで自分には必要ない。そんな心が生まれてきていた。小さな頃から、一重なんか関係ない頃から慕っていた真前兄弟にすらそう思うのはもう病気に近い。

あんなに愛し合った尚也にどう言うつもりなの？

取り繕う必要はないわ。

手に、したら…総て、消してしまえば…

自動ドアが開かれて奈月が姿を現した。思考を巡らせた結果があまりに自己中心的で身体が震えた。そんなことを思ってる自分も居るって初めて知ったから。

「こんにちは」

緊張気味に奈月が言った。いつも自分に向けて来る敵意は遙佳の前では大人しい様だ。

遙佳の手が離れて行く。

代わりに悠宇が後ろから肩を抱いた。

「何よ？」

「うつわく都ちゃん相変わらず俺にだけ手厳しい…」

「当たり前でしょ？」

「ここになって逃げられたら困るから捕まえたの」

軽く言う悠宇の腕は小刻みに震えていた。自分がじゃなく…悠宇が逃げ出さない様に掴まったんだ。今にも全て崩れていきそうな作戦にどうしようもない憤りを感じる。どうしてここまで追い込まれた？どうして？

「中に取り敢えず入って！でも…黒幕なんて…本当に？」

「奈月さん？あなたはこの建物を囲う暗雲が見えて無いの？」

自分が首を捻った事に奈月は不快感を顕にした。だがやはりこの暗雲や異常性に気付いていない様だ。

「暗示？」

思い付いた言葉を発したら奈月に勢い良く睨まれた。遥佳はそんな自分達の間に入り奈月を覗き見た。…と言うか遥佳の瞳孔を奈月に覗かせたのだ。

暗示をゆつくりと解きほぐしていく。その正確さ、流石だ。これが一重が欲しがる力だ。

「あ…」

術が解けた瞬間に奈月の声が零れる。

「残念ながらここが黒幕の棲み家だわ」

奈月はそれに対しての反論しなかった。だが聞きたくない名前を口にする。

「尚也様に報告しなくては…」

「やめてっ…！」

「……どうして？」

「尚也に伝わったら……尚也に危険が、降り懸かるわ…巻き込む事はないもの」

言い訳をした。奈月にだって気付かれたハズだ。

でも尚也が知れば必ず止められてしまう。

それだけではなく尚也には知られたくなかった。自分の我が儘に付き合ってくれた大切な人、尚也には…。

怒鳴ったせいか、頭に酸素が回っていないような感覚に陥る。自分に嫌悪を抱いているハズの奈月ですら心配そうに自分を見つめていた。

自分の中の自分を処理しきれないから苦しいのだ。

九希が好き（尚也が好き）、九希以外要らない（遥佳が大切）、邪魔するなら消してしまえば良い（誰か止めて）

順番に思い、どちらが間違っているのか判断出来なくて……。

「都ちゃん、渡したノート返して」

「え？」

「明らかにおかしくなってる。こんな…勝手だけど困らせる為に渡したんじゃないんだ」

少し屈んで目線を併せた遥佳の、柔らかな声。少し戻って来た自分を感して首を横に振った。

「遥佳の呪術を解くまでは返さない」

「都ちゃん…」

「でもお願い…遥佳、私から離れないで…横に必ずいて！尚哉のように私を置いて行かないで！」

しがみつく様に言った。その行為はすでに異常なものだったのに……。

奈月が諦めたように建物内に自分達を促した。

大丈夫、元に戻る、元凶を潰すだけなのだから…

それは予想外の出来事だった。

大切にしてきたつもりだった。危険な目に合わせないように、重要な役目は隠して就いていた。放っておいても厄介事を拾ってくるから手を焼いた。だけどそんな自由な彼女の全てを愛していた。

じゃじゃ馬馴しだと、他の男には手に負えない事が自分の優越感を刺激していなかったとは言わない。だが、一緒に過ごす時間を至

福と感じていたのは自分だけではなかった筈だ。

恋愛ってそういうモノじゃないのか？求めて止まなくて、焦がれて身も心も焦がす…お互いに。

「尚也、分かってくれるね？都とはもう別れなさい」

九希がゆつくりと命令を口にした。当主としては年若い彼だが逆らう術はない。いつ命じられても仕方ない事を承知で彼の妹に手を出していたのだから。だが納得しきれないのは理由だ。

「都が…何をすれば一重都になれるんだ？九希、正直言っただが幸せになれないなら引き下がるつもりは…」

「都は一重の当主になるよ。ようやくこの席を返す機会がやってくる。真前兄弟もよくやってくれた。もう、すぐ『都様』はここにやってくる筈だ」

「俺は分家の『谷口』がどういう役割か知らない訳ではない。だからこそ何故『谷口都』が神様になれるのか分からない」

九希は自分が言う事に口を歪めさもおかしそうに笑い飛ばした。

ひとしきり笑うと今度は上目遣いに睨んで口を開く。

「正当な血統は都だけだ。純血と呼ぶなら一番ふさわしい」

「伊織は？」

「我が妹君はきっと良い神子になれるよ。僕と並んでね」

「巫人は飛澤だろ？」

「神子と巫人は違うよ。尚也、君は君で神子や神と交ざってはいいじゃない」

「…もう散々味見させて貰ったけど？」

「妊娠しなくて良かったねえ。やっぱり降ろすのは可哀相だ。それに都が避妊してたから大丈夫だよ」

「はあ？」

「ピルを飲ませてあったんだ」

ニッコリ笑ったこのきれいな顔を悪魔のようだと感じたのは初めてだ。

「ともかく、君はもう都を忘れてちゃんと婚約者の元に戻りなさい」

「その婚約者殿は？」

「今はお使いに出てるよ」

「桜花が…帰って来る前に決着付けるから都に会わせてくれ」

「君が確かめれば良い」

この部屋の鍵を渡された。これで都の自由は奪える。

「九希…」

「僕を冷たいと罵ってくれば良かったのに…」

「それは出来ないだろ？」

みんな都を苦しめている。誰か一人ではなく、みんなで、だ。

何もかも、判断が鈍って来ていた。それが身体を蝕む呪いのせいからか、目の前で変わり行く都のせいからかも分からずに…。

事態に気付いてしまった奈月は案内しながらも肩が震えている。

いつもなら氣遣ってやるが今日ばかりは自分が余裕ない。悠宇に目配せをした。

あまり奈月と関わりたくない悠宇は眉を少し寄せた。

だが自分の都の手を離さない様子を見て諦めるように先に行く奈月を追い掛けた。辛辣な冗談を言って怒らせてでも彼女に平静を取り戻して欲しかった。今は悠宇が適役だろう。

「今日は…遥佳も変だね」

控え目に都が口にした。

いつもと違う事を変と定義するなら最も『変』な彼女に言われたくないものだ。

「変かな？この選択が間違っていると…もしかしたら九希に踊らされているだけなのかも…」って思ったら躊躇が出ちゃってね」

「あ、なんか久し振り」

「え？」

「遥佳が『九希』って呼び付けるの。いつの間にか九希様とか…年近いのに『様』はないだろ？って思ってたんだ」

「今は『様』付けたら嫌味だろ？逆らったんだからさ」

「余裕無さそうな顔して律義だねえ」

そう言って都は微笑む。この流れは昔からだ。

自分だって余裕無い筈なのにこちらに氣遣って、そして仮面の様な笑顔を見せるのだ。これが余裕の無い時の彼女の対応。人を観察して余裕有るよみたいないなアピールをする。頭の良い彼女の頭の悪いやり方。

『タスケテ』って言えば今すぐ連れて全てから逃げてあげるのに……。

「……遙佳あ……私どうなっちゃうかなあ？」
「え？」

しまった、と思った時は既にいつもの都に戻っていた。今のが都の『タスケテ』だ。聞き返した後はまた仮面の笑顔で声に出さずに口の中で『ナンデモ、ナイヨ』って。

「みやこちゃん、帰れば今ならまだ……っ」

「帰って？どうするの？結局私は一重の言う通りに生きるだけだわ。それならせめてアナタの役に立ちたい」

「俺はみやこちゃんが一緒なら……」

「それは無理でしょ？真前のお坊ちゃま。悠宇ならともかく、長男の君は無理。変な噂になったら間違いない私が消される。尚也にしろ、そろそろ潮時だわ。大人しく幽閉されるか……」

『今のうちに行動に移す』か。本当に二者択一なのか？九希は何を考えて『神様の力』を都から奪ったのだろうか？

「ハルっ！あんまり悩むとハゲるよ！！」

ガシッと頭を鷲掴みされて現実に引き戻された。

力が無いからこんなに悩むのだ。無理に押し通す力があれば……悩まずに、奪える性格でもないな。

「ともかく私は私の力を取り戻す。そしたら遙佳の身体も治せるし敵を倒す事も可能かもしれない」

「うん」

「九希ちゃんが……」

「うん」

「今は私の目が殆ど見えてないから。これは拒否反応だよね？九希にも現れていたら自由にさせてあげなきゃ」

都に心構えをさせたのはそこか。自分達の為なんて、エゴなんだろうね。でも他の男の為に一生懸命なのは気分が悪い。

気付くと舌打ちをしていた。都がそれを聞き取って目を見開く。

「ごめんね、やきもち妬いただけ」

「へ？」

「九希様は良いなあ。これは嫌味だよ」

少し気を抜いた物言いに都も安心したらしく花の様に笑った。この笑顔を失わないように…。

「オニイサマ、少し一目を憚る事を知って下さいな。聞いてるこっちが恥ずかしいよ」

悠宇の揶揄の声と共に赤面症の奈月の耳が赤くなる。

「俺は恥ずかしくないから良いんだよ」

「いやいや…」

悠宇が少し早歩きでからかいながら歩く。だが奈月が咳払いをして悠宇の服を掴んだ。

「ここ」

気付かないのは感覚の鈍い悠宇だけだ。正常過ぎる程の普通に見せかけて、物凄い憎悪の塊のような気の持ち主。奈月が小さく『え？ここ？』と言った。自分で案内しておいて何か信じ難いらしいが、それがあつさり暗示に掛けられた原因だろう。

奈月を明らかにこちら側と認識した暗示、その危険性。ここに居るのは大物だ。

考えているうちに乱暴に扉が開かれて男が出て来た。一瞬神懸かり的な美しさに見えたのにすぐに人懐っこい親しみやすい印象を持ち直した。

「奈月ちゃん？お疲れ様。まだ居たんだ？」

「泉水さん、お疲れ様」

「靡ぶつからなかった？ごめん、急いでてさ」

「大丈夫！」

泉水と奈月に呼ばれた男は手を前で併せてごめんと言いながら走り去ろうとした。

その男の擦れ違い様に都がガクツと膝を付く。

「大丈夫？」

そう言うとき泉水は都の身体を軽々と持ち上げて立たせる。

「あ…っはっ…」

過呼吸の様に肩で息をする都に気付いて男の腕を掴んだ。

「なに？」

何かを言おうとして言葉に詰まった。この人じゃない？だが悠宇の行動が早い。

振り降ろされる力の剣をスローモーションの様に見つめた。泉水が咄嗟に剣を弾く。

攻防は人間のものではない。暗示に掛けられそうになっていた自分、悠宇は？

「何で分かった？」

「完璧過ぎるからかな？でも一番は遙佳に何かしようとしたから」

悠宇は彼が自分に掛けようとした暗示のみを見ていたのだ。

「遙佳に害なすなら人間でも消すよ」

しらつと言いつつ悠宇の言葉は嬉しいが兄としては将来が心配だ。とは言えずと二人で組んで戦って来たのだからお互いが分かっている。

都の腕を掴んだままの泉水から即取り返す。結界の応用だ。無理矢理テリトリーから弾き出した。

「へえ…腕の良い能力者が居たもんだね」

うんうん、と感心した様に上目線で自分に言った。

「奈月をつー！」

悠宇に言った。すぐに放心している奈月を抱えて下がるのを確認し、都を抱いたまま攻撃の体勢を取る。

結果と同時に衝撃波を放ったが避ける事すらない。

「都様、貴女はいつまで私を困らせれば気が済むのですか？」

喋り方が変わった。雰囲気も飲み込む様な威圧感を持つ魔物へと。

「何を…」

「貴女へ誓った愛は私は忘れていないのに」

「何を…言ってるの？」

「貴女との契約は、貴女を一度手に入れる代わりに九希とこの世に二人きりにすること」

「九希と？」

彼女の望む事は自分達にだって察しがついていた。この瞬間に決着は着いてしまったのかもしれない。

「九希と？」

「そう、君から九希を奪った女と九希を離れ離れにすることが君の望みだろう？だから生まれて来る筈の九希の相棒が生まれて来ないんだよ」

「相棒？」

「九希の愛して止まないお姫様は現れてないんだろう？」

キャパシティーオーバーだ。都の身体から力が抜ける。

新手の存在が、都を抱き起こそうとした自分の腕を払い除けた。

「な、おや？」

都の漏れるような声が聞こえてすぐ、都の身体は上から下へ…消えていった。

ただ見る事しか出来なかった。尚也だけの力ではない。恐らく九希の力の介入があつての事だろう。

自分達は本格的に見捨てられたのだ。

気付くとそこは見慣れた九希の部屋だった。緊迫した状態だった為に安堵感からか涙が自然と零れ落ちていた。

殺気のような気配を感じ見上げると尚也が冷たい目で見下ろしている。

「な、尚也っ！…遙佳達はっ！？」

自分の身体以外にあの場に居た者達が存在しない事に気付いて抗議の声をあげる。

すると予想だにしない衝撃を食らわせられた。頬を平手打ちされたのだ。

「都、俺から逃げれるとでも思ってたのか？」

ゾクツとした。

尚也から感じた事のない気味悪さが放たれている。その狂いを作ったのは誰？

「…遙佳達は？」

シヨックのお陰で止まった涙を拭ってもう一度訊いた。あの場に彼らが止どまる事は『死』を意味するって自分の中の『都』が伝えて来る。

アイツは『都』以外に興味が無い。

「知らない」

「そんなっ！！奈月ちゃんだって居たのよっ！！？」

「知らないよ。さっきの力は俺の力じゃない。俺は九希の力や皐月の力を遣ってお前を引っ張り出しただけだ。奈月は自覚があれば自分でどうにかする」

止まった筈の涙がまた零れる。自分と奈月が同じと気付いてしまったからだ。

どんなに好きでも先じて家を出される運命を呪う。やはり自分は尚也と共に生きていけないのだ。

身体も、心すら…。

気付いてしまえばもう戻れなかった。

手にする事に決めよう。たとえそれが何かを失うという事だとしても。

出入り口を塞ぐ様に立つ尚也を見つめた。

「九希は？」

「今はいない」

「尚也、私は行かなきゃ。ここから出して」

「お前ごときに何が出来るんだ？」

「…嫌な言い方」

「俺はこういう性格だよ。知ってるだろ？」

敵なら容赦しない尚也を今まで他人事で見ていたから自分にやられるとこんなにも辛い事だと知った。尚也に守られる立場にあったから、あの手があんなに優しかったのだ。

でもあの腕の中にもう戻る事は出来ない。

もう、決めたから。

手を払い除けて玄関に向かおうとした。もう別に自分を分かって貰う時間も、必要も、無いのだから。

「最初にも聞いたけど俺から逃げれるとでも？」

悦の声にすら聞こえる囁きと共に首を締められた。突然の暴力を避けられずに壁に叩き付けられる様に抑え込まれる。

男の力に能力者としても有能な尚也。もちろん武術も戦略にも長けた彼に、自分が敵う術はない。

「なっ…お…っお…願いつ」

繋ぎ繋ぎ言った言葉も尚也の歪んだ微笑みに消された。冷たい口付け。少し嚙まれて血の味がした。それと共に尚哉の冷たい手が突然熱を帯びた。

「そこで自分の無力さを呪ってるよ」

九希の部屋の大きな白い壁にめり込まれる様に封じられる。壁の中に完全に入ってしまうと中では自由があつた。

また限定付の自由だ。この結界内では自由に動ける。

「尚也っ！！出してっ！！」

『遙佳の事がそんなに気になるのか？』

尚也の声が機械を通した様なくぐもった声に聞こえた。次元が違う結界に居る事を現している。結界を解く事は自分の専売特許な筈なのに力が発動しなかった。

この件にも九希が介入している証拠だ。

「私が…」

気にしているのは遥佳じゃない。

気にしているのは遥佳達が傷付く事で病んでいく九希の心だ。欲して病まない、自分が手に入れる事はない彼の心だ。

言えなかった。

兄が好きで、似ている尚也を代わりに選んだ事、それを伝えたくない程度には愛していたから。

籠の鳥、言い得て妙で。今まで幾ら彼女が好き勝手していたってこうなる事はなかった。

白い壁の中に封じ込められた都を見やった。

憔悴しているように見える彼女の首にクッキリと付いた痣が尚也の奇行を現していた。

「尚也、ここは俺が見るから」

「結構だ」

「尚也、落ち着いた方が…」

「お前に何が分かるっ!!」

怒り狂っている、そう見えた。

壁の向こうの都がちなりとこちらを見やるのが分かった。

「尚也、九希が呼んでるよ」

「…」

舌打ちをしながら尚也が部屋を出た。

ため息を吐きながら壁に手を付くと都の怯えた目が少し回復する。向き直った都の顔は少し腫れて、唇にもかさぶたになった血がこびりついていた。尚也に犯罪者の素質があったとは思わなかったな。

何がそんなに彼を狂わせたのか…。都は綺麗な顔だけど、一緒に居て楽しくない訳では無いが…それほどまでとは。

「都さん」

『和美くんっ!!ここから出してっ!!』

これは懇願だ。すがりつく様はいつもの彼女とは様子が違う。

『遙佳、がつ！九希をこれ以上苦しめないでっ！！』

九希の名前を口にした途端にボロボロと大粒の涙が零れた。

（ああ…この人は…）

尚也、これは不毛だよ。この人が他の人を好きな所が好きだったんだろう？知ってたんだろう？自分達には出来ない、『愛する者』をただ追い求める姿。

でも、諦めない事がこんなにも美しいなんて…。

『和美くんっ！』

「俺は見張りしかないし。残念ながら君を逃がす手段を俺も知らないし」

ニコツと笑顔を向けると都は堪えきれないとばかりに口許を抑えて泣き叫んだ。今迄溜め込んだものを吐き出す様に声を出して泣いた。

「都さん…」

呼んだ声も書き消されてしまう様な悲痛の叫び。それでもその顔が美しいと思った。

いや、泣く程に美しさが増している事に気付く。

「えっ？都？ちよつと都っ！」

『え？』

「ナニソレ？」

都の茶色く染めていた髪の毛が真っ黒に、真直ぐに伸びた。肩より少し長いくらいだったくせっ毛が地面に着く位にまで。

二人同時に唾を飲み込んだ。音がシンクロして緊張感を取り払う。

気まずい沈黙の後に堪えられずに都が吹き出した。

『なにコレっっ！！』

笑った都を見てホツとする自分に、こういう任務は合わないな。

「笑った顔のがやつぱり良いみたいだ」

『え？』

「泣いてる顔が綺麗だと思っただけだ」

『和美くん、それは藤井さんが聞いたら私コロサレルワ。口説いてるみたい。タラシの才能あるよ』

「口説いてるの。九希なんてやめなよ。不毛なの分かってるだろう？昔からアイツは…」

九希、アイツ、昔

口を付いて出て来た言葉に驚いたのは自分だ。

『和美くん？どうしちゃったの？？』

不安そうな都の声、壁に手を伸ばした。九希の力を遣って尚也が掛けた結界に何故か自分の手が結界を破壊する事なく進入する…。幻のような、でも現実。都の長い髪の毛を一房掴み取ってキスをした。

『か…っ?!?!』

「都、七希は封印したまま？」

『何、を…言ってるの？』

また怯えた目に戻った。仕方ないな。

パツと手を放して都にこう言った。

「…都さん。なんか聞こえにくいよ」

『あ…和美くんまでどうにかなっちゃったのかと思ったよお。聞こえてないならもつと早く言つてえ！』

安心した顔で近寄って来た彼女をおもむろに抱き締めた。

「うっそ。」

『っ!!…だっ…』

騙したわねえっつ!!

いつもの都らしい声が聞こえてきそうだったが、尚也の一件がトラウマになったらしく身を凍らしていた。

返って来ないハグは虚しいものだ。腕を解いてガチガチの彼女を見つめた。

『か、和美くん？』

「なあに？」

『洗脳されちゃったとか？』

「至って正気。ちょっと頭整理出来なかったけどだいたい記憶繋がったから」

『記憶？』

「昔から一緒に居たでしょ。九希と七希と都と…」

自分達はずっと一緒だった。都だって覚えているはずだ。過去の贖罪を。

七希を選んだ九希を殺した『都』様。そんなに九希が好きだったの？

「全てあの時から歪んだんだね」

この記憶は前世だ。

神と二人の巫人。それに…自分という人間。なぜ転生したのだろうか？という役目で全員が…？記憶の曖昧なところがある。だが罪と思いは総て引き継がれた。

「変わらず君を愛してる」

少なくとも、目前から都が消えた事で冷静さが戻ってきていた。

悠宇と目で合図を交わすとすぐに奈月を抱えたまま逃走を図る。

「良い判断だ」

低く美しい声だった。今時の若者の格好に身を包んだ泉実はその格好に似つかわしくない喋り方、雰囲気へと変化した。ただずっと面白いものを見るように笑っていた。

「うわっっ！」

悠宇の走り込んだ方向から叫び声が上がる。自分が盾になっていたと思っていたのにそちらには新手が現れていた。

否、新手ではない。泉実自身だ。泉実の本体とでも言うべきか…？

悠宇の右腕を錐のようなものが突き刺していた。

（これじゃ…………悠宇までも）

能力者生命が断たれてしまう。あれは自分が掛けられた呪いと同じタイプのものだから。

そう感じ取った瞬間に自分の身体がえぐり取られる様な感覚を味わった。心が狂ってしまえば邪者と能力者なんて大差ない。

早く終わらせなければ、早く、早く……。

手早く印を切ってそちらへの結界を組んだ。あまり自由にならない能力だ。今の自分は長く力を使う事は出来ない。呪いが身体を蝕み、心を浸食し、いつか邪者になってしまう前に……いや、なってしまうとしても助けたい人がいる。都があんなに無茶をしたという報告を受けた時、自分の不甲斐なさを恨んだ。彼女に命を削るような選択をさせたのは自分だという事実。だが、彼女の気持ち が今……痛いほど分かる。

こちら側にある泉実の身体も奇妙に動く。まるでマリオネットのような動きだ。二つに分かれているせいで優雅な動きではなくなっているのか、元来人間ではないせいで機能を無視した動きになっているのかは分からない。

自分に結界を組ませないように次々と繰り出される攻撃を凌ぎながら、右腕を負傷した悠宇を結界で塞いだ。悠宇自身を身動きできなくなるように……。

「遙佳っ！これじゃ動けない」

悠宇の声。動けなくしているんだ。

これから酷い手を使うから……。

「悠宇、悪い」

口の中で呟いた。距離が在るはずの悠宇がその言葉を聞き取り結界に張り付く。自分の結界の中にいるせいで小さい声も聞き取れてしまったらしい。

だが、自分の判断は間違っていない。みんなでここを脱出するならこれしか方法はない。

目を軽く瞑ると家に保管してあった禁書の内容を思い出しながら印を切った。

「えっ？……あっ……か……はあっ………」

息をする事すら困難といった感じの悠宇の声がもれてきた。自分

の中に倍の力が感じられる。同じ力なら自分の方が巧く使う自信がある。

これは悠宇から奪い取った力だ。熱い手を思いっきり振り回した。攻撃系に特化した悠宇の能力だけあっていつもの自分とは格段に違う。泉実は初めて怯んだ表情をした。

「はる……………つか……………」

悠宇のもれる声だつて耳に入れている場合ではない。ある程度劣性を回復させなければ。奈月と悠宇の側に身を翻し、錐……本体の方にも力を掛けた。

『ここまで出来る能力者は二人目だな』

錐の中から頭に直接響くような声が聞こえてきた。気持ち悪いくらいに鮮明で振り切るように悠宇の力と自分の力を混ぜて攻撃を繰り返す。

与えているはずのダメージも何故かスポンジに攻撃しているような手応えの無さ。

身体の許容量を超えた力に疲労感が突然やってきた。

（まず、い）

（悠宇だけでも……………）

これは自分にも悠宇にも赦されていない領域だつて分かっている。だが、今はこれしかなかった。

「悠宇、奈月の手を放すなよ」

イメージは掴めている。

二人分の力を使えば出来ない事はない。

ただ、それだけで未熟な力を使ってしまった事……………死ぬより後悔する事になる。

『変わらず君を愛している』

どうしちゃったのだろうか。尚也はともかく、和美も、遥佳も…自分なんか能力者にも慣れなかった出来損ないなのに…。

「和美くんごめんなさい。多分気持ちに応えられる事はありません」

『はつきり言うよね？分からないじゃん』

「これ以上藤井さんに嫌われたくないし、私が尚也や九希を好きな事考えてみて下さい。私、あなたの恋愛対象に出来ない」

全力でお断りの言葉を口にした。和美が傷付くことだって仕方ないと思つて。でも和美は全然顔色を変えていない。

『桜花の事はまだ好きだけど俺はもう応えられない。僕が違つて思つちやったから。これは都が応えなくても変わらない。もう桜花は僕にとって部外者なんだ』

「そんな…」

『都にとつての部外者になりたくないから…僕にも舞台に立たせてよ』

優しく手を握られた。この勢いで身体まで開かれてしまいそうな口説き方。それに彼の一人称が『俺』から『僕』へ変わつてる事。変化が…

「怖いよ…和美くん」

『…焦つてるんだ。尚也に取られた上に次は九希に琥雷にも』

聞いた事のない名前が出て来た。

「こ…ら？」

『コ・ラ・イ。会つて来たんだろう？』

邪者だ。あの時自分の名をうやうやしく呼んだ邪者だ。

「記憶が無いから…なんか政治家みたいな受け流し方で申し訳ないんだけど…」

『少し戻つて来てるのに？その髪の毛は先祖返りだろ？』

「日記帳を貰つたの。多分、昔の『都様』の力を封じてるモノだと思つ」

和美は心当たりがあるらしくすぐに『ああ…あれか』と反応した。「読むのが怖くて。自分を変えてしまふのが怖くて読めなかったのに、アレを手にした瞬間から自分が変わつて来てるのも分かるの。九希を好きな自分は手にする前から居た筈なのに…まるで思わされているみたいで…っ自分が無くなつていくのが怖いよ」

『おいで』

開かれた腕に今度は自分から飛び込んだ。優しい抱擁に自分の腕を回す。狡いのは知ってる。安心するために利用しているだけだ。

『僕は役得だから気にしないで力抜いて』

そう言つて和美はおでこに軽く啄む様な口付けをした。

『日記帳なんか…読まなくても君は都だから』

和美を見た。和美はもう自分の後ろにある『一重都』しか見ていない。『谷口都』しか見ていない尚也と被る。

「九希ちゃんは？」

『九希は…遥佳のどこに行ったよ。都が望んだんでしょ？』

「望んだのは私が行くことだよ」

『都？』

「私…やっぱり行かなきゃ。九希じゃ琥雷に勝てない」

そう宣言した瞬間に家に置いて来ていたハズの日記帳が光を帯びて現れた。

迷う暇は無い。表紙に手を掛けると大量の情報が頭に直接流れ込んできた。

遠い遠い昔。時間の経過が分なくなる程暇を持て余して暇潰しに命を創った。

人形にも等しいものだった。

創った人形には『人間』と言う名前を与えてお互いに繁殖させた。低レベル過ぎて自分の暇を癒す程では無い事に気付いた。

少し手を掛けて命を造り出す事に決めた。

それが二人の巫人だ。力を持ち、知識もある、美しき者達。

いつしか巫人が人間共に馴染んで生活を築き上げ、自分からまた離れて行った時…私はまた孤独になった。

もう疲れてしまっていた自分は『生きる』事をやめる事を決めていた。

だが、二人の巫人は自分を産み直すと死に至る道を歩む自分に告

げた。

必要とされる事が嬉しかった、筈だった。

何代も掛けて産み直された自分に与えられた名前は『都』。産み直した巫人の名は『九希』と『七希』。

二人は自分が入る隙間が無いくらいに愛し合っていた。

それを知った瞬間から『九希』と『七希』を離れられる為に血族間の婚姻を禁じた。

だって彼らが自分を必要としなくなったら、また孤独がやってくる。死を選ぶ内は良かったが、今はもう自分の命が永遠の輪廻の中に組み込まれている。

だがいずれ血が薄れ、力が無くなる事で邪に対抗しうる力が無くなる事を恐れた愚かな『人間』の子孫は一族間での婚姻をさせることで血を濃くし、力を保存することに決めた。

そしてまた幾つもの世が過ぎて、神は『一重』と言う家に生まれてくるようになった。記憶も力も引き継がれた『都』が生まれてくるも、力だけ引き継がれた新たな『神』が生まれるも、一重の家にだけだった。

ある時、神に限り無く近い力を持った人間が生まれた。力の強い邪が現れて、戦いも劣勢を強いられていたので心強いものだった。それが和美だ。より強い者との子を残す事を一族や九希が望み、『一重都』と『沖野和美』との婚約が決まった。愛する九希の願い、自分の好きな人と思いを遂げられなくとも構わなかった。ただ、七希が…九希と婚約するまでは…。

その後はあまり覚えていない。

倒さなければいけない琥雷に力を与え、邪神と呼ばれて、和美に剣を向けられた。愛してる、と言われながら彼の手でこの世を去った。

九希の手で逝けたならもしくはこの命も違う運命を辿っていたかも知れぬのに…。

「九希だけを…」

幼い愛の形でしかなかった。

だが、それが全て。

「行かなければ……」

和美が呼ぶ声が聞こえた。結界の出口は九希の部屋の壁にある。

和美が前世の記憶と力を取り戻せていたとしたら厄介だ。正面からぶつかればお互い無傷では済まない。そう感じた瞬間に出口とは反対方向へ駆けだしていた。

広い広い無限に広がる結界。前世は神で、力を持っていた。現世は結界士としてして少ない力を広く使うための努力は惜しまなかった。

今、生きてきた意味が問われている気がした。『谷口都』としての最後の力を使わせて貰う。これが成功したら違う自分に慣れた証拠だ。

無を切り裂き、有に繋げてみせよう。

心の隙間、寂しさの温もり（後書き）

なんかねえ、この話は本編だと思うからなのかなあ？体力を消耗するんですよ。都さんの側から書いてる時は狂ってしまいそうになります。

成長しなきゃ！とか前に進まなきゃ！とか思いながら方向を見失って泣きわめく…みたいなトコを書くこととしてるうちに自分が迷子になります。遭難します。

シンクロしないでは書けないから難しいですねえ。

闇の快樂、光の正体

第三章 闇の快樂、光の正体

「……………っ」

痛みが心臓を襲った。

だがここは戦いの場でもなければ自分の一番落ち着くはずの場所だ。

瀬尾に着き、謁見を待っている自分達はお互いにそう思っていた。
皐月…………… たった二人の兄妹だ。しかも双子という同じ星を持って生まれてきた掛け替えのない存在。だが不安が消えなくて彼を見つめた。

「皐月、なんか……………」

「桜花、多分今のは俺の痛み」

ファントム・ペイン、双子の自分達にだけある繋がりだ。お互いに起きた事を共有しあう。能力に目覚める前から変わらない。

「心臓？何か負担があつたの？」

「いや……………俺のテリトリー内に侵入者がいるだけ」

「テリトリー？」

「全く迷惑な人達が……………」

意味が分からず首を傾げた。こんな不思議を共有していても自分の平凡な能力と皐月の非凡な能力とでは違いすぎるのだ。見えているモノが違う。こんな差を感じる日が来るとは思わなかった。幻痛以外に胸が痛くなってきた。

「大丈夫。まあこんな感じなら長居はしないと思うから」

「皐月……………全然理解できないよ」

「言葉にするのは難しいので流してクダサイ」

じゃあ言わないでクダサイ。って小さく言ったらガシガシと頭を掻き回された。むかついたからやり返した。そうこうしているうち

に瀬尾の当主が出てきてしまった。

「あら？ふふふ」

グシャグシャな髪の毛を見て華のように笑った。絶世の美女だ。年は九希より少し上ぐらいだろうか？だがその人ではなく、隣のメガネの男性が無表情のまま口を開く。

「私が瀬尾一族の当主、木月飛鳥です。手早く用件を済ませて下さい」

横の女性の柔らかな雰囲気とは違い、いかにも偉そうな男性だった。顔立ちは自分達一族に多く見られる整った顔立ちだが、如何にも冷酷そうで……これなら九希のがまだ人間味がある。簡単に自分の自己紹介と挨拶の口上を述べて本題を口にした。

「暗殺依頼を……そして休戦協定を……」

「休戦？……私達がそちらに攻撃を仕掛けた事などない」

「……私はそう言う事に疎いので分かりかねますが……うちの当主曰く共同戦線張ってでも倒しておきたい相手が居るって」

眼光厳しい飛鳥に怯み気味だったが右側に立つ皐月が黙って手を握っていてくれた。

「正直言って君たちの小競り合いに付き合ってはられない。帰ってくれ」

「あなた達がっ！自分で身を守れるというのならこんなバカな話し合いを持ったりはしないっ！」

「何か？君たちが守ってくれるとでも？そうやって我々を懐柔する気か？」

「じゃああなた達は邪者に勝てるの？」

「争いに加わらない事が一番の身を守る手段だと心得ている」

淡淡と応える飛鳥に対しての苛々が募っていく。皐月の手を握る力だけが自分の冷静を繋ぎ止めていた。

「……誰があなた達を寄越したのですか？」

隣で黙って聞いていた女性が尋ねた。飛鳥よりは話し合いが出来るそうだったので藁にも縋る思いでその問いに答えた。

「うちの当主。一重九希です」

「九希……？そう、九希が当主なの？」

「九希を、知っているんですか？」

「昔からの知り合いよ」

華が咲き誇るように、愛しい人を語る時のように頬を染めて微笑んだ。

飛鳥が咄嗟にその女性を後ろに下げた。

「飛鳥っ！九希がこのような頼みをしてくるなら……」

「七希様っ！」

「飛鳥、私達は九希が一番偉いわけでも無ければ私やアナタが一番でもない。分かっているでしょう？天者になる者がいるならばそれを生かす道を」

七希と呼ばれた女性に言い負かされて飛鳥は下がった。改めてその女性を見つめる。緩いウェーブの……長い艶のある髪の毛耳に掛けてこちらに微笑んだ。

「瀬尾、七希です。先ほどはごめんなさい。私が当主です」

「あ……」

「七つの希望と書いてナナキって読むのよ。アナタの所の当主と一緒でしょ？」

試されていたんだ。ドツと手に汗を掻いた。試されていたのか、所詮小娘扱いされて軽くあしらわれていたのかは分からないがようやく交渉の舞台に立たされたのだから。

「桜花さん、天者の力を手に入れた者が現れたのかしら？」

「え………つと九希が当代の天者だ、と」

「違うわ。じゃあ都様が生まれたのね。暗殺依頼は都様じゃないのよね？」

（み、都………？）

「泉水拓也、この人が琥雷と言う名の邪者である事を……」

「わかりました。こちらから割ける人間は飛鳥と私だけよ。それで良いかしら？」

「あ…………はい」

簡単に承諾した七希を呆然と見つめた。だが隣にいる皐月はゴクリと生唾を呑み込み神妙な顔をした。

四人で東京へとんぼ返りが決まったのだ。

また、だ。

悠宇の腕から泉実は自分を掠め取るようにして奪った。

また、取り残されてしまった。

遙佳と悠宇の二人は…遙佳の術によって瞬間移動を成し遂げたのだ。空間能力はそれを持って生まれた者だけの特権なのに。今移動が可能なのは、皐月だけなはずだ。

「奈月ちゃん、大人しくするのが利口だよ」

長く美しい人差し指を自分の前に立てて泉実はそう言い聞かせた。いつも安心出来ていた笑顔も震えが止まらない恐怖の対象になっていた。

まず、彼は変化を遂げていた。尋常じゃない美しさを…顔形は変わらないはずなのに放っている。

「いず、みさ…ん…どして？」

泣きそうな声になってしまった。毅然と話しかけたつもりなのに。奈月ちゃん、君は間違っているよ。その質問は俺に投げ掛けても無駄だ。どうして…も何も、そういう役目の邪者に愚問だよ。能力者や…生在る者とは相容れぬ、死神なんだから、っさ」

「じゃあ死神がなんで…谷口都と…？」

「君は憶しないんだね？まだ質問するのか？」

「答えてっ！」

「天者だからだよ。人間を創ったのも邪者を創ったのも同じ一人の天者だ」

「天者？」

「そう呼ばれていないのか？『神様』の事だ」

ふざけた調子で答える泉実に苛立ちを隠せなかった。苛立っても

足下にも及ばない。あの遙佳が防戦一方で逃げにまで全力を尽くしたのだから。

自分が悪いと言う事は分かっている。

巻き込まれた、と言えばそれまでだが自分だって能力者の端くれ。あの方ならきつとこう言う。『自分の責任で判断しろ』と。

今はきつと判断の時だ。

その時、風が降る様に注ぎ込んで来た。密閉されたビルに、だ。異常に一瞬遅れて気付き泉実が見つめる方角に目線を寄越した。

「都様」

泉実がすぐにそう反応する。

「奈月ちゃん？遙佳は？？」

突如、天女のように舞い降りた彼女は泉実を交わして自分の身体を手繰り寄せた。姿形が全然違っているのに、谷口都だと解る。いや、これが本来の姿だって本能が知っていたのかもしれない。

「遙佳さんと悠宇は逃げたわ」

「取り残されたのお？鈍クサッ！」

眉を寄せて横目でそう言った彼女は姿形が違えど、天敵・谷口都に相違ない事が今証明された。

「アンタね、勝手に戦線離脱していつたくせに戻ったと思ったたらソレはないんじゃないのっ！？遙佳さん達大変だったんだからっ！」

「それは飛澤さん家のご主人に言ったださるかしらあ、私好きで連れさらわれたんじゃないかってよ？」

「尚也様はっ……」

と言いつ返そうとしたところで彼女の首についた手形の痣に目が止まった。よく見ると腫れ上がった頬と切れた唇、乱れた着衣、暴行の痕。

自分の主の性格を知っているから二の句が継げなかった。

「もう……尚也と関わる事もないわよ。安心して」

少し切なさそうに言う姿が今までで一番尚也の事を思っている様に見えた。

「琥雷、約束を果たしに来たわ。奈月ちゃんはもう良いでしょ？」

「ええ。貴女さえいれば良い。単純だ。貴女と一緒にしよう？」

「奈月ちゃん、残りの時間を愉んでね」

その言葉でまた彼女がまた変化を遂げた。華だ。

なまめかしい妖艶な笑みを称えて彼と共に消えていった。

勢い良く自分は扉の方へ突き飛ばされていた。また…弾かれたのか…。

「……わかった。取り敢えず飛澤に戻りなさい」

パチンと二つ折りのケータイを閉じて終話した。泣きじゃくってちゃんと喋れない奈月を平静を装って宥めながらも、自分の心の中は嫉妬と怒りで煮えたぎっていた。

「都が逃げたよ。奈月の前に現れて琥雷と一緒に消えたそうだ」

隣りで車を運転する九希に告げた。たいして驚きもしないのは都の性格をよく知る『兄』としてか、隠された力を知る『神子』としてか…九希はただ目を細めただけだった。

「目的地変更？」

「いや、東京駅に行くよ。皐月が帰って来るってメールが。18時過ぎの到着だ」

「皐月を使うのか？」

「ああ。都を探しに行くならそれしか方法がないから」

皐月が一人で力を遣えない事は九希も分かっている。自分の他人の力を自在に操る能力とセットでようやく使い物になるというのもかなり問題だとは思うが修行させている時間もない。

「和美はどうする？都を逃がした責任くらいはとって貰いたいけど…」

「メールしなさい。今の時間なら電車の方が車で東京駅に向うよりも早くこちらに着ける」

「……わかった。…遥佳と悠宇はどうする？」

本来彼らは一重一族の能力者で、九希がどう言おうが彼らを動か

す事は出来ない不可侵の存在だ。和美へのメールを打ちながらついでのような流れで彼らの所在を尋ねた。

「彼らの意思に任せるよ」

一定間隔で鳴り響くウインカーの音が妙に大きく車内に響き渡る。信号が変わり、左に曲がった。沈黙に耐え兼ねて口を開いた。

「今ってやつぱりヤバイ状況なのか？」

「都が自分の意志で琥雷に付いて行ったなら世界が終わるかもしれないね」

「何？そんな話になるワケ？」

「一応保険は掛けておいたんだが…」

九希はそう言うと言わずに都の力が宿る目を愛しそうに触れた。

「…九希、お前は都のこと…」

「愛してるよ」

その答えを聞いた瞬間に舌打ちした。結局の所、どうせ一重に近親婚等の倫理の概念などないに等しいのだから九希が都を娶ることにすれば良かったのだ。

そうすれば都と自分が付き合う事も無かった。都も伊織に嫉妬せずに済んだだろうに…。

渋滞にはまりながらも少しずつ東京駅は近付いていた。

やるせない気持ちが思考の妨げになっている。こんなもやもやした気持ちで上手く力を遣えるのだろうか？

そもそも皐月の能力は少し扱いづらい。九希の力や都の力を借りた時より…何て言うか…抑制が利かなくて、台風を手で掴もうとするようなカンジを覚える。

たった一人の空間移動能力者…皐月だって蚊帳の外というわけにはいかないのに…。もう一人の妹君、一重伊織だって…奈月だって…限界だろう。

「尚也？」

「九希、お前色々もつと上手くやれないのか？」

「不器用なんだ。特に都の事になるとダメみたいだ」

そう言って微笑む九希を見たらそれ以上の厭味は出てこなかった。

メールを受信した。尚也からだ。一方的な招集命令に顔をしかめる。

「行けません、と」

ひとりごちた。ケータイの電源を落として都の進んだ道を追い掛ける。

しかし…よく携帯電話の電波が届いたものだ。

亜空間に広がっているこの道は、途中までは皐月の力で構築されたものだ。（九希と尚也の介入があつてだが）電波はたまたま流れきたものだろうか。

その先は都がこじあけた異空間。ずっと同じ道に繋がっている保証も無いし、空間能力の無い自分の身体が無事な保証はもつと無い。だが行ける自信もあった。前世と現世が混乱していてまだはつきりしないが、この手には治癒以外の能力が秘められている。力が在るんだ。

足早に通路を駆け抜け抜けると風景が一変して光の渦の中に落とされた。

（これは…っ）

結界を身体の周りに張り巡らせてはいるものの、直接浴びたら一瞬にして消えてしまいそうな……白い闇。内包している様々な色が闇を作り出しているのか。

その中で影を捕らえた。二つの影は自分を待ち伏せていたのだ。

「和美、やっぱり来たね？」

勝ち気に微笑んだキレイな顔はいつもの彼女とは違う。性格も中の魂の輝きも違ってしまっている。外見も、美しくなった。

でも分かる。これは都だ。そして隣の男は前世で嫌と言つほど世話になつた琥雷。

「和美、取り引きしょ？私に協力してよ。そしたら願い事一つ叶えてあげる」

愛する神様からの提案だ。

琥雷が露骨に嫌な顔をした。琥雷と自分の立場は同じだから仕方ない。

愛する者は……求める者は一つきり。イス取りゲームのようなものだ。

「質問したいんだけどいい？」

「なあに？」

「琥雷と僕ならどっちを取る？」

「どっちも要らないわ」

「九希だけ？」

「うん。要るのは九希だけよ」

即答した。幸せそうな顔で笑いながら。

「じゃあ君の方とは行かないよ。都が好きだけど……生憎、その男みたいに全く見返りなく尽くせないんでね」

「見返り、あるじゃない。願いは？」

「タニグチミヤコの心だよ。ずっと……僕の気持ちはブレていない」

「……ブレないなんて幻想でしょ？アナタ、前世を取り戻したから私の事を執着しだしたじゃない」

思わされているだけだ、て言われているのか……焦がれて止まなかったのはこちらの都の事だったのかもしれない。でもずっと側で自分達と一緒に物を見てきた都はこの女の身体にはいなかった。一緒に生きてきた都が感じられなかった。

「君は自分の人生だけじゃ足りなかったの？」

「だからそれは和美も一緒でしょ！」

「残念ながら僕の引き継いだ物はデータだ。過去の記憶、歴史、力……想いもだけど意志はない」

「……………」

都は肯定するように暗い目をこちらに向けた。今まで見た事のない

い彼女の表情、殺意、そして闇が心を食らい付く。攻撃の力を振るう様は初めて見るものだった。

過去にデータとして持っている物と同じように天者の力を使う。

「僕の事だつて分かつてるんだろ？そんなのじゃ殺せない」

風が自分を切り裂こうとするのを片手で抑えつけてはね返した。

ここで終わらせてしまえばいいと思って大きな力を振るう。合わせた手の平を開くとプラズマのような光がバチバチと音を鳴らせて迸った。足場のない中、自分の身体に作る結界と、空中を舞うための浮遊術と、攻撃の手と…頭がイッてしまいそうだ。だが強い攻撃の手を止めるわけにはいかなかった。閃光を放つとヒラリと都には交わされたので向きを変えて琥雷に当てようとした。だが雷に近い性質を持つているその光はすぐに消された。

元々雷は琥雷の専売特許なのだ。もう一度合わせた掌からはまたプラズマ光が迸る。だが次のは雷ではない。

「へえ、前世の和美じゃないのね」

「だから違うと言ってるだろ」

「そうね。前世の和美なら琥雷に雷ぶつけるような事はしない」

言われたその時にはもう遅かった。自分の消されたと思っていたむ雷を琥雷は増幅して撃ちはなった。

（避けられな……………い）

造りだしていた閃光を迎撃にまわしたが自分の力を増幅されて返されたら一溜まりもなかった。

目を開けると尚也のホツとした表情が映った。あまりに日常的に見ていた顔だった為に自分の置かれた状況が判断しかねた。

「勝手に力遣つて悪かったな」

「え？」

「そうだ！都！！」

咄嗟に記憶と記憶が開通して身体を起こすとあまりの気持ち悪さに今度は前に突っ伏した。尚也に支えられてようやく周りを見回す。

見知った面々。皐月と九希と尚也に見慣れない空間。異空間で都と一戦交えた後の記憶がない。

「もしかして傷を治してくれた？」

着ていたシャツが破けているのに全くの無傷の状態。ここに治癒能力のある桜花がいなければ、尚也が治したとしか考えられなかった。彼の特殊技能であるレセプター能力を遣って。

他人の力を遣うその力、遣ってるのを見た事はあるが遣われたのは初めてだった。

中から侵されるような気持ち悪さ、本能が拒否する浸食。後ろの皐月の顔色が優れないのもきつとそのおかげだ。

「嫌な力だとか思っなよ。お前心臓止まってたぞ」

「……………」

小さく舌打ちした。

都と琥雷は自分を殺す気だと…今まで自分達を遊ばせていたなら、次は間違なく自分は手を抜けない。

「誰と戦った？」

九希が静かに尋ねた。分かっていて訊くんだ。嫌なヤツ。

「結果としてやったのは自分の力だよ」

「琥雷に雷を撃ったのか？」

今度は人目を憚らずに舌打ちした。

「凶星だからって何回も舌打ちはカンジ悪いな」

「もう少しオブラートに包んだ物言いは出来ないんですかね？」

「僕たちの間には必要ないと思うから」

しらつと言いつ切る九希に苛々しながら悪態をつき続けた。

「都は行ったのか？」

「ああ。九希は、記憶を無くしてただ従っていた僕たちを嘲笑ってたのか？」

「そんなわけないだろ？いい加減に機嫌を直しなさい」

「わかってる…都を行かせない為に色々やってきたんだろう？その眼の中に宿る都の力だって…」

「これがなければ都は完全に今の世界を壊す事は出来ないから」

都の力の宿る瞳に九希が触れた。特権だとしても言うように振る舞う九希に更なる苛立ちを覚えて九希の手の上から自分も触れた。大きな力が脈づいている。

「……………九希？これじゃお前……」

「触らないでくれ……今だけだから……せめて今だけ僕の物で」

あんなモノ、長く身体に容れておくなんて自殺行為に近い。本来の主を求めて暴れ出しているその力を……抑え込んでいるのは九希ではない。

「九希……それは我が儘で済まない問題だ」

「都を殺さなくて済む方法が他に見つからなかったんだ」

「だからと言ってもう一人の妹の人生までをを縛る権利はないだろう……！」

「伊織が望んだんだよ。力を抑え込む代わりに谷口には行かないで僕の婚約者になるって」

「兄に憧れるのだったって一過性の流行病のようなものだ！都と伊織を一緒にするなっ……！」

伊織の力は突出したもので、一族に天者として認められないのが不思議なくらいだった。

伊織の、強い……大きな力の正体は都の瞳だ。

だが浸食だって早いだろう。伊織が九希を欲するのは『都』の記憶のせいではないのか？

震えが止まらない自分の身体を尚也が引っ張って自分の方に寄り掛かせた。

怠さは取れつつあったので自分の力で立てる、と尚也を拒む。

「ここに都達が来る前に行こう」

「どうということだ？」

自分の言葉に尚也が顔をしかめた。

「昔の都ならとどめをさしに来るから」

「お前の命を、か？」

「誰であつても、だよ」

「和美……………」

「尚哉、もう都は都じゃない。それだけは分かってくれ。僕は僕の都を探す」

「和美っ！」

尚哉の腕が乱暴に自分の身体を揺すつた。皐月がすかさず尚哉を止めに入つた。

「尚哉、もう無理なんだ」

「お前……………誰だよ？」

「……………沖野和美だよ。お前の知っている和美だつて確かにここにいる。でも全部知つてしまつたら昔のままではいられない」

過去を受け入れてしまつたらこのままではいられなかった。ずっと九希が都を妹としてみられなかったのと一緒に。桜花をこの手で愛している資格がない事に気付いたから。

気持ちを感じ取つてか、九希はただ自分を見つめるだけだった。

「お前、一人称が変わつてるの気付いてるか？『僕』って自分の事呼ぶの……………」

「『僕』で良いんだよ。尚哉、本当に決めたから……………都の事を好きって言えていた時代の自分に戻る事にしたよ」

「……………」

傷つけて何になるかは分からなかった。でももう戻れない。ガクツと膝を付いた尚哉に言い聞かすように何度も唱えた。

「もう、尚哉の知る都は何処にもいないよ」

品川駅に着くと港南口まで遙佳が出てきていた。

客人……………七希と飛鳥を自分一人に預けられて少し途方に暮れていたで彼の存在は助かった。

「タクシー呼んであるから、下に」

「あ、はい」

「顔色悪いね」

「あ…………… 皐月、連れて行かれちゃって、多分皐月の体調が悪くて……………」

「双子の同調？すごいね。聞いていたけどそこまでハッキリと分かるなんて…………… 研究対象になるはずだよ」

「研究？」

「聞いた事なかった？君たちの力を使った研究を一重の研究所がやりたがっていた所を九希が差し止めたって」

「それっぽい事は…………… 聞いたかも」

「まあ、アノヒトは冷酷そうに見えても部下の事考えてるよ」

そう言って遙佳の優しい手が頭を撫でた。どうしてこう自分の周りの男の人はスキンシップが得意なのだろうか……………。自分にとって『優しいオニイサン』なポジションの遙佳からのスキンシップは少しくすぐつたい。

顔を赤らめていると後ろから思いつき蹴り飛ばされた。

「なっ……………っ！悠宇っ！！」

「おお！よくこっち見ないで分かったねえ」

「このタイミングは 안타し かないでしょ！？」

「だってムカついたんだモン」

「こっちがムカツクのっ！」

この弟、悠宇はいつもこうだ。遙佳に近づく女は全て排除。自分も、他の女も。他の女共は悠宇が誑し込んだりしている所も見るくらの徹底ぶり。遙佳の周りは悠宇の聖域なんだろうがそこまで兄弟でやられると見てるこっちが痛い……………。

（ん？……………もしかしてうちもハタからそう見えてる？）

皐月に女（主に谷口都）が近づくと徹底排除に努めていた。しかも悠宇の一方通行と違い、自分達はお互いに自分達の周りを排除していた気がする。

「桜花ちゃあん、置いていくわよう」

自分が考え込んでいる隙に悠宇は遙佳と客人を連れてエスカレーターを下っていた。

ワザとらしく手を振っているが、あれは『シッ、シッ』って追いつている手だ。

考えるのを止めて追い掛けた。本当に置いて行かれてしまう。

階段を使い、タクシーを二台に分けて乗り込むと先頭側に遙佳と客人、後ろに自分と悠宇が乗ってしまった。和美の友人とはいえ、この真前悠宇って人好きじゃないんだ。

「桜花ちゃん、もう一人少なければタクシー一台で良かったのにねっ」

「……………アンタがいなければ足りてたんじゃないの？」

「ええっ？ちよおヒドイ。俺は桜花ちゃんが大変だろうからお手伝いに出てきたっていうのに」

「ドコ行くのよ？」

「都ちゃんのマンションですよ？あそこ殆ど人住んでなくて良いから」

車は海側へ進路を取っていた。歩いてもしけるぐらいの距離だが客人を連れて歩く距離ではないだろう。オフィス街、と言うよりは道路と海しかないような場所に彼女の帰る家はある。マンションは人は住んでおらず、ただ一人きり谷口都が上の方に住んでいるだけだった。だからと言って空いている部屋に所有者がいらないわけではない。

マンションのセキュリティキーを握っている悠宇を見て思い知った。あそこは一重の所有の設備だったというワケか。

「谷口さんも大変ね」

「何？都ちゃんを気遣ったの？」

「過保護な保護者が沢山いるから」

「まあ、その保護者ぶん殴ってでも自由を掴みに行く人だと俺は思っているんだけどね」

「……………実際この間はそれを願ってしまったわ」

そう言った自分を見て悠宇はもの凄く嬉しそうにホクホク笑った。
(あれ？)

もしかして、いやもしかしなくても……………。

「た、谷口さんはマンションにいるの？」

「いや……………」

一気に表情を曇らせた悠宇を見て確信した。悠宇は都が好きだ。いつつもいつつも都の邪魔しているようにしか見えないのに……………、でもこの間だって都のピンチに駆けつけたのは悠宇だ。遥佳命に見せかけてこんな所に本心があつたとは……………。

いや、もしかしたら遥佳と都と一緒にいる事が彼の望みじゃないか？ 尚哉にも結構辛辣に当たる所を見た事がある。遥佳と都がくつついて、自分が祝福する図を彼は思い描いているのでは？ だから遥佳の女関係を始末して、都に自分が好かれないようにして、尚哉に嫌がらせをして……………。ものすっごい捻くれている愛情表現？

「アンタ……………」

「なに？」

「不毛ね」

「なっ！」

「良いのよ。私は遥佳さんの事好きだけど恋愛じゃないし、谷口さんと尚哉がどうなろうと知った事じゃないわ」

「……………秘密にしてね」

あっさりと悠宇は認めて口許に人差し指を当てて極上のスマイルをこちらに向けた。

ウインカーの機械的な音が耳に入り、タクシーはマンションのエントランスへ入っていく。悠宇が支払いを済ませる間に降りて遥佳の差しだした手を掴んだ。

「ありがとう」

「どう致しまして」

七希と飛鳥は既にエントランスの応接セットに座らされていた。

その後に降りた悠宇の手が自分の肩を押した。

「桜花ちゃん、これからの事何か聞いている？」

「全然。皇月が必要だから連れてくつて。その間は遥佳に守っても

「えって」

「ふうん」

悠宇が少し遙佳を見た。遙佳が少しため息を吐いて自分に尋ねた。

「守る……って誰から？」

「誰って……誰？」

「大凡の見当は付いてるけど、隠せばいいって事なのかな？」

遙佳はまだ呪いの効能が付いているのだろう。そんな人間に力を行使するような事を頼めるのだろうか？せめて尚哉を置いていって
くれていたら……。なんて尚哉に頼りすぎだろうか？

「桜花さん、作戦総指揮なんですよ？取り敢えず客人紹介してよ」

考えていたら遙佳にそう言われた。遙佳は後ろ手でセキュリティ
キーを解除して自分と悠宇を中に入れると扉に先ず第一の結界を施
した。鮮やかにやってのけるその結界術には呪いの影は見られない。
「考え込むと思考の小径から出てこられなくなるところ」

「え？」

「変わらないね」

「ゴメンナサイ」

客人の前に立って二人を簡単に紹介した。セキュリティキーが有
るのだから部屋は使えるのだろうが……。困っていると悠宇が5
01号室と書いてあるキーを渡してきた。

「そこなら家具も揃ってるし電気もガスも水道も一重付けで使いた
い放題」

「だそうなので……上に行きましょう」

ただこの場所を感知されない、と言う事なら至極簡単に済む。

だが自分には幾つかのハンデがあった。

一つは呪い。一つはこの桜花の存在。桜花は皐月と強く繋がって
いるから隠しにくい。

最後に七希……この人は必要以上に目立つ。内なる輝きが違うとい
うか、瀬生にそうとう強い結界が張ってあったに違いない。

結界陣を描くとまずは部屋、階層、マンションと雑把に人除けの結界を張った。

悠宇がコンビニの袋からミネラルウォーターを取り出した。

「氷もあるし…白湯にも出来るし…」

「常温が良いな」

まだ少し冷たい、水滴の沢山付いたペットボトルを受け取った。何時間張ってれば良いのか全然分からずに始めたのは正直ハンデの一因になる気がする。

結界を張ってる間は何も食べれないし眠れない。交換要員になるような能力者もない。悠宇がそれを知ってか知らずか、気を遣って走り回っていた。

「悠宇、こういう事は女の子にしてもらった方が嬉しいんだ。濃やかなとこまで気も遣ってくれるしね」

「ヒドイ！ボクの何が不満だと言っのよっ！」

「ペットボトルが濡れてるトコロかな」

「………ストロー用意しようか？」

「要らないよ」

女の子・藤井桜花が勝ち誇ったような表情で布巾を差し出した。

「桜花、君自身に結界張りたいんだけど」

「私？」

「そう。一時的に皐月との繋がりを絶ちたい」

「皐月と？」

「そう。取り敢えずこっちおいでよ」

桜花の腕を引っ張って自分の身体の中にすっぽり入れ込む。身体を強張らせた桜花から念を探った。

桜花と皐月の念は思ったより強固で、この二人の危うさを現している。

切り離そうとした瞬間に桜花から拒絶された。身も心も突き飛ばされた。

「桜花…」

「ご、めんなさ…い」

「今だけで良いから心を俺に預けてよ」
「うん」

今度は桜花から腕を回して胸の中に入って来た。素直で良い娘だ。解きほぐす様にがんじがらめだった皐月への思いを遮断した。皐月からの思いに手を掛けた。

すんなりと解けるかと思ったその瞬間。

「くっ……」

かまいたちを食らったような傷が身体中に奔る。それが皐月の抵抗だと気付くまでに一瞬惚けてしまった。どれだけ桜花を大切にしたらこんな念を造ってしまうのか…悍ましくて考えたくもない。

急に吹き出した血を見て腕の中でオロオロしている桜花の頭を撫でた。

悠宇は自分に起きた超常現象に予想が付いたらしく眉を寄せて舌打ちしていた。

「過保護だな」

「遥佳は人の事言えんでしょう？」

「ここまで病的じゃないよ」

悠宇に対しても、都に対してもここまで縛れない。と言うか自分は縛る事が怖くて、見ている事しか出来ない。

「誰か来た」

人除けの結界をものともせずに進む気配。その来訪を伝えたのは自分より一足先に七希だった。

七希という女性がどんな人なのかは自分には分からない。だがこの人がより真実に近い事は分かった。総てを知る者に。

桜花が慌てて玄関に走って行く。それを追い掛けるようにして彼女を出迎えた。

開いた扉の先にはキレイな長い髪が印象的な美少女が立っていた。

「こんにちわ」

「こん、に、ちわ」

たどたどしい挨拶で桜花が伊織の手荷物を持って中に入るように勧めた。自分の方に視線をやるとニツコリ微笑む。

「こんにちわ」

「こんにちわ、遙佳さん。尚也さんに連絡頂いて参りました。まだ本調子ではなさそうですが……？」

「っ……結界を張るくらいなら変わらないつもりだよ」

「結界の跡が分かりやすくて……これじゃ除けにならないですね」

「……だからあなたが来たと？」

「まあ、色々です」

伊織は指をパチンと鳴らす。それが合図で結界の主導権を持つていかれた。

「そろそろ限界でしょう？一重の病院に戻って下さい」

「お構いなく」

「ここにあなたがいれば敵には伝わってしまいます。一重の施設で保護して貰って下さい」

「もう遅いよ」

伊織を入り口の扉から手繰り寄せるようにして中に入れて咄嗟に結界を強めた。

突如としてその場に雷のような電気が迸る。結界の外に現れたのは琥雷と都だ。

変わってしまった都に息を呑んだ。少し自分が惚けている間に伊織は体制を整えて結界を更に強化する。

「さっきの…… 皐月さんと桜花さんの切断をしたの？」

「ああ。失敗したけど」

「多分それで勘付かかってしまったのだわ」

伊織は落ち着いた声で話すが、手早く結界を二重三重と繰り返して張った。前線は彼女に任ずとして、放心している桜花に奥に早く行くように言った。自分も奥で悠宇に合図する。

「七希さん！飛鳥さん！」

部屋に飛び込んだ瞬間に息を呑む事になった。外に足止めしたは

ずの都が中にある事。

「七希？やっぱり転成してたんだ」

美しく笑った。自分の好きな笑顔は何処にもなくなっていた。

この都が自分の知っている都とは別物だと言う事が分かってしまった。それは……きつと自分達の渡した『本』が原因である事を自分も悠宇も知っている。

「遥佳！良かった、生きてた」

都はいつもと同じ様に自分に笑いかけるのに何かが違う。心の伴っていない上滑りした表情に良く出来た人形のような気持ち悪さを感じた。

七希の細い身体を飛鳥から取り上げて簡単に拘束すると相変わらずの調子でこちらに問いかける。

「『本』を有り難う。これで私、遥佳の呪いを解いてあげられるよ！だから取り引きしよう？私と一緒に来るなら呪いを解いてあげられる」

「七希さんを放してくれ」

「遥佳？この女の味方なの？七希はどれだけの淫売なの？居るだけで周りの男を狂わしてっ！」

鬼のような形相で腕の中にあつた七希の首を絞めあげた。その瞬間から突然変化する。三人で同時に駆け寄って止めようとしたが全然効果がなかった。七希と都の周りには薄い結界のようなものが存在して弾き出されてしまう。

「都！」

「遥佳、あなたは和美とは違うと思ったのに」

そう言った都が、どの都なのか一瞬判断が付かなくなりそうになった。だが、間違えるわけにはいかない。自分達の大切な都は、もう居なくなってしまったのだから。

七希を伴った都は自分達を嘲笑うように闇の中へと消えた。何も出来ずに見送ってしまった自分達は混沌と化した部屋の中で膝を付いて自分達の無力さを呪った。

真っ黒だ。闇の海に飲み込まれてしまっていた。尚也を傷付け、遙佳を利用し、和美までも狂わせたまさに邪神。

それでも九希を愛していた。兄妹なんかの愛では収まらないこの気持ちが自分に琥雷の手を取らせた。

壊して、壊して、壊して進めば良い。道を造って行けば九希の前に繋がっているって昔から思ってたってきたんだ。

（違う…）

愛してやまない九希と、殺しても憎みきれない七希…。

みんなみんな愛してるわ。私の可愛いお人形さん、逆らうなんて許さない。

（違う…）

（私、みんなと一緒に生きたい）

今度こそ終わらせる。手に入れてまた壊してお終いにしよう。

（私、九希が大切だけど…）

（九希だけじゃ生きれないよ）

「あなたはどうかやら今までの都様ほど狂えなかったみたいですね」

「え？」

無性だった世界に突然声が出て驚愕した。

気付くと琥雷と共に進んだ自分を見失っていた。

代わりに10才くらいのピンク色のベロアのドレスの女の子が見下ろすように立っている。でもここは闇だ。自分の姿形は依然として確認出来ない。

闇の正体も分かっている。この闇は自分の心だ。身体が闇色に染まっけていて他と区別が付かない。光があるのはその子の居る場所だけだった。

「都様、神は皆ここに辿り着かなければならないのです。ここからですよ！」

「え？」

「よくお出で下さいました、無の塔へ」

そう言って彼女がジェスチャーした瞬間に視界にバベルの塔の様な高い高い塔がそびえ立って開けた。

「あ、の…」

「私、無の塔の水先案内人、サ・ク・ラと申しまあす♪」

引っ掛かるものが有り、眉をピクリと動かした。切迫した自分の心と不釣り合いで苛つく喋り方。

「やあだなあ、もすこし肩の力抜いてくださあい？」

「サクラちゃん？私アナタを相手してる…何て言うか…心の余裕が無いの」

だからちゃんと状況説明をしろっ！と目で威嚇した。

だがそこは姿形で煙に撒くつもりらしく、可愛らしく首を傾げた。苛立ちは募る。

「お名前は言えますかあ？年齢はあ？」

「ミヤコっ！17才っ！」

「えー？なんか違うっ…」

「違わないわよっ！私はタニグチミヤコっ！九希の妹で……」

『タニグチミヤコ』は色々な行動で他との繋がりが何も無くなつた事に気付いた。

自分と彼らを繋ぐのは一重九希だけ。遥佳も尚也も和美も、九希も…琥雷と一緒に向つた事で総てを裏切ってしまったのだ。

九希は血の繋がりで保証されていた。自分が一番欲しくなかった繋がりが自分をあの世界に繋いでいる。

「貴女は誰ですか？」

サクラは、今度は茶化さないで真摯な瞳を向けて尋ねた。

「私は…谷口都よ。他の誰でもない」

「はい。正解デス」

彼女は腕を身体の後ろで組んでいつの間にか自分を見下ろしていた。

いつの間にか、自分は闇ではなくなっていて…その場にへたりこんでいた。

「手の掛かる…意地っ張りデスネエ」

呆れた、というようにサクラは首を横に振ってお手上げのポーズをした。何の事か分からずに周りを見回した。

常闇が消えていた。

自分を認識できた途端に自分の上下が決まり、足場が出来てサクラがちゃんと立っていた。否、最初からこうだったに違いない。自分だけがそれを認識するのを拒否していたのだ。地面…赤茶色の煉瓦張りの規則正しい道に、同系色の煉瓦で出来た大きな塔がそびえ立っている。冷たい煉瓦の感触が自分の五感を少し取り戻させた。お陰で混乱している頭でも今まで自分が暮らしていた世界とは異質であることは理解出来る。

「自分を見失ってしまったらここでは消えてしまいますよ。アナタの名前や生きてきた歴史をお忘れなく」

「サクラちゃん」

「サクラと呼び付けて下さいませ」

「サクラ、私は死んだの？」

「判断が難しいとこですねえ。取り敢えず自分の事を理解出来ましたか？」

「一重一族は…神としての記憶も素質も受け継いで生まれるとロクでもないから素質だけ受け継ぐように男が尊重されてきた？」

「一重九希さんは力を持ち過ぎていたから『天者』だと周りが勘違いしてしまっただけですねえ…可哀相に」

サクラはいつの間にか手に持っていた分厚い本を捲って私たちの人生を振り返る。まるで歴史の授業の様な淡々とした言い方だ。

「彼は『神子』です。後から生まれた貴女が『都様』の生まれ変わりとと言う事はすぐに分かったでしょう。だからすぐに谷口に移して、尚…『都』と名付けた。狂っていった『都様』は違う名前を持った方が多いんですよ。そこをわざわざ『都』と」

「私の瞳を九希が持つてるの」

「あー、そうみたいですわねえ？良かったです。力の半分は簡単に戻

つてきますね！」

「え？」

「九希さんから瞳を返して戴きましょう！」

「でも……」

「はつきり言いますけど今のアナタは幽霊も良いとこの精神体です。核になるものがあればここで人形を用意して娑婆に戻せるけど、今の状態じゃ何も出来ませんよ」

サクラは人差し指をピツと自分の目の前に立ててこちらを睨んだ。

「でも……九希には私の瞳が必要だったんじゃない……」

「九希に……必要なんじゃなくて、天者に必要なんです！アナタ天者にならないといけないんだから」

「ならないと……って……私天者なんじゃないの？」

「違います。あなたは都様の生まれ変わりではあるけど今は天者候補ではないです。修行の場がここ、無の塔でつすわ……」

「はあ……」

「じゃあ中に行きましょう！貴女に必要な事はたくさんあるのだから……時間はたっぷりアリマスヨん」

サクラが塔へ促した。

頂上が見えないんですが……。一抹の不安は消えないがこのコンダクターと一緒に行くしか自分には残されていなかった。

（あーあ……分かつちゃった）

このサクラという名の少女、誰かに似てると思ったが……。はじめは底抜けに明るいしゃべり方が桜花に似ていると感じたが……。ヒトを小馬鹿にした物言いは自分に似ているのだ。誰も信じていない自分に。でも桜花を憧れてしまう自分に。

大きな扉を潜り中に入ると外との空気の違いが分かる。清浄に保たれた神殿のような感覚が身体に染み込んできた。

塔の中は中空になっていた。外からもだが上の階は何階だか全然分からない。続いているし……下行きの階段も在る所を見て下も続いている。

「無、限？」

「そーですよ。無限大だから『無の塔』」

本来は何も無いから『無』だろうが…。この捻くれたネーミングセンスは自分のものではないと思う。

「都様、取り敢えず体力作りに階段を使って上まで行こうと思います
すが…」

サクラの提案に首を左右にブンブン振った。だってキツイ階段が螺旋状に塔の内壁を取り巻いている。体力には自慢じゃないが自信がない。つか体力つて一朝一夕でナント力なるものじゃないし！
「だあいじょぶですよ！無の塔は天者の学校のようなものですから！時間無いヒトの為に負荷を掛ければそれだけの効果が得られます
まっすうっつ」

「いやいや…神になれるだけの負荷ってどんなんよ！」

「10回位死んだ方がマシって思う程度ですかねい？」

「やだ！」

「えええっ！だってやらなきゃ生き返るチャンスはなくなるんですよ
すよおっ??『死ぬ』よりは『死んだ方がマシ』な思いのが良いと思うんですよ」

「人それぞれだと思います。出来ればもっと楽しんで生きたいって
うか」

「やだなあ！そんな事言っちゃってえ！生きたいって…死にたくない
って血の契約をした結界作ってみたり、自分の生命力使って攻撃
してみたり…生に執着してないようには見えませんね」

サクラはまた本を開いて言った。人の歴史が綴られている悪趣味な本。

「それは閻魔帳？」

「そんな物騒なものじゃないです。都様の観察日記みたいな
ものですよ」

「物騒じゃないけど果てしなく大きなお世話だと思っわ」

「ですねえ。でも都様、あなたは力を有効的に遣う才能を持っ
てい

る。小さな力を大きく遣える才能！ECO素敵っ」

「…私の力で出来る事なんてやっぱり限られてるわ」

「拗ねちゃいましたかあ？だから修行やりましょう！体力、気力揃わないとキツイので登りましょう！登ればちゃんといてきますから」

確かに喉から手が出る程欲していた力（決して体力不足のことを言ってる訳ではない）だ。嫌々ではあったが階段を登り始めた。

「サクラ、この階段は1階何段あるの？」

「何段あると思いますう？」

上を見上げて内壁一周が一階層だとすると…。50段くらいかな？

「100段とかね」

と明るく返した途端に階段の幅が小刻みになった。

「えっ？ええっ？?!！」

「ホントは何段だと思いました？」

「50段くらい…」

また元の階段の状態に戻る。距離は変わらない。ただ階段だけが生きているかの如く伸び縮みしただけだ。

「ナニコレ？キモい」

口許を歪めて嫌がるとサクラはやれやれといった様子でゆっくりと首を左右に振った。

「この塔は都様が大好きだからあなたの望む形になってくれたんです。距離は変わらないですよ。でも段差の変更くらいならきいてくれるんデス」

悪戯に100段と言った事が恥ずかしくなり頭を垂れた。登り易さ的にも始めの設定が一番だと思い、下を向いたまま登った。

「じゃあそのまま300階を目指してがんばりましょう」

「さ、ん…百？」

体力不足の自分には絶望的な数字に聞こえた。

気が遠くなるような数字で気付いた。自分に取っての負荷は筋持久力を刺激する事だ…と判断されてしまったのだ。追いつめられ

ると生命力を攻撃に換えてしまうようなお馬鹿な事をしてしまう自分だから追いつめられないように基礎力の底上げを。
すぐにへこたれる甘ったれ根性によく利く薬だった。

女という存在はどうしてこうも強欲なのだろうか？

九希だけで良いと言ったその口で和美を誘い、次はあの男。今の『谷口都』嬢の残留思念の様なものだろうがあのだ二人に対しての執着は少し違っただけに見える。

（興ざめ…とまではいかないが）

結界内に移動した都を見送り、目の前の少女を改めて見た。

顔の造りは前世の都に似ている美少女、伊織と呼ばれていたか？

「君が相手か？」

「いえ、私は結界を張るだけですから」

お気になさらず、と微笑んだ。きれいな顔に似合わずびくともしない結界はこの世代の能力者の潜在能力の高さを思わせる。と言うか、この伊織嬢の中に在る『都』の能力の欠片。

「伊織さん？君はどうしてそれを持つてるのかな？」

「……………兄に貰いました」

「兄？」

「一重九希です」

その名に反応するお互いの態度は真逆のものだった。苦虫を噛み潰した様に顔をしかめた自分と幸せそうに紅い唇からその名を唱えた伊織。

だが、この少女の内に秘めた『女』は多分本物だ。元の谷口都よりもずっと大人の雌。

血筋が一緒ならどうしてこちらが『都』を継承出来なかったのか不思議な位に彼の天者にそっくりだった。

（似過ぎているから…か？）

同族嫌悪みたいなものだろうか？

ならばこちらにも邪者なりのやり口でやらせて頂こう。

揺さぶる言葉を少し掛けてやれば良い。

「その男が誰を愛しているか教えてあげよう」

「知ってるわ。私じゃない」

「都様でもない」

目を開いたのを見逃さなかった……

足が突っ張って腹が割れてきそうなくらいにようやく目標の300階がやってきた。

サクラはずっと軽快な足取りで自分の後ろにピッタリ張り付いている。

『CCC』300を現すローマ数字が表記されている階に登り切った。

「お疲れ様です！じゃあ第一の修行と参りましょう」

息が上がっていた為首を縦に振って返事に代えた。サクラが少し呆れたような顔だ。

「体力の次はこの修行で能力の底上げをして戴きます。あなたの力は何が足りてないか分かりますか？」

「それって何で結界士止まりなのかってこと？ケンカ売ってんの？」
「売ってません。自分と見つめあわないと先に進めないのので自覚はして頂こうかと」

「……うまく力を遣えてないから？……じゃないか。私、力を遣うのは上手いと思うし」

「そうですね。何が足りないと思いますか？」

「力」

「どんな？」

「どんな……ってそれが分からないから結界士なのでは？頭で考えてもさっつっぱり分からずに降参した。」

「アナタに足りないのは外側の力。だから普通の結界士と違うんです」

「え？私普通じゃないの??」

「はい。そりやもう」

あつさり『変』て断言されて力が抜けた。

（そつかあ。昔から人と違ってたのかあ）

「論より証拠！いつも通りの結界を身体の周りに張り巡らせて下さい」

言われるがままに能力を行使しようとした。

「……………っ……………出来ない」

「幾らふんばってもダメですねい。これは身体に力を蓄えていないからです」

「あの…」

「能力者と結界士の決定的な違いはそこなんですよ！通常…能力者は自分の内側にある『力』と外側にある『力』…まあ簡単に言うと五行ですかね。あれを織り交ぜて様々な異能を造り出します。だから個性みたいなものが出るんですね。比べまして結界士は五行しか遣えるものはありません。だからより自然に好かれた者勝ちと言うか…」

「私ちゃんと五行契約したハズなんだけど…」

サクラが笑顔はそのままに黙って聞け！というような威嚇をした。

「五行契約が上手く行き過ぎた…と言うか」

「ナニソレ？」

「力が突出し過ぎちゃって出てこないんですよ」

「……………ナニソレ？」

「谷口都っていう身体にそれを受け入れるだけの素養がなかった…って言えば分かりますか？」

「じゃあなんなので『都』は力を遣えるのよ？」

「あなたと一緒にです。内側食い潰して無理をしているからですよ。まあ身体はともかく、能力は天者ですから間違なく世界を滅ぼせます」

「私…身体に戻るのかしら？」

「戻る前に彼女が身体を喰い尽くさない事を祈って下さい」

一通りの説明が済んだようでサクラは一際豪奢な造りの扉に手を掛けた。

「さて、都様。拗ねきってしまった五行と再契約をして来て下さい」

「それだけで良いの？」

「はい」

「分かった」

取り敢えずは自分の両の手はガラ空きだ。さあ、掴み取りに行こう。

勇んで扉を開け放った。

開けた扉の先は高い空が待ち受けていた……もう一つ世界が広がっていた。

「五行契約……か」

木は燃えて火を生む。

物が燃えればあとには灰が残り、灰は土に帰る。

鉱物・金属の多くは土の中にあり、土を掘ることによってその金属を得ることができる。

金属の表面には凝結により水が生じる。

木は水によって養われ、水がなければ木は枯れてしまう。

自分の契約は生かす事なく強過ぎる力によって潰してしまった、と言う事だ。この世界をちゃんと感じて、ちゃんと知れば、自ずと力の使い方も分かる。

緑が育つ事も、風が吹く事も、波が寄せる事も、恵みの雨、太陽の光、母なる地に与えたモノ。

それは生命の息吹。

だがここには肝心の命が存在していなかった。戻りましょう……私たちの愛する場所に。

手の中で術を繰る。五行の順番を踏まえて自分の中に再度取り込んだ。

「都様」

いつの間にか現れたサクラに微笑んだ。このタイミングの良さは彼女が自分を見ていた証拠だ。

「あなたには今迄の都様にない有り余る才能がある。何だか分かりますか？」

「分からないわ」

「少しは考えて下さいませ」

「だってね、サクラ。私都の記憶を受け継いだけど性格が違い過ぎて追い出されちゃったわけでしょ？」

「乗っとられちゃった訳ですねえ」

「違い過ぎる性格の人と比較したらキリがないわ。私は身体が無くともやらないけないんだから」

サクラが大人びた眼でこちらを見つめた。彼女の本質はこれだろう。

永い時を駆ける少女の姿の番人。その姿で欺いている時の監視者。何度となく間違いを犯す自分を不甲斐なく見ているに違いない。

「都様、あなたが今迄と違うとしたら色々な味方がいる事ではないでしょうか？愛される『谷口都』を創ってきたのでしょうか？あと先程も言いましたが、あなたは力の使い方を教える必要がないくらいに『遣う才能』を持っています。だから今迄結界士として十分働いてきただろうし、これからは命を司る天者としてその力を奮えば自ずと結果はついてくるはずですよ」

「うん！アリガト！」

「では都様、次の修行と行きましょう！ここから最上階まで行つて下さい」

パタンという扉の音が耳に届くとサクラの姿は無く、いつの間にか300階を示す印の前に立っていた。扉も消えている。階段を見上げて上を見つめて…。

（また？またなの？）

しぶしぶ歩き始めた。

体力は本当についているらしく初めより身体が軽かった。修行の

場なんだと言ったサクラの言葉は確かなんだろう。

10階毎に刻むように存在する階段ホールに辿り着き、ふと下の階が気になって階段を降りた。

（一階下がったら着いちゃったー！…なんてことないよね）

なんて甘い考えを知ってか知らずか、下の階は今迄と全く違う雰囲気だった。息を呑む。

これは……『・∞』と印されている。つまり最下層、だ。下行きの階段が無い。

「なっ！なぁんでえええ」

叫び声が反響して戻ってきた。まさか…だ。まさか……。

本当にまさか。

要するに。

（一階…）

と願いながら上へ行くと他の階とは違う大きな扉の着いた場所に着いた。見覚えのあるここは正に最初に通った一階だ。

（サクラの居る階に！）

そう願えばそこは…

『∞』と印されているその階は明らかに他とは違い、ドーム状の天球儀のようになっていた。

「うわぁ…」

サクラが静かな笑みを携えて立っていた。

「よく気付きましたね。気付いてからの反応の仕方をとってみても満点のスピードです。やっぱり天者としての才覚は十分に備えてますね」

コワイクライニ…

とサクラの口が動いた。動いた瞬間にホールの天球儀の風景が変わっていく。

急激な変化に身体と頭がついていかずに視界が歪んだような錯覚を味わった。

「サクラっ！」

「都様、こちらは『罪の部屋』でございます。取り敢えずは何も考えずに今から映し出されるものをご覧下さい」

サクラの姿がまた消えて、女が立っていた。

（あ、私だ）

姿形は違う。緩いウェーブ、茶色の髪。飾り気のない幼そうな表情。

（あ、でも……）

（私と似てるかも？化粧しなければあんな顔かも）

直感でそう感じた。でも確信があった。ここは……繰り返し重ねた罪を学習する部屋だ。

どうして？しきりに考えたが答えは見つからない。

まだ開発途中の町並みを駆け抜けて捜して捜し人に目を凝らした。

自分の願いを琥雷が聞き入れたなら、七希と九希は琥雷と戦っている。九希を助けなければ元も子もない。

あちらこちらに人の居ない平地があるが整理されていない為に道は入り組んでいる。

何がここまで追い詰めたのか、自分は知っていて……なお追い掛ける事をやめない。その執着は尋常じゃないものだった。が善し悪しの判断は利かなくなっていた。

（九希、九希……）

（私が天者だと言うならば……）

選ばれるのは自分でなくてはいけない。それならばどうして？どうして人の心はこんなにも掴めないものなのか……。

あの二人は一つから生まれたおかげで幾度生まれ変わっても結局結ばれる。だから決心したんだ。今生では九希に自分を選ばせると七希さえいなくなれば必然的に。

それなのに……。

「都っ！」

強めに自分に呼び掛けたその声は自分を妨げるもの。捕まる訳に

はいかず、振り返りもせずに走った。

「こっん…のっ！ワカラズヤっ！！」

「ヤダあっ！」

「嫌で済む問題じゃないんだ！」

着ていた質の良いトレンチのベルトを引つ張り上げられて捕獲された。怒って、いつもの穏やかさを失っている和美は初めて見る。

賢者としての確立した地位を持つ彼は、この世界で唯一の自分を止める事の出来る人間だろう。

肩を強引に捕まれて身体を向き直させられた。

「どんなに願ったって九希はダメだ！」

「どおしてえ？」

分かっているのに訊く。分かっているにも納得出来ないから。

心は縛れない。

分かっているのに、分かっているのに。

縛られている自分が本心なのかはわからない。こんな自分が冷静な判断は出来ないから。

「和美君、私わからないよ」

腕にすがりつく様に言った。前世に思わされているだけの事なのか、自分の本質なのか。

「都、天者としての儀式を行なった事により前世の記憶に思わされているだけならば…」

「わからない」

「前世と繋がり断とう」

「…………でも」

「力も記憶も棄てて、僕と生きよう」

「……………」

和美の手を取ろうと思っていた。その瞬間。

身体を挟まれたような感覚を味わってハッとした。九希と七希と一緒に命を絶った事が自分にはわかった。琥雷の手によって、それは自分が嵌めた事だと分かっているにも耐え難い衝撃。

「九希…七希…」

息苦しくて一生懸命に息をしたのに逆効果の様に目まいがする。
頭まで酸素が回らない。

「どうして？どうして九希まで連れてくのっ！七希！七希い！！
どうして私を独りにするのっ！」

叫んだ。

声が枯れて上手く出なかったが、喉が擦り切れてでも彼女に最後に届いて貰いたかった。

「私、を置いて行かないでえ！！」

枯れた声の代わりに世界の総てが自分に応えてくるのがわかった。
竜巻が唸りを上げて発生し、火を纏う。雨が雷を携えて近付いてくる。まだ足りない。

壊してしまえば良い。総て。

潰してしまえば良い。何もかも。

力の放出が始まり和美の手が離れてしまった。

「みや…こっ！くっそお！！」

世界を闇が飲み込むのだって悪くない。そう思った。

だから壊すよ。

無意識と意思の合間に彷徨ってただ破壊だけを望む。身体は力が抜けて立てないが力だけは放出出来ていた。

九希、九希、九希…

なんでなの？七希

急に負荷が取っ払われて身体が軽くなった。血だらけの身体で和美が自分を抱いていた。

「あれ？もっと上手くやってあげるつもりだったのに…おかしいな？」

「私を抑え込んだの？」

和美が大きく首を横に振り、一冊の本を自分の胸に押し付けた。
力がうずく様な感覚がしてその本が自分の物だと伝わってきた。

「違うよ。さっき言ったとおりに都の前世の力を外に出したんだ。

でも出したのは前世だけだから……」

「身体の傷は……私が……一重都がやったってこと？」

「力不足でごめんね。血が、止まらないみたいだ」

「どんどん冷たくなっていく身体をただ抱き締めて、思った。

私も、死のう。

罪を償う手段はもう残されていないから。

罪を背負って死のう。

大きな波が総てをさらう様に記憶の渦が消えていった。サクラが見える様になってようやく長い悪夢が終わった事を知る。

「お帰りなさいませ。如何でしたか？」

「これは何なの？気分悪いんだけど」

「歴史ですねえ。大量の情報があなたの頭に入っただと思いますが、いっぱい有り過ぎてよく分からなかったでしょ？」

「似た様なことばかりして過ごしてるのは理解してたわよ」

「あの本が如何に出来たか。賢者の命が織り込まれてますから怨念も十分栄養補給出来たのでは？」

「何が言いたいのか？」

「今の記憶の『都様』は別に九希様を肉親の意味以外では愛していませんでしたよ」

「それを記憶と力を受け継いだらあんな風になっちゃった……と？怖っ！」

「だから都様」

「私は……もう分かってるわ」

「いえいえ、違います。あなたの身体を調達に行きましょう」

「え？」

突拍子もない流れに驚かざるを得ない。サクラは調子を崩さずに言った。

「さっきの記憶の身体が余ってるんです。今のままの都様では幽霊と同じですからそれよりは良いでしょ？」

「え？ええ？ミイラと幽霊なら幽霊のが…」

「嫌ですねえ！いつまでも宿らないで彷徨ってると力尽きますよ？ただでさえ修行で消耗してるの・に」

「行けば良いんでしょ！何処よ？」

「一重本家です。頑張って行つてらっしゃいませ」

サクラ樂觀的な態度は最後まで崩されずに無の塔を後にすることとなった。

たった独りでこの世に生まれ落ちた人々は心細くはなかったのだろうか？

生まれ落ちた時からずっと二人だったのに最近孤独を感じる。

自分の異質さと彼女の清浄さを比べて檻に閉じ籠ってしまう。恐らく彼女をこちら側に引摺り込んだのは自分だ。

自分一人で被れば良い役目を二人で割ってしまったからいつまでも一人で力を使いこなせない。それなのに桜花に嫉妬すらしている浅ましい自分がもう嫌だった。

それなのに…。

カクンと膝が抜ける様に力が抜けて地面にへばり付いた。何が起きたのかは一瞬にして理解出来た。

「臯月？」

心配そうに尚也が声を掛けるのを聞いて返事をしようと努力した。口をパクパクさせて出ない声に更なる驚愕を覚えた。ヒュー、ヒューと喉から鳴る異音が自分の肺の負担を表している。

言いたい事が言えない事がただ悔しくて、涙が零れた。

助けを呼ばなければ！

何の為に双子として生まれ落ちたのか分からなくなる！

和美が近くに膝を付いて自分の喉に手を当てた。

(アツ…い…)

熱を帯びた途端に呼吸が楽になり声が出るのが分かった。桜花と同じ力、治癒術だ。

「っ！桜花が！！」

「何があつた？」

「桜花の所にいた」

「誰が？」

「都さん」

和美の顔つきが変わつたのが分かつた。それ以上に尚也の雰囲気
が鬼気迫るように変化した。自分にとっての桜花が彼等にとっては
都だつたに違いない。

「……そうか」

和美が深呼吸する様に大きく息を吸い込んでゆっくり吐いた。落
ち着いてこちらを見つめると申し訳無さそうに微笑む。

「一緒に行けない。やっぱりやらなきゃいけない事があるから。あ
と……九希は行かない方が良くと思うから行かせない」

「じゃあ見殺しにするの？分かつてるのかよ？都さんだつたけど都
さんじゃないんだ！」

「この中で一番分かつてるつもり」

掴み掛かろうとした手を一瞬にして抑え込まれた。能力だけでは
ない力量の差を、埋められない差を分かつてるからこいつを連れて
行きたいのに……。今ほど自分の無力さを呪う事はないだろう。

「尚也、ごめん」

暴れようとする自分を抑え込んで和美は言った。

「俺は都に会わなきゃいけないから良いけど？」

「尚也の望む都じゃないと思うけど？」

「それは自分の目で確かめる」

尚也の手が自分の身体を和美の拘束からさらつた。

「桜花の居る場所は分かる？」

深く頷いた。苦笑混じりに「よしっ！」と言つた尚也の腕が自分
の胸に置かれた。

「都さんのマンションだよ」

また浸食が始まる。

身体の奥から引き摺り出される様に、身体の中を掻き回される様に。決して馴れない異質なものを請負う儀式が。

「うつ…あつ」

無意識に抵抗しようとした身体を、尚也の腕が更に力を入れて抑え込むのが分かった。

そしてまた主導権を譲る事になる。

ただ、力の使い方は自分の使うものよりもずっとスマートで文句の付けようがなかった。

次に自分の目に映った景色はマンションの扉の前だ。力尽きるように地面にへばり付く自分を引きはがすように置いた尚哉は扉に触れた。正確には、結界に。

「ダメか…」

低く漏らした尚也の声に反応して彼を見た。眉間にしわを寄せる彼はしぶしぶ説明を口にする。

「結界が張ってあるせいで中に直接移動出来なかった」

「え？結界？」

「解くけどね、結界」

「え？中に何が居るか分からないんでしょ？」

「桜花が居るんだろ？お前を信じたつもりなんだけどね」

「……………そうだけど」

桜花と一緒に何が出てくるかなんて保証は出来ない。

だがこじあけてくれないと自分には何もしようがなかった。本当に今こそ無力さを呪う。

「…術者は伊織と遥佳だな」

尚也がそう言った瞬間に何かが弾ける様な感覚が伝わってきた。人を避ける様な嫌なイメージが抜けて結界が無くなった事が実感できた。

「入るぞ」

短い宣言に頷いて力を振り絞って立ち上がった。後に続く。扉を開けると術を無理に解かれた伊織がこちらを睨み付けていた。

「乱暴過ぎますよ」

「急ぎだったんだ」

「もうこちらは少し落ち着いてきました。また結界張りますから」

「状況は？」

「最悪です」

都に似た美少女は自分の苦手で息を呑んで尚也の影に隠れていた。不機嫌に報告する彼女を見るのは初めてかもしれない。任務に失敗する所なんて見た事がない。

「七希さんがさらわれました。お姉ちゃん……と琥雷ですか？」

尚也の眉間のしわが更に深くなった。伊織もそれに気付いたのか呆れ顔だ。

「後は無事です。皐月さんの、妹さんも」

そうだ！桜花！と思考回路が直結して伊織に適当に頭を下げて奥に進んだ。

リビングの扉を開けると遙佳と悠宇と桜花がソファに突っ伏していた。

奥に長身の男性が立っている。連立って来た飛鳥だ。

全員の無事を目で確認しまだこちらに気付いていない桜花の方にそろそろと歩みを進めた。

「…桜花？」

小さく声を掛けると遙佳がパツと顔を上げて言った。

「今、眠ったところだから少し起こさないで」

「あ…」

「君の念を無理に引き剥がしたのは俺だよ。異常を感じて来たんだろっ？」

「はい」

「今は君とは繋がってないから」

「…はい」

「一人で眠らせてあげて？」

その言い方はない。まるで自分が桜花の負担の様な言い方。少な

からずショックを受けてその場に立ち尽くした。その自分を見て遙佳が深く溜め息をついた。桜花の眠りが深い事を確認すると、抱き上げて別室に移した。

「臯月くん」

「悠宇、起きてたんだ？」

「目―つぶってただけ」

「嫌な兄弟だな。俺の事バカにしてんの？」

「兄貴は危ぶんではいると思うけど」

「危ぶむ？」

「お前が桜花を見る目は…都が九希を見る目にそっくりだね」

その言葉が重く響いた。狂った様に九希を追いつめる姿と自分が一緒だと？

「…そこまで酷くないと思うんだけど」

「そーお？都の方が可愛げあるよ？？だってアイツはちゃんと『兄』だって線引きしてた」

ニヤニヤしながら言う悠宇を睨んだ。下衆な詮索で自分をけなされるのは一向に構わなかったが桜花をそという目で見られるのは堪らなく嫌だった。

桜花は悪くない。

いや自分だって悪くないハズだ。

悪いのは運命だとしたら神よ……いたいこの身体にどんな宿命を与えたと言うのか…。

この思考の先に絶望を見た気がして涙が瞳から零れ落ちるのを止められなかった。そんな自分に悠宇はクダラナイとも言いたげに舌打ちした。

ダメだ、溢れてしまう。

「臯月？どうした？」

上から降ってきたのは尚也の声だ。後から伊織の気配もした。顔を見せないように下を向く。

「なんでも…な、い」

何かが、音を立てて崩れる様な気がした。

いや、実際に自分と桜花の間に存在していた繋がりは遙佳が壊したのだからそのせいかもしれない。でも、壊れたのは自分の心。繋がれてた糸が切り離されて不自由な海に墜ちて行く。

「入るぞ」

短い宣言の後に乱暴に扉を開けると術を無理に解かれた伊織がこちらを睨み付けていた。

「乱暴過ぎますよ」

「急ぎだったんだ」

「もうこちらは少し落ち着いてきました。また結界張りますから」

「状況は？」

「最悪です」

都に似た美少女は不快を顔にして首を振った。

「七希さんがさらわれました。お姉ちゃん……と琥雷、ですか？後は無事です。皐月さんの、妹さんも」

皐月はその言葉に反応して中に急いで入って行く。まあ素直で良い事だ。

「申し訳ありません。私の失態です」

こちらも表面上はとも素直に頭を下げた。伊織のつむじをチラッと見やって溜め息を吐く。

素直ではないのに従順な振りをする彼女にはとびっきりの裏が存在する。

都を疎ましく思っている事も知っている。でも『良い妹』をあくまでも演じる彼女は…自分にとっては敵か味方か…。

「伊織」

「何です？」

「いや。今回の事は仕方ない事だ。追跡はこちらでしょう。君は引き続き客人を持て成してくれ」

「……………はい。九希様は？」

「和美と一緒にだ」

「わかりました」

少しホツとした顔をした伊織を率いてリビングの方に足をのばした。

悠宇が嘲笑混じりに皐月に何かを言うのとタイミングが被った。

下を俯いている皐月に素知らぬ顔で訊く。

「皐月？どうした？」

「なんでも…な、い」

その言葉に伊織が顔をしかめた。構ってオーラを出しておいてのその言い方を伊織は好まないらしい。そういうところは都と同じ。

「皐月…」

もう一度呼び掛けて手を伸ばすと勢い良く弾かれた。避ける事も可能だったが敢えてそれを受け止めた。

皐月の方が驚いていたのが印象的で殴られた自分よりも余程傷付けられた目をしていた。

「ごめ…なさい」

「良いから座れ」

有無を言わずにソファに座らせた。敢えて悠宇の隣りに。伊織がパタパタと遙佳を呼びに行き、飛鳥を交えて話し合いを開始する。取り敢えず、もう話さないわけにはいかない事態になったのだから。

「遙佳、悠宇」

お茶を用意しようとしていた伊織を手伝う遙佳が動きを止めた。

伊織が目線でリビングのソファを勧める。

「戦況報告をする前にお前達に訊く。これからどうするつもりだ？」
「散々裏切ってくれて、都を手放す結果を招いたのはこの二人だ、と九希は言っていた。意思確認は自分の判断だ。」

「……俺は呪いを解く為に都ちゃんを利用しようとしたんだ」

「調子は悪いのか？」

「あまり良くないな。でも幾ら治してくれるって言われても…」

アレハチガウ

遙佳が声に出さずに刻んだ想い。そうか、とすんなり納得出来た。
「都は天者だ。九希は影武者を演じていたらしい。だが女の天者には前世の魂が継承される」

そこまで言うともんな納得した顔をした。

「都は邪神と呼ばれる天者だ。探し出して屋敷の中に封印する」

顔を突き合わせていた人間が、全員渋い顔をした。

そう宣言している自分が一番揺るいでいる気がする。この手で都を封じる事が出来るのかを。

ソファに静かに腰掛ける青年に目を移した。

「木月さん？あなたには申し訳無い事をした。神子を結界から出さなければこんな事態は免れたのかもしれない」

「七希様が狙いなら遅かれ早かれこうなることは予測出来た。うちの結界は侵入を阻むだけのものはないです。彼が先ほど張ったモノよりはるかにレベルが低い」

「申し訳ありません」

丁重に、もう一度頭を下げる自分に木月飛鳥は苦虫をかみつぶした様な表情をした。

謝られたところで既に遅くて、謝ったところで自己満足にしかないと分かっている。

謝らないで自分を憎めと言う方が余程彼には親切だろう。

だが能力者の念は今妨げになる危険性がある。余計なことで邪魔をされると本格的に助け出せなくなってしまう。

「和美曰く奴等の狙いは九希だ。九希の持つ『瞳』に力の半分が眠っている」

「和美はなんでここに来ないんだ？」

悠宇が訊いた。和美と仲の良かった彼は和美の変化について行けるだろうか？

「九希をここに連れて来たら都が引き返すかもしれないから」

「二人はどこに？空間能力者の皐月がここにおいて二人はどこに逃げ

れんの？」

「和美は行けるよ。皐月ほど万能では無さそうだが移動をする分には訳なくやっていた。アレは………賢者だそうだ」

「そう……」

不安定に悠宇の力が揺らいだ。納得しにくいのかもれない。今迄二人は補うように存在していたから。

「ともかく今は…伊織と俺と遥佳で結界を張ろう。和美が後で合流するって約束していったから。あと遥佳の呪いを解く事かな？」

「じゃあそれはわたしがやります」

突然話に参入してきた伊織は静かに言った。

「私、そういうの得意なんですよ」

今まで、無関心だったクセに………と言っても仕方ない事は分かっている。彼女の立場は微妙なのだ。

無の塔から出た途端に腕が引つ張られた。

咄嗟のことに対応できなくてただ動きを止めた姿はどんなに滑稽なモノだったのだろうか？

「都！」

引摺り込まれるが如く身体を絡めとられた。

和美の腕は自分をもう逃がす気はない。それが伝わってきた。

「か、ずよし……くん？」

「都、何その身体……？」

「あ……」

弁解の余地もない。

逃げ出しておいてのこの状況。責められる以外に自分の出来ることとはなく、諦めるように抵抗する力を抜いた。

だが和美の影から引つ張られるような感覚を感じて、上手く力を抜くことすらままならない。その人を瞳が捉えてしまったから。

「九希ちゃん」

黙って見守っている彼は狂いそうな程の誘惑を携えていた。むし

る何故今まで気付かなかったのだろうか？

他の人間とは違う吸引力。これに無防備に当たっていれば兄であれ、恋に堕ちるのは仕方ない事だと思える。でもそれが目に見えてしまえばまた別の醜悪さが見える。

これがあの愛おしいと思っていた九希だとすれば………今まで何をしていたの？

「あの……」

「君は都？それとも……都様？」

判別を付けるならどこで？九希にとってそれはどういう違いがあると言うの？

『私は……谷口都よ。他の誰でもない』

『はい。正解デス』

『自分を見失ってしまったらここでは消えてしまいますよ。アナタの名前や生きてきた歴史をお忘れなく』

サクラの初めの問い掛けの内容と同一である事に気付いて、大きく深呼吸した。

「私は谷口都よ！」

「ああ……そうだったね」

寂しそくに、でも嬉しそくに九希が口にした。

「僕はダメな人間になってしまったよ。都様に縛られる事は苦痛ではないんだ。七希を愛していても都様を拒めない」

「え？」

「だから君がただの『都様』じゃなく、僕の妹の『谷口都』で立っていることにホッとしてる」

でも、都様じゃない事を苛立つてる自分もいる、九希はそう続けた。

罪の積み重ねは、どちらが諸悪かを隠してしまわれた。

誰が歪んだ？

もしかしたら自分達の方が歪みなのかもしれない。『思わされない心』を持った自分の方が……。

「九希ちゃん、瞳を…返して？」

「分かって…るよ」

より深く悲しみを称えた瞳。罪の重さを見て来たその瞳を返して貰おう。

深呼吸して言葉を選びながら言った。

「『九希』、今までありがとう」

「都…さ、ま」

出てきた言葉は自分が選んだモノとは多少違ってしまっただが、これが『九希』と一緒に生きてきた『都』の思いで、自分はそれを伝えようとしていた。

だからこれで良い。

九希の瞳に口付けた。

力が帰って来る…。

ただおかえりと、実体すら持たないこの身体に力が満ちるのを確認した。

もう、この光に惑わされない為に………真実を見る為に………。

闇に捕まらないように逃げた。

光を追い掛けて走った。

何を追い求めて、何から逃げていたのか、今となっては分からない。

光だと思っていたモノは近寄ってみれば誘蛾灯の様なモノだったから。

じゃあ闇だと思っていたモノはなんだったのだろうか？

まだ、闇に捕まるワケにはいかなかった………。

闇の快樂、光の正体（後書き）

目も当てられません。

すごい目を反らしたい気持ちでいっぱいです。

ここらへんまでは凄く苦勞して書いてたんです。

つてことはつまり4章は適当に書いたって事です。

次は肩の力を抜いてお読み頂けたら………と。一番シリアスな章を
奨めてみたりするテキスト作者でした。

無知の代償、全知の痛み

第四章 無知の代償、全知の痛み

京都——谷口家

周囲には結界のように雨が降り、門を潜ると雨は止む。

1年以上前にここから出た時と全てが変わってしまった。尚哉も和美も九希も…自分も。

もう二度とこの場所からやり直す事は叶わない。

「都…」

和美が心配そうに自分に声掛ける。上手く笑えなくて引きつりながらも大丈夫と虚勢を張った。

使用人は自分の顔を見るなり黙って門を開いた。拒まれないが歓迎はされていないようだ。

「七津子さんは？」

擦れ違い様に祖母…谷口当主の所在を尋ねると静かに解答が返ってくる。

「七津子様はお会いしません。貴女は不浄のものになってしまわれた。早く取るべき物を手に入れて谷口を出て下さい」

決別状にも似たその台詞は心に深く入った。育ての親である七津子の拒否は存在の否定にも等しくて…。

「すぐに…出ますから」

ただそれだけ答えた。

ここに暮らしていた頃、長い長い廊下を祖母と二人で毎日のように通った。ヒンヤリ冷たい廊下も二人なら寒くなかった。

蔵へ続くその道は、今…一人で歩くよりもずっと冷えきっていた。階段を降りて蔵に入る。

空気の澱が消えて気持ち悪い程の正しい空気。
痛い程の正常さ。

時が止まってるかの空間。

「ここが…天者の蔵」

和美が蔵の中を仰ぐように見つめた。九希は黙って付いて来て居る。

「私…」

昔、見た事があつたんだ。あれが『人間』の身体だなんて信じられなくて今まで記憶の底に封印してきた。

一番奥の壁に手を当てて隠し扉のスイッチを押した。

小さな扉の先には当時のまま時を止めた身体が佇んでいた。自ら命を絶った罪からか、時間の経過を受ける事無く存在してきたその身体。

あの映像の罪人。

自分にそっくりな死体は決して気分が良いモノではない。

和美が目を背けたのが分かった。彼は……彼の前世が助けたはずの命がこうして命を絶ったことを今知ったのだろう。

その身体、腹に深く刺さる剣を抜こうとした。

「待って！」

「なに？」

「その剣は『紅神の剣』だ！」

言葉の意味が分からずに首を傾げると九希が微苦笑した。

「償いのつもりか…僕の剣で死ぬなんて…」

「え？」

「僕と七希は神の剣の守人だ。その剣は僕の心が入った剣。必死に都を殺さないように…」

してたんだな…って声が掠れて最後まで聞けなかったけど。

こんな事って…ない。

全ての人が悪くないのに。

「剣を抜くのは僕がやろう」

九希が剣を抜くと思いが溶け合うように身体に吸い込まれた。身体がある、慣れない身体ゆっくり動かしした。

（ん？）

剣を抜いた場所が地味に痛くて蹲った。
普通に怪我してるし。

「……っ」

でも痛覚のおかげでこの身体がちゃんと自分のものだって理解出来るのだ。

この痛みだって死ぬ事に比べたらなんでもない。

立ち上がって和美の方を振り返ると治癒の光でお腹の傷を癒された。

「有り難う……」

温かみも、痛みも全て生きてればこそだ。

この身体は前世の和美が必死に運命を切り離した唯一だから。
心行くまで戦おう。

和美の腕がそのまま身体を包み込んで言った。

「じゃあ都のマンションに行くよ」

「え？なんで??」

「みんな集まってるから」

「みんな……」

「尚哉とか…遙佳とか…伊織とか！」

「………桜花とか？」

和美の能面みたいにニコニコした笑顔が凍った。

「嫌な事言うね？」

「お互い様でしょ？」

抱き合ったまま睨み合いになって、九希に咳払いされた。

「桜花に気を持たせたまま私を口説こうとする中途半端さ嫌なんだもん！」

「ちゃんとするから話を聞いて？」

「………」

吐息が掛かるくらい近くで見つめれる。

そう言う事じゃないんだ。和美だからダメとかじゃなく、心に決

めた人がいるから……。たとえその人と結ばなくても『じゃあ和美と！』なんて簡単には切り換えられない。

自分が九希をあくまで兄としか見れなかったのと同じで。

「ともかくっ…行こう！都」

差し延べられた手の先に…尚哉がいる。

和美の腕に捕まると移動が始まった。

空間を割くような方法は皐月のとは違う。

悪酔いはしないけど場を荒らしてる感是否めない。

気付くと自分のよく知る光景が目の前にあった。

自分のマンションの…他の部屋の前。

帰って来たんだ…。

「都…」

「大丈夫。逃げないよ」

「うん」

和美の腕が扉の前に自分を押し出した。

その瞬間に扉が開く。

出て来た人間に驚いて後退りした。向こうも驚いた顔をした。尚哉だ。

「み…やこ？だよな？気配は都だ」

姿形が変わってしまったから。尚哉の問いに頷いた。

と言つてもスッピンなだけなのだ。髪型が違っただけなのだ。少し

悲しいような怒りたいような…。

散々自分の素顔見て来た彼がその態度をとるのはどうなのか。

「私の身体は天者に持ってかれたので…」

屍体を使ってます、とは言えずに口ごもる。

「ちゃんと考えられたのか？」

目線を併せて訊かれた。彼から逃げて、答えを見つけたのか…と？

「わからない。混乱してる…と思う」

「そう…」

尚哉は少し冷静さを取り戻したようだった。殺されるかと思うく
らいの拘束は無く、以前と同じ優しい手が頭を撫でる。

「ごめんなっ…さ、い」

涙を流してはいけない。それは卑怯だから。

そう思ってたのに涙が勝手に流れてくる。

「九希と似てないだろ？ちゃんとその目で見ろよ」

尚哉の接してくれる態度も、目も、口調も、気性も、自分に触る
その手も全て…彼のものだ。

わからないじゃなく…もう一緒に居てはいけない。この身体の…
この運命には巻き込みたくない。最愛の人だからこそ、だ。

「焦れたい！」

尚哉がそう言って身体を引っ張った。すっぱりと彼の身体に包ま
れて涙が止まる。

「お前の身体が『愛してる』って言ってるよ。正直になれよ？嫌い
になったらこんな気持ちを感じたりしない」

相変わらずの強気を笑い飛ばそうとしたはずなのにただ唸って泣
いた。

思いは言葉に出来なくて、代わりに思いが溢れるように泣いた。

尚哉の手は一旦放されてもう一度言い渡される。

「もう一度腕を拒まれるのは辛いから自分で選んでくれる？それま
でちゃんと待ってるから」

放されるはずない、なんてどこかで思っていたのだろうか？

でもこれ以上はブレーキを掛けなければ。彼まで墜とす必要はな
い。

それなら…。

和美の服の裾をそっと掴んだ。和美が仕方ないという表情で割っ
て入った。

「ここまでにして？今、全部言うのは卑怯だ」

「分かってるよ。取り敢えず中に…」

尚哉に促されて中に入った。

中には少し疲弊した顔の皐月がいた。悠宇がいつも通り腕を挙げて挨拶する。和美も皐月の様子に気付いたようだ。眉を顰めて悠宇を見ていた。

そう、悠宇がこんな時はだいたい何かあった時だから。

「皐月くん」

「え？あ…？都？」

「うん。大丈夫？」

訊いた時に一瞬だけ泣きそうな顔をした。それがシグナル。

「皐月くんこっちに…。部屋借りるね？」

和美が頷いて許可をした。尚哉が少し呆れたように溜め息を吐く。みんなあなた程強くはないと言う事だ。

奥に奥に……………深く……………

もつともつと……………もつと……………

自分から誘ったんだからへばらないでよ？

彼の身体は今異常な熱を持っている。

何度目にもなる性交を繰り返しても虚しいだけだつて知ってる。

だってこの人のこと好きじゃない。

でも何かにしがみつかないと色々思い出してしまうから腰を振った。

世の中つて以外とこれだけで出来てるのかもしれない。

「ねえ、タバコ持つてる？」

「タバコ？」

「ダメ？」

「いや？お好きに。昔から吸ってましたか？」

「……………一番年取った時、25才だったから」

差し出されたタバコを口でくわえて泉実のジッポで火を点けた。

ふーっと泉実の顔に煙を吹きかけると独特の臭いが鼻に付く。

この17才の身体はタバコバージンだったから少し煙がきついけどこれが一番考え事をするのに向いている。

泉実は全く気にせずに自分の顔に近づいて口づけた。

25才で死んだ時は九希も七希もいなかったのに天者としての能力に脅えた人間共に封じられて殺されたんだ。幾度も幾度も、死んで、殺されて、全う出来た命なんて無かったから生きるより死ぬ方が得意になった。

あと何回死ねば……一回くらいは九希と一緒になれたかしら？
この身体はその点上手くやっていた方かもしれない。どの都よりも九希が可愛がっていたから。

（でも……）

（私とは違いすぎる）

掌を見つめた。この手は色々汚されて、汚してきたからそんなに簡単に済まない。

ゆらゆら上がる煙を見つめた。

（灰が……落ち）

落とした灰は泉実が無表情にキャッチした。痛覚がない彼には全く素知らぬ顔だ。そんなので性交して何か意味あったの？なんて、自嘲にも似た笑みが漏れる。相手のことを考えるなんてバカバカしい限りだ。あんなオナニープレイ、自分のことだけ考えていればいい。

吸っていたタバコを灰皿代わりに泉実の口に差し込んだ。シートから出て裸のままスタジオタイプのその部屋の窓辺に立つ。もう、太陽を見るのだって最後になるかもしれない。

「私、もう死にたくないの」

生きることも、死ぬことも、自分で選べないこの運命を壊す為に……。

この手で自分の創ったモノを壊すことに決めたのだから。

ゆらゆら揺れるような感覚を覚えた。ただ都が自分の腕を引っ張って隣の部屋に移動したそれだけの話。

その移動ですら自分を支えるような感覚。

少しでも手を離してしまえば自分の身体から切り離されて魂は解けてしまう。

「都…」

「皐月くん！しっかりして？」

「俺やっぱり桜花が…」

大粒の涙が視界を揺らした。

都の腕が自分を支えている事に気付く。自分の身体はそうでもしなければ崩れ落ちる程で。

運命なのだ。

あまりに儚い。

自分だけのものである期間は短いのだから。

「俺は桜花が好きなんだよ！愛してるのにつ！いつの間にか」

俺のモノじゃなくなってた、なんて…違う。元々自分のモノではない。ただ勘違いしていただけだ。余りにも酷似していて自分達の境界が分からなくなっていたただけだ。

「藤井さんとの繋がりが切れてる…？」

「遙佳に切られた」

「そ、う。じゃあ好都合ね」

「え？」

「隠しなさい。藤井さんには無事でいて貰いましょう？」

「ナニソレ？」

「これからの闘いに巻き込めば無事は保障出来ない。でも今のうちに安全なところに隠すなら出来るから。皐月くんと繋がったままならやっぱり隠しきれないし」

「やっぱり俺は…っ！」

都の困った顔が見えた。

桜花を生かす手段だというのに手放しに喜べないのは何故だ？

手が届くところに居てくれるなら彼女が死んでも構わない、そう思ってたからじゃないのか？

気が付くと縋るように都に抱き付いていた。彼女の腕が髪を撫で

る。

（気持ち良いな…）

ってただ思った。

都がいれば、大丈夫だ。自分は何度でもこの場所に引き上げられる。都が岸に呼んでくれる。

修行中だつてそうだったじゃないか…。

この腕を信じようじゃないか…。

都から聞こえるか聞こえないかぐらいの鼻歌が届く。

「何の歌？」

「キラキラ星」

「ああ…」

彼女の口が奏でてるのはモーツァルトのキラキラ星の主題による変奏曲。音が多いと思つたらピアノの譜面通りだ…。

「都はまだ尚哉の事好きでしょ？」

「それは秘密。さて！立てますか？」

「立てる。有り難う」

都は思いを断ち切つたのだ。血の繋がりに対する痛みを彼女は持っていたのにそんな様子はない。

「都？いつか俺と本当にセックスしよう？誰も居ない時で良いからさ」

「前にも言つたけど…」

「断ち切れる気がする。君としたら何もかも忘れられる気がするから」

「それじゃ脅しに近いよ…」

「都の事が二番目に好きだよ。幸せにしてあげたいと思えるから」

そう伝えたら都は花の様に微笑んだ。相変わらずの可愛い笑顔は何も変わってなくて、自分はこうやって生きていくのだ。

自分の手で幸せにしてあげる事は叶わなくとも、幸せを祈る事は出来るのだから。

身体すら持たない自分が何か言えた事なのだろうか？

でも頭を動かすしかないのだ。

「おつまたせ」

明るく扉を開け放って深刻な雰囲気をぶち壊した。和美が仕方ないなあって呆れた様な笑みを浮かべる。

その和美と九希、それに皐月を引つ張って部屋の隅に呼んだ。まずは考えを擦り合わせることにする。

「私はこのメンツでいくつもりだけど…移動も出来なきゃだし」

「妥当だね。残りは一重本家で守りを固めて貰うのが良い」

九希が言った。和美も頷く。だいたい自分達に割り当てられている仕事がお互い分かっているからやりやすい。

だが皐月が自信なさそうに手を挙げる。

「俺相変わらずノーコンだけど…」

「使えるんだよね？」

「実践向きではないと思うね！」

自信満々に言われて脱力した。和美がふうーっと感じの悪い溜め息を吐く。

「じゃあ皐月もお留守番！俺がやるよ」

「和美？」

「俺は移動出来る。ここに来るまでに証明したよね？」

「和美には他にやる事あるじゃん。あなた唯一の戦力なんだけど！悪いけど私はともに戦う自信ないから！」

「都、そこ胸張るとこじゃないから」

「ともかくっ！皐月くんに頑張って貰う！」

皐月が一つ申し訳なさそうに進言はじめた。

「尚哉が使えるよ。俺の力、尚哉が使える。だから…」

「尚哉はダメ。それなら私がやるわ」

皐月はすぐにそう、と納得した。

みんなの方を振り返って和美が説明をしようとするのと隣りの部屋から桜花が出て来た。

（うわぁ、タイミング悪い…）

もう少し寝てくれたらそのまま睡眠薬嗅がせて寝かせて運んだのに。

和美は動じないで説明を続けようとした。
でも桜花は安堵の表情で和美に近寄る。

「カズミちゃん！逢いたかった」

「桜花、悪いけど今大切な話の最中だから参加するなら座って！違うならもう少し向こう行って！」

冷たい態度。本当に桜花に対する気持ちがなくなってしまったのかは判断つかないけど…。

それでも和美が前世の記憶に感化されているのは分かる。戦いに身を置く事だけを考えているのだ。その前提が『都』で、彼は自分の為だけに戦地へ向かう。

自分は…気持ちは嬉しいが…相棒は彼だって頭では分かっているけどこの心が拒否をする。前世の自分と今の自分を同一視出来ないのだ。

気持ちが擦れ違い過ぎていて…。

それはきつと尚哉のせいなんだろう。ちゃんと愛してくれて、愛した証拠に今の自分がいる。

でももう、これ以上傷付けたくないから一緒にはいれない。

その自分の思いと和美の思いは同一種ではないと思うから……。

桜花が泣きそうな顔して席に着いた。彼女は一端の能力者である自覚はあるからそれ以上は言わないけど。

（傷付いただろうな）

（案外弱いコだから）

迷っている。

和美がいなくてここを守る事って出来るだろうか？彼に色々始末を付けて来いって言えるだろうか？

九希をチラッと見つめた。

柔らかくいつも通りに微笑む兄に背中を押されるように心を決める。

「和美くんが無の塔から帰って来るのを待つて出発するわ」

「都？何言つて？」

「和美くんは今のままじゃ前世に操られてるようなものだから、断ち切つて来て下さい。出来ないなら参加しなくて良いから」

「都！君が言つたんだ！僕しか戦えないって！」

「『僕』ね…。私は『俺』に戦つて欲しいから、行つてらっしゃい。それまではここで待つてあげる」

「そんなっ!？」

そう言つて和美は自分の襟ぐりを掴もうとした。

（仕方ない…）

（大丈夫…出来る!）

自分を信じて…と言つよりは言い聞かせて能力を発動させる。この力が今の自分の全てで、使い切れれば死んでしまう事も承知だ。でも、これくらいの虚勢は張れる。

勢い良く和美の胸に無属性の力を放つた。

これが『谷口都』として生を受けてから初めて使つた神の力。天者としての初めての仕事だ。

そこにいた全員が目を見張つた。

「ここは私が居るから大丈夫。和美くんは前世に折り合いを付けて来て？」

無防備に力を受けた和美は呻きながら立ち上がる。睨まれて、ヤル気かと思ひ構えた。

「やつて良い事と悪い事が…」

「怒つてる？でも仕方ないじゃあん？私こういう人間だし」知らなかつたの？」

「そういう人じゃないよ！君は僕に諦めさせようとしてるだけだ！」

「決め付けられる程の深い付き合いをした覚えがないわ」

「散々君に付き合つて生きて来たんだ！全部知ってるよ！」

「セックスした事ないわ。それなら私の事は皐月君のがよほどわか

つてる」

挑発するだけして九希に目線を投げた。九希が部屋に被害が出ない様に結界を張る。皐月が参ったなって顔してるのが妙に笑えた。こんなところで名前出されたくないだろうね。

でもここで力づくでも押し伏せとかなければ和美は後悔する。

結界士だった『都様』をナメるなよ！

パチンと指を鳴らすと結界陣が浮かび上がった。

和美には強制的に跳んで貰う。

皐月の肩を掴んで彼の力を抽出した。

和美が気付いて結界の中で足掻くからなかなか仕上げに掛かれない。

「ちゃんと決めたんだ！ちゃんと選んだんだ！なんで分かってくれない！！」

「そんなのどうでも良いの。私の事が好きでも嫌いでも…私あなたと生きていかなきゃいけないんだもの。だからちゃんとその心と身体で選んで来て？前世に惑わされずに出した答えなら向き合うから」

その言葉で和美は観念したように抵抗を止める。印を切って無の塔への転送をさせた。

皐月から腕を離すと九希も結界を解く。こんなところで疲弊している場合でもないのだ。

だが身体に残された力が少ない事も否めない。ふらついている身体を皐月に支えられた。

皐月の力を一方的に使って置いてふらふらしてるのが自分だなんて…。

「休めば？ずっと動いてるんだろ？」

「うん。でも結界張らなきゃ」

「俺が出来ないから言う事じゃないけど結界ならここにいるヒトタチが張ってくれるよ」

「それじゃダメなんだわ」

強い結界が必要なのだ。強くて気配が読まれないような繊細な結

界が…。

だから自分でやらなくちゃいけない。

そう思っていたら九希が剣を具現化して伊織に渡した。

「なあに？」

「これがあればそんなに難しくないから都は休みなさい」

「……………分かった。戦力割いたの私なのにゴメン。よろしくね」

そう言って寝室のドアノブに触れようとした時だった。

一つ命が爆発する。

能力者の身体は火薬庫と同じだ。力が制御出来なければ爆発してしまう。

その爆発は桜花からだ。

皐月が駆け寄ろうとしたのにはね飛ばされた。

「桜花！」

「今の……………和美」

「桜花！」

「…なあに？ どういう、こと？」

呟く桜花にはこちらの声が聞こえていない。和美との会話で作った傷から引火したんだ。

桜花は防御特化の能力者だから同じタイプの人間が向かってても強く反発するだけだった。

尚哉が舌打ちしながら能力を具現化して抑えこもうとした。間違なく傷付けてしまうその力に怯えたのは皐月で、それを感じ取った尚哉は力を放つのをためらった。

その隙に遥佳が前に出て桜花の力をすっぱり包み込む。桜花の力に当てられて身体中無数の傷がついたのに彼は怯まずに桜花の力を抑え続けた。同じ系統の能力者だから抑え込むのは至難の業なのに、いとも簡単にやってのける遥佳は本当に天才なのだろう。だが苦戦しているのも事実で。

「遥佳！」

駆け付けて代わるつもりだったのに遥佳はやりわり微笑んで制止

させた。恋敵に抑え込まれることなんて屈辱でしかないのだろうか。

ギュツと抱き締めた強い腕に赤ちゃんのように泣いて縋る桜花を見て、ああ大丈夫だと安心した。

代わりに皐月が少し不安定に揺らぐ。

色々あつて精神的バランスがみんな不安定になつていて……まさにここが火薬庫だ。

「皐月くん……」

「都さんに心配される程じゃない。アンタのが顔色ヤバいし」

相変わらずの『アンタ』つてのが少し安心させた。でも彼がこんなにも不安定なのは何故なのだろうか？修行から目覚めさせる前までは和美と付き合っている桜花も、尚哉と婚約している桜花も許せていたはずなのに。

「セックスする？」

「は？アンタ何言つて？」

「皐月くんを安定させる自信はあるんだけどね。でもやめとくか。

私今のままの関係が好きだもの」

「からかつたの？」

「本気だよ」

「犯すよ？」

会話しているうちに皐月が安定していくのを見守った。まだ、大丈夫だ。

寝室に移動して扉の前に座り込む。

本当に大丈夫じゃないのは誰だ？……………と。

いつの頃からだろうか？

手を伸ばしても手に入らないモノは要らない。

横にあるモノを取ればいいじゃないか、って全部諦めてきた。

だから都を取り合わなかっただけで生きてきた中で一番彼女に惹かれたのは事実だった。彼女の為に桜花と付き合い始めた。彼女の

為に害のない人間のふりをし続けた。

だから前世の記憶を取り戻した瞬間に全てバカバカしくなったのだ。

都はいずれ九希のものになってしまふ。でも一度自分のモノになりかけてた。

それなのに九希と七希に邪魔されて……いや、琥雷に邪魔されて。

「病んでますね？」

「はあ？」

見上げると10才にも満たないくらいの少女が立っていた。転送させられたのは無の塔、天者の塔だったはずだ。

周りを見渡すと足下に存在する煉瓦造りの歩道以外は全てが闇だった。

「ここはどこかな？君は？」

構えなく彼女に問いかけたのは自分でも不思議だった。無防備な心の状態だったのかもしれない。ニコツと人懐っこい笑顔を向けて更に警戒心が吹っ飛ぶ。

「無の塔の番人、サクラです。ようこそ」

「無の………塔？ここが？」

「いいえ、ここは塔の前です。見えてらっしゃいますか？」

サクラが振り上げた手の向こうに蜃気楼のようにぼやけた塔が浮かび上がってきた。高く………最上階が見えないぐらいに高くそびえ立つその塔。『天者の知恵』が全て詰まった場所だ。

喉をゴクリと鳴らした。

「見えましたか？」

「ああ」

「じゃあ入塔出来ます。良かったデスネエ、ここまで来て門前払いは辛いですもんねえ？」

「どういう事？」

「見えない人にはただの何もない空間でしか有りませんからっ」

ほっぺに人差し指を当ててエへつと笑うその仕草が桜花そっくりで脱力した。喋り方もそっくりだ。『サクラ』ね。

「僕は……………」

「自己紹介は結構です。オキノカズヨシ様、当代の賢き者あなたの求める知識は全て無の塔の中に」

急に大人びた喋り方、目つき。番人は塔を案内するように手を差しだした。

その手に連れられて塔の中に入ると神聖すぎるくらいに澄んだ空気の渦が自分の身体を囲う。空気にあてられるなんて聞いたこと無いけど濃密すぎるそれに気持ち悪くなった。

「へえ。都様より鋭敏ですね」

「え？」

「都様はピンピンして居られました。感覚鈍い方の様です」

「……………」
「というかあんまり気にしないんじゃない？俺は気にしちゃうから」

「そう、ですか」

サクラがフツと口許で笑った。何か言いたげな番人の態度が感に障る。

「本日都様の願い通りならばやるべき事は一つなのですが」

「え？」

「あなたは何かやりたいことございますか？」

「……………」
「ってか、ここは何が出来るトコなの？」

「天者の修行の場です。知識的にも能力的にも修行可能ですヨ！」
「何をしたい？」

「早く……………戻りたい」

「じゃあちゃっちゃとやりましょう。最上階に行きますが、都様には階段で行って貰ったんですけど時間ないならエレベーター使いますよ！体力に自信はありますか？」

「は？」

エレベーターと体力って正反対の言葉な気がして首を捻った。サ

クラはエントランスの奥にある扉の中に手を引っ張って引き込む。
なんだって言うんだ？

思っているうちにエレベーターは動き出して身体にとてつもない
重力が掛かった。

（なっ……………）

（何階に上がるってんだ？）

（てか、スピード？それとも……………っ）

自分は上下左右もなく床にへばり付いているというのにサクラは
優雅に自分の頭を撫でた。仕草が妙に人間っぽくて、ぼんやりする
頭の中でサクラが桜花に似てるとというのが勘違いだと……。これは
都だ。

「このエレベーターは乗っている人の力を使って移動します。潜在
能力が低い人は乗ったって力が吸われるだけで動きません。スゴイ
ですね、カズヨシ様は高速で上がって行ってますよ？そのうち馴れ
たら突っ伏さなくても大丈夫になりますから」

「くっ……………」

「もう少しです。どうせ伏せてるなら力を抜いた方が楽デスヨ？」
とは言ったって骨がギシギシ言うぐらいの負荷、力を抜くことす
ら難しい。身体がバラバラにされてしまいそうだ。

チンという鐘の音が聞こえて負荷が取れた。体中汗だくで肩が抜
けそうなぐらいに震えている。自分の身体ではなくなってしまうた
かのようなだ。

「無の塔、最上階でございます。どうぞ」

扉が開かれると天球儀状の形をしたそのホールに映る星の海に息
を呑んだ。

まるで本物の宇宙のようで、竦んでいた身体が勝手に動く。まる
で引力に引かれるように。

「ここは……………？」

「投射室なんですが……………」

「投射？」

「記憶や思いのメモリを投射出来ます。今日はどうも投射ではなく…

……」

サクラの言葉が自分の耳に届いた瞬間に目の前は闇で覆われた。闇の中は何故か仄かに温かくてまとわりつくような空気。

「サクラ？」

返事は返ってこない。歩んでも大丈夫なのだろうか？闇のせいで足下も覚束ない。

数歩歩むと何かにぶつかって顔を上げた。

「コンニチワ」

人だ。ただ、よく見えない。サクラではなさそうだ。胸板………
というか背格好が自分より少ししっかりしているから。

「誰？」

「君こそ」

クスクスとからかうような笑い声が耳に付く。声の種類が同一で

………反響する。

「僕はっ！」

「『僕』？」

「俺、は」

「『俺』？」

このヒトが誰だか、自分は知っている。

（有り得ない………）

頭はそう思っているのに誰だか、靄が掛かって消えない。

そんな自分を呆れるように手を広げて肩を竦める。アメリカ人がよってぐらいの大げさのジェスチャーで、やっぱりからかうように言った。

「君は何で全て頭で考えようとするの？」

「え？」

「何でも理由がなければ説明付けようとしなのは悪い癖だな。」

「僕」も気を付けよう」

意識せずにゴクリと喉がなった。

この人の正体が確信へと変わったからだ。

全然違うじゃないか、自分と……。こんなにも違うのに色々自分に重ねて、間違つてで解釈して勝手にその仮面を被った。全て前世のせいにして、それじゃダメなんだ。

ここに立っているのは前世の『沖野和美』ではない。

ここに立っているのは…………。

（俺なのに…………）

（考えて、実行出来るのは…………全部俺なのに…………）

（都合の良い時だけ前世に押し付けて…………）

泣けるのも、笑えるのも、怒れるのも、ここで生きていくことが出来るのも全てこの身体を持つ自分だけなのに、前世を『知識』としてしか解釈しない都が正解だつてこと。

「そう、イイコだね」

急に視界がクリアになつて相手の顔が見えた。

自分を5年くらい年取らせたような、少しシャープになつた顔が見える。

良い年の取り方すればこういう顔にもなれるんだな、そう思つて俺も笑つた。

伊織が丁寧に織り込む様に結界を重ねていく。

遙佳は未だに桜花の力を抑えたままで、九希は伊織の手伝い、都は寢室を占拠して引きこもり…元気で暇を持て余してるメンツはめんどくさいのばかり残つた。

先程多分揉め事を起こしたと思われる皐月と悠宇、それに自分に飛鳥の4人だ。

だが皐月は先程より随分落ち着いていて、昔からだ都には信頼をおいているのだ。

都が和美に転移結界を張つたのは驚いたし、桜花が和美の気持ち悟つて力を暴発してしまったのだつて…。

今まで何を見ていたのだろうか？

本質が何も見えていなかったのだ。

皐月が突然隣りに座って、か聞こえないかぐらいの声で喋りかけて来た。

「尚哉的にはどうなの？」

「はあ？」

「都さん諦めるの？」

「都が俺じゃ嫌だって言うなら仕方ないだろ？」

「じゃあ俺が貰っちゃうよ？」

ケンカ売ってるのか？皐月を見つめた。皐月自身はこちらを見ずに言う。

「尚哉が都さんを幸せにするって言わないなら俺が欲しい。都さんが幸せになる方法は尚哉と一緒に居ることが前提だから、どうせ都さんが不幸になるなら俺が堕ちるのに付き合っ貰う」

「何を言っている？」

「ワカンナイノ？」

皐月が呆れたように笑った。

「都さんが好きなのは誰だよ？和美でも遙佳でも……ましてや九希でもない。幸せそうに笑う時はアンタの側でだけだろ？」

「九希は？」

「あんなのは気の迷いだ！」

「遙佳は？」

「遙佳が良いんならアンタと始めから付き合わないだろ？」

「じゃあなんで俺を選ばない？」

皐月が立ち上がって、初めてこちらを向き直った。暗い目をして睨むと大きな声で言う。

「なんでも教えて貰えると思うなよ！バーカ！」

言うだけ言って皐月は距離を置いた。不貞寝よろしくクッション抱えて目をつぶる。

ちよつとの間を置いて悠宇が口を開いた。

「俺はね、都ちゃんと遙佳がくっつけば良いなあって思って奔走し

てきたけど可愛らしく笑うのは尚哉の前だけなんだよね？あんまり言くとオニちゃんに怒られちゃうんだけど…都の為ならアンタが今やるべき事は何なのかよく考えろよ。和美帰って来たらきつと無理だろうから」

悠宇の茶化した言い方から凄味を利かせて脅す言い方に变化した。そして桜花を抱えたままの遥佳が弟のセリフに溜め息吐いて、自分の方に笑い掛けた。

「代わるうか？」

「どうもこいつもお節介でっ！」

立ち上がって寝室に続く扉を勢い良く開けた。都が窓の近くで身体を震わせて振り返る。

中に身体を滑り込ませて鍵を締めるとベッドに腰掛けて、隣りに座れと言うようにポンポンと叩いた。都がちょこんと遠慮がちに座ると引き寄せて自分の股の間に座らせた。後ろから抱き締めるように腕を回す。

「尚哉！」

「嫌なの？」

「嫌じゃ、ない……けど」

「寝れないんだろ？」

「うん」

「オマエ精神的にキてる時に寝れるヤツじゃないもんな？」

「そんなこと、ないよ？」

「いつつもセックスに逃げてたじゃん？」

「そんなことないっ！」

声を荒げて立ち上がった都の腰に手を回した。都が怯んだ顔をした。

都を見上げて手の甲にキスをする。都の手が自分の顔に触れたからそのまま都の身体を押さえ付けてキスをした。

腕は拒否しているのに都の唇は、舌は、受け入れている。本当に嫌なら舌でも唇でも噛めば良い。でも都はそれをしない。

都の耳たぶのピアス穴にチュツとキスをした。それがスイッチのように都の腕から抵抗の力が抜けて、自分の身体を求めるようにシヤツを掴んだ。

彼女の耳元で囁く。

「みんながいるから大きな声出すなよ」

都が頷いたのを見て、彼女のスカートの中に手を入れた。パンツの上から撫でるように指を滑らせるだけで溢れるように熱く濡れている事が分かる。

手でそのまま弄りながら今までを埋めるようにキスをした。涙目でしがみつくように回された腕はいつもと同じで、何も変わらない。「なっ…おやあ」

甘い声で自分を呼ぶ声は何も変わらない。

愛しくて、ただ愛しくて都の身体を抱き締めた。

自分が強くなる事で彼女が手に入るなら悪魔とでも契約したい。守ってやる事は出来ないかもしれないがせめて彼女の横に立ちたい力が欲しい…誰にも負けない力が…。

服を脱がそうと襟のボタンに手を掛けた時に突然都が正気に戻ったかの如く自分を突き飛ばして拒否をした。

「今更拒まれて最後までしませんでした済むと思うの？」

「あの…」

眉が下がっている。紅潮した頬にもう一度キスをして腕の中に包んだ。

「ちが…っ違うの！この身体私のじゃないから！」

「は？」

「えっと…屍体だから」

「屍体？」

「ご先祖様の屍体をお借りしてる身なので…しかも私の前世の記憶によればバージンなのでちょっと…かなり冒涇になるから」

しどろもどろで都が嚙んだ言葉に完全な拒否は入っていなかった。だから確認するように訊く。

「セックスしたい？それとも俺としたかった？」

「なっ…尚哉としたいい」

涙をボロボロ零しながらそのまましなだれるように身体を預けられた。声出さなくなって言ったのに自分の手の動きに併せて喘ぎ声が漏れる。都曰くの冒涇にならないように都を何度も手でイカせて、何度も求めさせた。自分のは都の手がそつと受け止めて、決して交わってはいないけど心だけでも一つになりたくて何度も都の中に手を伸ばした。

力尽きるように眠りに落ちる都をただ抱いて。こんな簡単なことだったのになんでこんなに拗れてしまったのだろうか？

でももう手放すつもりはなくて……首筋にキスマークを付けた。

都の喘ぎ声らしきものが扉から少し漏れてくる。遥佳も皐月もムスツとしてテーブルの端を見つめたきり動かない。

（やっぱり怒ってるね？）

自分の兄貴が最後の一押ししたとはいえ……。

突然伊織が立ち上がって扉の前に立つと結界を張って寢室を封印した。

「い、伊織サン？」

「私、姉の情事を盗み聞きするような悪趣味持ってませんから。お姉ちゃんには好きに生きて欲しいと思ってますけど……わざわざ飛澤の坊ちゃん選ばなくても良いのに」

「じゃあ妹的に合格は誰よ？」

「……………一族外のヒトだったら誰でも。わざわざ振り回されに中に戻ってくることに無いのに」

伊織の淡々とした口調の奥に潜むものはなんだろうか？

だが彼女は間違いなく九希信者で喜んで婚約を受け入れたハズだ。そしてその事を誇りに思っているから、都が交換の儀式を行うことになった時は姉を姉とも思えない言い方を……。面と向かってではないにせよ都のことを嫌っていた。

表面上は仲良くしているから女は恐ろしい。

「悠宇さんは逆に遙佳さんの恋人は誰だったら許せるんですか？今までずいぶんいびり倒してきたみたいだけど」

「ボクは誰でも良いですよ？オニイチャンが選んだ人なら仲良くやれますから」

ワザと卑猥っぽさを残して言うのと伊織が鋭い眼光で睨んだ。この子は難しくて嫌なんだよな。

桜花とも、奈月とも違う、血の繋がった都とすら全然違う。

高貴な生まれのせいでプライドは高い。

お嬢様だから冗談通じない。

なまじ誰よりも力があるからなお質が悪い。

誰よりもきれいな顔してんのに……。

そうか、あの『都』の印象は伊織に近いかもしれないな。

手に入らないモノなんて無いと思っている傲慢さ、九希を愛して止まない一途さと。

酷似している。むしろ、都が身体を乗っ取られてしまったことが不思議でならないくらいに。伊織でなかったことが不思議でならないくらいに。

「それでも自分の目で選んだ人と一緒になれた方が良いよね」

「遙佳？」

「俺はちゃんと自分のモノになったら悠宇になんか盗られないから大丈夫だよ。安心して」

「いや……ちゃんと本気なら盗りませんから」

そんな横で皐月が突然笑い始めた。みんなビクツとして彼の様子を見守る。

ひとしきり笑って……笑い終わるとソファに仰向けで寝転がった。

「惜しい事したよな。さっき都さんがセックスしよって言った時に躊躇わないで形振り構わず泣き付いておけば今頃あの中にいたのは俺だったのに」

「臯月くんは……結局誰が良いのさ？」

「桜花」

「じゃあ都ちゃんはやめてよ」

「うん。都さんが好きだから手を出せなかったよ」

ああ、本当に好きだったのか。

でも桜花という呪縛があるせいでその選択肢しか残らなかったんだね。

ここにいる人達全員負け組な気がするよ。

「悠宇は？」

「は？」

「悠宇だって都のこと好きだっただろ？俺ばかりに言うけど都のとが好きになったのはお前のが先だっただろ？」

遥佳が言った。何もこんなトコで暴露大会しなくてもいいのにね。

「さあ？」

それが恋だったのなんて分からないぐらいの淡いモノだったからよく分からない。気が付いたら都に対する見方は『遥佳の嫁候補』に変わっていた。恋をしたとすればその肩書きにかもしれないよ。

次に笑うのは自分だ。臯月より大きな声を張り上げて笑った。

可笑しくて仕方なかった。まるでガキ。三つ、四つの頃と何も変わっていない自分が笑えて……。

『やだ！遥佳のが良い！』

『あれはお兄ちゃんのなんだから我慢しなさい』

『イヤダヤダ！欲しい！』

『悠宇、大事にしてくれるなら良いよ』

自分は何を遥佳から奪ってきたのだろうか？段々頭が冷静になって乾いた笑いになっていく。病んでいるのは誰？

（都のことも痕から譲って貰う気だったのかな？）

今となっては分からない話だった。ただ、自立出来ない兄弟のお伽噺。

起きあがると尚哉の優しい腕が絡みついて自分の身体をベッドに引き戻した。

「お、はよ」

「おはよう。寝れたらようで？」

「うん。アリガトウ」

上手く喋れなくて、上手く顔を見られなくて俯いた。あれだけ彼を頼ってはいけないうって思っていたのに簡単に身体を開いて………ビッチ。今絶好調にビッチという言葉が似合う気がする。

でも尚哉の微笑みがキレイで、また引き込まれた。自分からキスしてしまう。

（ダメだつて言ってるのに………）

身体が言うこと利かなかった。

このままじゃ尚哉不足で死んでしまう。

歯止めが利かない。

助けて！もうこれ以上離れていたくないよつ。

どうしても我慢しなきゃだめなのっ？

和美や皇月は巻き込む癖に！

「尚哉あ」

「なに？」

「私………どうしたら？どうしたらいい？」

「ようやく相談してくれた」

仕方ないヤツ、と。尚哉の大きな腕が頭を攫うように掴んで口付けした。何度も何度もこうやってキスしてきた。今更この人と離れるなんて出来ない。

だって、自分が身体から追い出されたのってこの人のせいだ。

九希より好きな人が出来てしまったからだ。

「ふ……ふえ………ひっ………うっ」

唸るように泣いた。尚哉の口付けは気にせず星が降るように啄んでいく。

髪の毛を引っ張って「泣くなよ」って耳元で囁かれた。頷いてか

らまた泣いた。

いつもいつもあなたの言葉に助けられて動いてるよ。

大好き、大好き、大好き………神様、この人に会わせてくれてアリガトウ。

谷口都を谷口都として生かしてくれてアリガトウ。

「尚哉、私と………」

「いつまでも一緒にいようって言ったのは俺だよ？ずっと一緒にいよう？嫌になって逃げ出してもまた追い掛けてやるから」

「……………」

涙が止まった。それは嫌だなあと思ったからだ。

「おい！固まるなよ」

「だって尚哉本当に怖いんだもん」

「若いからね、曲がったこと許せないんです」

「私愛人なんだから、引く権利は私のが強いと思うんだけどね」

「大丈夫。もう俺は都以外と結婚するつもりは全くなかった」

一重がどんな無茶も通すこと、尚哉が一番知ってるだろうに。

例え意に染まぬ相手だろうと、もしかしたら性別さえも越えて結婚させるぐらいの力を持っているのに。

悩んでいたことが嘘みたいに心が穏やかになった。あとは思いっきりやるしかないから。

「うん！ガンバロ！スッキリしたから元気になった」

「いったから？ヨカッタネ」

「いや………まあそう即物的な言い方されるとね」

「どっちが？今の流れだとそうとしか取れないデシヨ？」

「うん………まああれよ！全部終わったら思いっきりセックスしようね？」

そう言いながら尚哉の腕を解いて乱れた着衣を整えた。服着たままだったから少し体液でベトベトしてる。窓の外をチラリと見るとマンシヨンは結界で封印されていた。

「尚哉、上行こう？」

「上？」

「着替えしたくない？ 私下着とかグツシヨリだし……………」

「俺ゴツドハンドだな」

ふふん』と鼻を鳴らす尚哉のそのゴツドハンドに噛みついた。

「嘘だよ。好きな人だから気持ちいいんだよ」

「そうだよ！ 尚哉大好き」

「ああ。ようやく……………」

もう一度キスをした。尚哉も身体を起こしてシャツを伸ばす仕草をする。

「しかし……………出にくいな」

「そうだねえ。ナニしてたか一目瞭然だもん」

「まあいいか。別に隠すことでもない」

扉を開けて薄く張られた結界を尚哉がぶち破った。目が合った伊織が思いつきり舌打ちする。

「またですか！？ 結界は強引に破らない！ 味方なんですから！」

「ハイハイハイ。伊織ちゃんお嬢様口調に舌打ちは似合わないよ」

「アナタに言われたくありません！」

尚哉は突っかかってくる伊織を適当にたしなめて遙佳の方に歩いた。桜花の様子を見る。

今はもう眠ってる。

「離してくれなくてこのまま寝かせてるんだ」

遙佳のシャツにしがみついたままの桜花は涙の痕がいつぱいついていた。和美が自分の責任に気付いてくれると良い。

「和美はまだ……………だよな？」

「うん。っていうか和美居たら部屋に乗り込んだらうし」

「あ……………そうだねえ」

尚哉と元サヤなんて知ったら和美は軽蔑するだろうな。それでも思いは止められなかった。

一方の和美はどんな答えを持ってここに帰ってくるのだろうか？
まだ『谷口都』のことを好きだというのだろうか？

「遥佳、上で着替えてくる。汗搔いちゃったから」

そう言ったらそこにいた全員が目を反らして赤面した。ああ、やっぱり聞こえてたのか……。尚哉が呆れた顔をした。でも良いんだ、みんなにいい顔するのはやめにする！

「和美にもそう言わなきゃいけないかったんだな」

h?

「ちゃんとわなきやね」

雨が降り続いていた。

その雨が何を意味しているのかを知っている者は殆ど居ない。

全てを呑み込む暗黒の雨。

絶望と渴望を人々に与えよう。

財を求めよ、悦を探せ、奪い合つてしまえば良いと……歌を歌つた。

ヒトを狂わすそのメロディは雨と共に人々の心に届く。

その日から世界のカウントダウンが始まるのだ。

ニユースでアナウンサーがその日の平均株価を伝えている最中に入ってきた速報に驚愕の表情を浮かべた。テレビニユースの中が騒然とする。ライブで行われていることなのに何故か物語然していて、まるでチープのドラマのようだった。

上擦ったような早口で、何度も何度もその速報は読み上げられた。

『19時50分、つい先ほどになります。乗客を乗せた山手線が暴走して走り、駅を通過し前の車両に衝突しました』

「重ねて繰り返します……え？……訂正致します。暴走をして

走る車両はJR東日本山手線、東海道線、中央線、総武線、埼京線、東京メトロ大江戸線、丸の内線、有楽町線、副都心線……」

着替えて部屋に戻ると皋月と悠宇がテレビにかじり付いていた。

「どうしたの？」

「都……これ」

呆然として見つめる先に映る惨劇。

ああ、始まった。

取り敢えずは東京から、伝染していく前に止めないと。

「行かなきゃ……………」

上着を掴んで走ろうとした。尚哉の腕が制止させる。

「尚哉！」

「お前どこ行く気だよ？闇雲に走ったって仕方ないってそろそろ分かれ！」

「分かる！私は分かる！私の身体だもん」

「分かって？一人で行ってこんな大それた事態を引き起こしている天者と邪者を相手に出来るの？」

「止め、られるよ？大丈夫」

震えるその手で、何を言っただって信じて貰えない。

尚哉はちゃんと知ってる。自分が何故尚哉を巻き込みたくないかを。

この戦いにまわりつくものは死だ。絶対的に支配されている。

どちらかの死、消滅が前提条件だからだ。

怖くて、口にすることすら出来なくて、説明すら出来なくて、それでも彼はちゃんと知った上でこの手を離さない。

「もう少し我慢しろ。和美が居た方が良い」

「え？」

「俺よりも……………」

「尚哉？」

「さっき自分で言ってたじゃん？和美と生きるって……………和美しか連れてけないんだろ？」

初めて見る、今にも泣きそうなこの人の顔。それでも泣かない強さを持つ瞳。こんな顔させたのは誰？

早速後悔してる。この人の腕を取ってしまったこと……………。それでも解放してあげられない自分を。こんな泣いてばかりの自分嫌いなのに…………。

「二人の世界はそこまでしてくれない？」

扉をバンッと開け放って和美がズカズカ踏み込んできた。すかさず尚哉と自分の間に割って入る。

「また邪魔しに来た」

「御挨拶だな？唯一の相棒に向かって『逢いたかった！』位のリップサービスしてみるよ？」

「腐れ縁でしょ？ちゃんと記憶かつ穿ってみてきなさいよ」

「前世とかどうでも良いって言ったの都だろ？」

犬が吠え合うように顔あわせるなり嫌味を応酬した。尚哉が溜め息吐いてテレビの前まで移動する。皐月と二人でこちらに向かつて「アイツら昔からああたっけ？」「和美の本性見たりだよな？」「つかあの二人そっくりだから一度噛み合わなくなるとトコトン合わないんだよ」と勝手な意見を立て並べた。なまじ合っていて返す言葉が出てこない。

「良いんだよ。言いたいこと言うことにしたから」

「私もよ」

「だって最終的には俺ら二人で生きてくんだもん！」

破顔してそう言った和美に見とれてしまった。吹っ切れたように笑うその顔に、今度は自分が泣きそうになりながら微笑んだ。

「言っておくけど都のこと好きなのは間違いじゃないから」

「は？」

「思い出して見るよ？桜花を黙らせる為に口説いたんだ。不誠実だったとは思っけど好きなのは都だよ。尚哉になんか負けない」

「あの……………それに関しては後回しでも？」

「都！ちゃんと答える約束！」

「和美とは絶対有り得ない！」

売り言葉に買い言葉で指を差して宣言してしまった。

いや、こんな言い回しするつもりじゃなかったのだ。周りのみんなもドン引きしている。和美が真剣な顔でこちらに更に近寄ってきた。

（な……………つ殴られるっ？）

「……………尚哉じゃないんだから殴りません」

「か、ずよくん？」

「それでも好きなんだ。否定しないで？側にいて口説く権利ぐらい頂戴よ？」

「でもっ！答えられないって」

ちゃんと、ちゃんと諦めて貰わないと。必死に伝えようとした。

尚哉がじつと見ている。

「良いんだって。俺が諦めるまで我慢しなさい」

「私、尚哉がどうしても好きなの。どうしてもどうしても……………尚哉に婚約者が居るって知っても諦められなかった」

「知ってるよ」

「私のこの瞳には九希がこんなに魅力的に映っているはずなのにそれも霞むくらいにあの人の周りがキラキラ見えるの」

「うん」

「他の何も要らないと思えるぐらいに好きなお」

「俺もなんだよ。都が尚哉を思うように、俺も都が好き」

それを言われては何も言えなくなってしまった。

なんでこんなになってしまったのだろうか？出会った頃の三人の状態で平行線のまま来ればこんな事無かったのかな？

がくって膝について脱力した。自分の愚かさ。

何もかも突っぱねる事なんて、自分の選びたいものだけ取ることなんてできないって何度言い聞かせたら分かるの？

覚悟を決めよう。全てを受け入れる覚悟を。

「都？」

和美が手を伸ばした。それを視線で拒んでしっかりと立ち上がった。

ちゃんと、自分で……………和美の手を取った。

尚哉をちらりと見遣って一言だけ言おうとして……………やめた。

「和美、行こう」

「ああ」

皐月と九希がようやくの出番に待ちくたびれたように立ち上がった。伊織が丁寧な頭を垂れる。無音で、会話しなくてもまるで分かっている、全てが当たり前前の行為の様に皐月が自分の身体を掴み取った。和美の腕と九希の腕を取り、転送を開始する。

悠宇が深く溜め息を吐いた。

都たちが出発した直後の事だ。

桜花を抱える遥佳のもとへ向かって様子を見て、それから自分のもとに来て言った。

「尚哉、顔赤いよ？ニヤけないでよ、ムナクソワルツ」

「あんなにハッキリと言われたの随分久々だったから…」

「都って結構はつきり好きだって言いそうなの？」

「だからさ、ずいぶん前から九希と俺の間で悩んでたんだろう？」

「そっか。まあ都って九希と一緒に居ると辛そうにしてる事しかないから、ホントに悩んでたんだな」

いつからだろう？初めから聞き分けは良くてワガママ言わない都。あの金色の瞳に映っている映像は九希だけを映していて…そうか、神の瞳じゃないものを見せる為に都と瞳の交換をしたのか。

「九希の思惑通りに進んでるのか」

「ああ、それは多分ね」

漏らした言葉に対して遥佳がそう言っただけ顔を上げた。

「都ちゃんに俺が近づくのを嫌がってた。多分考えとか雰囲気とか九希に似てるのは…」

確かにこの中で纏う雰囲気似てるのは遥佳だ。外見も似てると思う。

「俺も大概妨害工作されたけど？」

「尚哉はへこたれないから凄いいよね？へこたれない人探してたのかもよ？」

「うわぁ迷惑な兄貴」

「都ちゃんと結婚するならホントにお義兄さんだね」

伊織がギツと睨んで「うわぁ、お義兄さん」と口にした。ここに小姑がいる。

「尚哉は都ちゃんのどこが好きなの？」

遙佳が訊くとゴソゴソと桜花が起き上がって「私も訊きたい！」と言った。みんなで固まって桜花の様子を見守ったが吹っ切れたように元気そうなのを見て安心した。

「お前は？桜花はなんで俺の事好きだったの？それが和美に惹かれたのはなんで？」

「それは…」

「理由なんて意味ないと思うけど、和美は都の事初めから好きだったと思う。他人に興味を示してるのを初めて見た」

桜花の顔が悲しみに歪む。更に続けてあおるように言った。

「俺は都の事を好きになっただけに分かるよ」

「……」

「一緒にいると生意気で、でも楽しくて仕方なかった。音楽と一緒にやれて、笑うと可愛いのも知ってる。でもきっかけは多分和美が意識した事だ」

桜花の顔が強張る。酷い事実を認識させようとしているのだ自覚はある。でも和美に横恋慕したのは自分で、都を守る為に桜花を好きになふりをしていた和美を自分は責められない。

遙佳が未だにくつついている桜花の身体を引き剥がすように遠ざけた。

驚いたような、ショックを受けたような顔。桜花は明らかに一肌に飢えている。

誰でも良かったんじゃないのか？皐月じゃない誰かなら。

「取り敢えず結界張るんでちゃんと協力してくれませんか？お義兄様」

『使えないなあ』と伊織の心の声が響き渡るようだ。

「ここで張るの？」

「だって電車は動いてないでしょ？車だって混乱してるハズです。強権発動してヘリポート使うのも有りですけど、そこまでして移動必要ですか？」

一重の重鎮達にはそれでも戻って来て欲しい遙佳と伊織様だろう。もう守りたいものも存在しない一重本家に対して伊織はお構いなしに冷たく言い放つ。

伊織に取つての第一はいつの時代も一族でもなく、都様でもなく、一重九希なのだ。

それなのにここに残った事が奇跡的なのだ。九希を守る為に付いて行くと言わない懸命な判断。伊織が行けば九希は守る者が増えてしまふのだから。

「術式はどうしますか？属性封印しても良いですよ？」

伊織がいとも簡単に言う。遙佳と伊織が自由に結界を張れるのだからそれも有りだな、と4人目候補を見やった。

桜花と悠宇と飛鳥だ。

「木月さんは何が得意ですか？」

「炎属性。私は結界士です」

「そう、ですか」

被ったか…

和美と都がいないと水属性の能力を持つ人間がいらない。

伊織を見やった。

「私出来ますよ？水属性でしょ？遙佳さんのが考えものでしょ？呪い解いたばかりだし」

「伊織が水として、炎は問題無さそうだが…悠宇は？桜花は？」

4人目の技量で結界の強度が決まってしまう。

悠宇なら無難ではあるが…

「私…地と…あんまり安定しないけど水。結界は苦手なの知ってるでしょ？」

「じゃあやつぱり悠宇だな。地を悠宇。風が遙佳。水を伊織で…」
みんなが飛鳥をみやった。まあ…自分がやったほうが確実だろう

が彼の立場も有る。

そこにケータイが鳴り響いた。メールの着信だった。

（奈月？）

何が起きているのかよく理解出来なかった。

大まかに言うただただ撮影中に天変地異が起きている。目の前の竜巻はそのせいだ。

昨日、一度飛澤に戻って事態の報告をお歴々に済ませるとその足でまた都内まで戻って来ていた。

専属契約している雑誌の撮影スケジュールが押しているから自分の都合だけでは断りきれなかったからだ。

大江戸線のホームに降りて行くと有り得ない量の情報が線路を走り抜けていた。何が起きているのかはわからない。でもこれは多分……。

（尚哉様！）

助けて……と心で叫んでいた。電車の通る道に電車じゃないものが……電車の進路と逆向きにコイルしている。誰も気付かずに電車は流れていく。

念が大きくなったら崩れる……。何もかもが無に帰す。

ただの直感だがそれだけで流すには大き過ぎる不安。

寒気がする。

携帯電話を取り出してすぐさま主に報告をしようとした。それは途中で叶わなくなった。

「奈月ちゃん、それはダメよ」

強い力で携帯電話を持つ手が弾かれた。力が加わった方向を向くと最後に見た時よりも更に美しく変化を遂げた都が立っていた。

（気配……しなかったのに）

弾かれた手が物理的な攻撃ではなかったことに後退った。能力者ではない彼女が力を有する理由は一つしかない。自分達の敵になったからだ。

だが逃げ道である階段は彼女の方にある。電車は関係なく停まるが乗り込むことが出来ないほどのプレッシャー。都の身体からも、電車の中の妙な力からも。

「和美も九希も今はいいっぱいだろうから電車に乗ってる暇なんて無いでしょ？遙佳はちゃんと伊織と一緒に足止めてきたから後はあなたが漏らさなければ計画がばれることないのよ」

「何言ってるの？あなた……」

「奈月ちゃん、せっかく逃がしてあげた命は大切にしたいわ」

その気持ち悪いぐらい整った顔でニコニコしながら紡ぐ言葉は計報にも近い。このままでは、尚哉に報告どころかまた足を引っ張ってしまう。

必死に頭を回転させていると都が嘲笑を浮かべた。

「あなた、相変わらず尚哉で頭がいっぱいなね？どんなに走り回ったって心は私のものなの？」

（なっ！？）

「なんで？……って思ってるの？私、全知全能の神なんだけど」
「なにそれ……」

自分が顔を歪めたのを楽しむかの表情。人間の心が消えてしまっているかのように。

心が読まれているという事実を感じ取ってやるせない涙を流した。人間誰しも持っている心の闇は誰にも知られないから人間は立っていられるのだ。

この人、ムカツク人だったけど、人間的な人だったのに。

もしも心を読めたとしてもこの人ならこんな決るような遣り方はしない。

「あれは私のオトコよ？あなたが幾ら頑張っても無駄だわ」

ふふつと妖艶に笑った。

美しいけど嫌悪感を感じる。こんな人が尚哉の思い人だと言う事が許せない。

「あなた、それでホントに良いの？」

「え？」

「尚哉の子供を産むんでしょ？動物みたいね？それでまた繰り返すんでしょ？負の連鎖」

頭を殴られたような衝撃を味わった。

ずっと引つ掛かっていた事だ。でも改めて…言われたら…。

自分が全て崩れてしまう。

信じていたものが全て壊れてしまう。

「私だって尚哉の子供産めるわよ？別に要らないけどね」

身体に力が入らない。膝が折れて、ただ涙を流していた。

「……………助けて……………、尚哉様……………神様」

ただそう呟いていた。

美しき神は鼻で笑って自分の身体を闇へと誘った。

東京駅、そこは昔と変わらぬ形を残した丸の内側と新しく変貌を遂げた八重洲側でアンバランスな調和をとった場所。そしてこの巨大なターミナル駅は地下深く掘られている。

地下深くから音が漏れて来る。

美しいその音は人の声に聞こえない。だが人間の形をした彼女が紡ぐものだ。

大きなホールのようなその場所は普段は職員の会議室として使われる。漏れて来るその声の美しさは人々を狂わせ闇を戴く。

「都様」

「なあに？」

都の娘を撫でる手が止まった。

六本木から連れ去ってきたその娘は自分も良く知る飛澤奈月。カメラマン、泉実拓也によく懐いていた人間にしては美しすぎる少女。世間的にもよく知られていたファッション誌を飾るモデルである飛澤奈月だ。死体のように転がる彼女を一瞥する。輝かしい肩書きを物語るような面影は今の彼女に一つも残されていない。

「……………移動能力者が動いています。列車は止まっているがまもなく

…」

「わかってるわ。だってあの力は私のものだもの」

何も映していないような暗い目で笑った。

奈月はここに来てから都の人形のように微動だにしない。目を開けてはいるが何も移さない。

一重の狂いが心を犯して、彼女から抵抗する力を奪った。

その暗い心を埋めるように都の手が奈月の美しい髪をすいて行く。

「コレは何に使うんです？」

「奈月ちゃん？ 尚哉が来るなら見せしめに。でもないわね。尚哉が皐月の力を使ったならもう少し整然とした……誰が使ってるのかしら？」

フツと空間が途切れるような音と共に移動能力が具現化する。

「いらっしやい、あなただったのね？」

この世で唯一の移動能力者の身体を自在に操れるその身体。

過去に欲したことのある、その身体を……見つめた。

無知の代償、全知の痛み（後書き）

最初に、学生時代に書いた『心の欠片』に合わせた内容に今の自分が編集できなくて三章ではすごくすごく悩みました。

産みの苦しみ……と。

でもよくよく考えて心は変わるし、自分が成長して変わったことで内容も変えて良いんじゃないかと勝手に解釈。

『神の蔵の守人』（↑一話目）をこの時書きました。そしたらどうしてもどーしてもこのラストにしたいくて……少しエロ解禁になりまして、テイストが……いや全シリーズを通してからの都さんの性格を覆す話になりましたねえ。

すみません。本当にもっともつとハチャメチャな人だったんですけど、自分の頭がそれについて行けない。年かなあ……。

無垢の信頼、征服の欲望（前書き）

制服の欲望
うちのワープロソフト

……ブルセラかつ！？

無垢の信頼、征服の欲望

第五章 無垢の信頼、征服の欲望

ただ道しるべもない草原を走っているようなものだ。

方向を失って行く感覚と伴に自分達は道を見失ってしまった。

何の為に権力を持ちたかったのか、何の為に財を築きたかったのか…。

彼女の顔を見た瞬間にそれを思い、泣き叫びたくなった。

「いらっしやい、あなただったのね」

「コンニチワ、都」

言った声がうわずった。前に出ようとしたら和美に首根っこを引っ張られて後ろに戻される。

（過保護…）

和美の背中に悪態付いた。それでも震えは止まらないから彼の判断は正しい。

震えを止めるのと同時に状況を把握するために周りを見渡した。すぐに理解したくないものが九希と和美の身体の合間、都の足下に転がっていた。

（え？……………奈月ちゃん？）

和美の服を引っ張るとわかっていと言うように頷いた。

「奈月ちゃんに何かしたの？」

「まだ何も…？」

何がおかしくて笑っているのか理解出来ずにただ顔をしかめた。後ろに控える琥雷と視線が合う。彼はこの身体の事も知ってるに違いない。執拗にまわりつく視線がそれを現している。

「谷口都さん？」

琥雷が確認するように呟いた。

「ホントに？」

「どういう…意味？」

「そのままですよ？あなたの方が都様ではないのですか？」

言ってる意味が分かって吐き気が込み上げて来た。間違っていないって証明してくれるものは何もない。自分が…天者の魂で、目の前のが『谷口都』本来の性分だとしたら…？

九希を愛して、破壊を求めて、快樂の為になら琥雷とも…交わる…。
なんで、知ってるの？

自分が追い出されてからの身体に起きていた事が鮮明に焼き付けられる。フラッシュバックのように…。

「都！」

和美の眉を寄せる仕草をはっきりしない視界のどこかで捕らえた。自分がすっかりしなきゃどんどん気持ちが悪落ちて行く。

「大丈夫」

「大丈夫じゃないよ。下がって！」

和美に突き飛ばされて九希の方に身体を預けられた。

九希が少し溜め息吐いて身体を支える。

ぬくもりが…九希の側に居ると麻薬でも嗅いでいるかの如く込み上げて来る想い。

（やだ…）

何かなんだか分からない。もう、決心したはずなのに揺らぐ。

「九希、お願いだから寄らないで」

そう言っただけ自分の足で立つと九希が苦しそうな表情をした。創造主に否定されることは生きとし生けるものにとって一番酷な事である。

「ごめん、私にとって九希はお兄ちゃんであって欲しいから……男として近づかないで」

「ボクは、都の………兄だよ？」

その様子を見ていた自分の身体が醜悪に笑った。

「なんだ、九希………あなたその『谷口都』を愛してるんじゃないかい？」

そこにいる全員が固まった。

場の空気が凍るってこういう事だ。

戦闘モードになりつつあった和美がすぐさま自分の身体を九希の側から回収して立ち憚る。九希が目を反らすのと同様だった。

「あははは、とんだ茶番ね？これなら都、身体返してあげようか？一緒にしましょう？」

「いやっ！」

「身体、返して貰いに来たんでしょ？止めに来たんでしょ？」

「やだっ！」

言い返した途端に過去の魂の宿ったその身体が自分の魂を取り込みたがった。

伸びてくる腕に対して返して貰った左目の防衛本能が発動し白銀の炎が身体を取り巻く。尚哉の炎の龍の型にそっくりな自分の力に驚いた。

「な……………おや？」

すうつと憑き物が取れたように軽くなる思い。

忘れないで、『谷口都』として生きてきたこの生涯を……………。

忘れないでって……………。

「そんなの忘れちゃえば良いのよ！私達がずっと欲しがっていたものは今そこに！そこにあるんだから！」

惑わせようとするその声、琥雷の全てを嘲るような瞳、和美の真剣な腕……………そして九希。

「ごめん……………ボクは妹を好きになっただけじゃないなんて当たり前前ことを習ってこなかったんだ。君だけは愛してはいけなくて……………」

……………気付いた時には遅かったよ

「私には……………」

「違うんだ……………『都』様が好きなんじゃない。『谷口都』として生きる君のことを愛してしまったから」

「九希、私をこういう風に育てたのはあなたなのに……………」
「知ってるよ」

尚哉が好きになったのは自分の意志だった。でもそれ以外は殆ど九希の意志で生きてきた。九希を好きにならないように生きてきた。「バカじゃないの？あんたバカでしょ！」

「都………良いんだ。君が振り向かなくても良い」

「そういう問題じゃない！あんたバカよっ！」

自分のことを好きにならないように育てたらそれが自分の好みだったなんて………ただのエゴだ。頭の中が整理された。

近寄るなど言った九希の方に自ら寄って彼の頬を思いっきり殴った。

「育ててくれてアリガトウ。でももうちゃんと自分で選べる。あなたを選ぶことはないこともちゃんと分かる」

「そんな、君が好きだよ」

そう言って哀しそうに微笑んだ九希の顔をもう一度平手で殴った。

「お兄ちゃん、ちゃんと私を見て？」

「都………」

「ちゃんと『谷口都』を見て？」

そう言った自分の身体を『都』が引つ張った。そこからはもうメチャクチャで。

お互いに言いたいことを言って殴り合う女のケンカをした。

「何年………何回待ったと思ってるのよ！ようやく九希が手にはいるのよ！邪魔しないでっ！」

「人生をやり直せばどうにかなるなんて思っなよ！この身体は私のっ私の人生を生きてるんだからっ！」

「九希にも和美にも選んで貰ってるアンタに何がわかるのよ！神なんて持て囃されたって自由に何一つ手に入らないのに」

「分かるわよっ！………私だって一番大切なものはこの手に出来ない」

尚哉はいずれ大人になって選ぶべき人間に気付く。そしてそれは自分ではないのだ。

誰がこんな仕組みを作った？

誰が………？全部自分達の歴史だ。

散々言い合った後、地べたにへたり込んで声を出して喚いて泣いた。

「悔い、のない様に生きたいの……」

「うん」

「私の身体……、あなたの魂も、全て一つのものよ？」

「うん」

「だって……私達、こんなに似てる」

拒まれる恐怖の震えは消えない。腫れ上がってしまった頬に触れて辿々しく笑った。『都』はその自分の言葉に泣きそうな微笑みを向けた。その微笑みは自分すら見とれるくらいに美しく、いつかこういう風に笑える日が……来ればと願った。

「似てないわよ、ぜんっぜん！」

「似てるもん！」

「似てないから九希があなたを愛してるんじゃない！似てないから弾かれちゃったんじゃない！もう良いわ」

そう言って『都』と自分の思いは一つになる。

そのハズだった。

『都』が振り返って琥雷に右目を取り出して渡す。彼はそれを受け取って妖艶に微笑む。その不気味な光景を見た瞬間に引きずられるように身体に引き戻された。

自分の身体の中に右目に詰められていた『天者』としての力は存在してなくて……。

「なんでえ？わかってくれたんじゃないの？」

へたり込んで言う琥雷は勝ち誇ったように見下ろして言う。

「これは既に交わされた契約。守ってくださいさなければあなたは身体ごと持っていかれたでしょう。むしろ感謝すべきですよ。まあ、あなたを自由にする気はないんですが、ね。その左目も頂きますよ」
完全に見えなくなつて失つた右目。九希から返ってきて力を有する左目。

アンバランスな視界が迫る琥雷との距離を正しく測らせなかった。気配だけで目をギョツと瞑る。

大きな衝撃音が聞こえて目を開けた。和美が水の麒麟のような力を具現化させて琥雷を吹き飛ばしたのだ。

「もつと俺を信用して欲しいね」

「和美く、ん」

「女の戦いは済んだでしょ？立ってちゃんとやるべき事を！」

「うん」

和美に支えられて立ち上がると九希から紅神の剣を取り出した。一種、儀式のようなその仕草で。

「皐月くん、奈月ちゃんの身体を回収して！」

「ああ」

そう言って駆け寄る皐月の姿を確認して剣を握りしめしつかりと立った。

ここで引く訳にはいかないんだ。

覚悟を決めた自分達に余裕の表情で琥雷は距離を詰めてくる。

「良い瞳だ。やっぱり俺もアナタの方が好きだな」

和美がもう一度麒麟を琥雷に向かわせた。琥雷の反属性である水の魔獣は絡みついて彼の力を削ぐ。和美の力は相当なもので簡単に有利な方へ向かっているのに彼の自信に満ちた瞳は揺るがない。

気味が悪い。

自分の身体も握る剣が勝手に身体を引きずって戦いの場へ躍り出た。剣の守人ってこういう事か……。九希の戦い方とシンクロするように自分の身体が動いていく。

琥雷は自分の力が削られていっても全く顔を歪めなかった。

小一時間そんな攻防が続いた。琥雷は一向に自分の右目を取り込もうとせず、何かを待っているようだった。

何を？

力チャ、控えめに扉が開く音。

「え？」

尚哉の受信したメールを覗き込むと奈月からGPS情報が送られてきていた。

何だか分からず首を傾げるが場所が場所だ。

東京駅の中心を差している。そんな場所で今何に巻き込まれてるか容易に想像が付いた。そこは今戦いの場になっている。

「尚哉さん」

「伊織……悪いけど結界は木月さんに張って貰って」

炎属性の結界を飛鳥に張って貰えと簡単に言い渡した。

奈月の事を簡単に切り捨てられないこの人は少し一重の規格外だ。でも自分が何で主に着いていかずにここに残ったかを分かっている。

アナタを守る為です。

アナタが生きていないと姉に自分の席を盗られる可能性があるからなんです。

少し考えてから尚哉に尋ねた。

「何で行く気ですか？」

「……バイク。地下駐車場にあるだろう？」

「私も行きます。一人で行くよりは良いでしょう？」

「水の結界はどうするんだよ？」

「いるじゃないですか！ここに水の結界張れる人！」

桜花を指差すと尚哉が苦笑した。

「お前、意外と都に似てるのな」

「心外ですね。私はアノヒトよりも少し計画的ですよ」

「底意地の悪い都って感じ」

「もう黙ってください。行きますよー！」

ここに、自分の守るべきものはもう何もないのだから。

あまり見えていない瞳にもはつきり分かった。
扉を開けて入ってきたその人は……。

封鎖されているはずの構内に入ってきたその人は尚哉と伊織だった。

「な、に…… やってるの？」

届かないくらいの音量、口の中で呟いた。近くにいた和美は瞬時に二人の前に結界を張る。

「ようこそ」

待ってましたとばかりに琥雷が言った。胸からピンク色の可愛いストラップの付いた携帯電話を取り出して投げ捨てた。

ガシャッと無機質な音を立てて割れたそれは、奈月のもの。見覚えがある。

「何を……？」

「ただこの二人を呼びだしただけさ」

「何で？」

「正しい形にしようと思って」

言っている意味が分からず唇を噛んだ。琥雷は劣性を招いているだけだ。炎の術だけなら尚哉は和美に劣らない。伊織もまた然り。利用する方が得策というものだ。

「伊織！奈月ちゃんの回復を」

「はいっ！」

走ってこちらに向かい、自分が抜け出た過去の身体を一瞥すると奈月に手を掛けた。

温かい回復の力を奈月掛けているのを見て安心した。

尚哉の手が奈月を触るのを見て目が離せなくなりそうになった。首を振って琥雷を見る。

「都！集中」

「はい」

また引きずられるように戦場に戻ると琥雷に簡単に避けられた。避け方が……。

（瞬間移動？）

手応えがあったと思った瞬間に身体が消えたから。

振り向くと伊織の前に立っている。

体中に自分達の付けた無数の傷があるのに平然として伊織に話しかけた。

「君のが『都』様の資格があると思うんだよね」

そう言つて右目を伊織に渡した。躊躇いなく伊織が手にする。

何が、起きてるのか……………終始わからなかった。

端から彼はこのつもりで伊織を誘いだしたのだ。

「琥雷！伊織！」

やめて！その力は……………。

走つて寄ろうとしたのに結界に阻まれた。伊織によるものだ。

無理矢理引きちぎるように結界を破つて近寄ろうとした瞬間に伊織の中に完全に右目を取り込まれた。右目の喪失感が身体を襲う。

「な……………」

「何で？生まれた時からアナタが目障りだったからよ」

さも可笑しそうに伊織が言った。狂っている。人の力を喰つてまで……………。それじゃ邪者と変わらない。

もう一つ分らない。

皐月を振り返った。

地面に伏して身体を押さえている彼を……………。

琥雷が使ったあの力は皐月のものだ。

「何、で？」

皐月の呟き。皐月の力を抽出するかの如く琥雷が移動能力を発動させる。

「何で？それは、ね……………契約、したでしょ？」

琥雷が以前の『谷口都』そっくりに姿を変えた。皐月がそれを見て悲鳴をあげた。

「皐月くん！」

「都！都！助けて！都！」

駆け寄つて縫り付こうとする皐月の手を取ろうとしたのに……………。距離感のない右目に阻まれてすぐ反応出来なかった。伊織が手を

差し伸べる。

「もう、契約したんだから実行しなきゃ。あなたの契約反古は桜花さんに関わるわよ」

「ああ……………」

歪むその世界を……………誰が狂わした？

「さあ、最終的に選ぶのはあなたよ」

伊織の声が皐月を誘った。奈月の身体を皐月に預けて、さあ選べと……………。

皐月は止め処ない涙を流しながら奈月の身体に手を掛けた。

血まみれになる奈月と皐月。

もう声も、届かなくなってしまった。

こぼれ落ちる命。尚哉が何かを叫んでいた。

和美が走り出そうとする自分の身体を必死に抑えようとしていた。全部コマ送りのように見えて、何か違う世界を覗いているように見えて……………現実感がない。

皐月、伊織、琥雷がこちらを向き直って立った。

尚哉が奈月の身体を抱き上げてるのを見て体温が下がっていく。

仲間と戦う感覚なんて、覚悟なんて無かったから……………。

こんな時まで奈月に嫉妬する浅ましい自分なんて自覚しなくなつたから。

ただ吐き気がした。

「おねえちゃん、これ分かる？」

そう言って伊織が琥雷の身体から抜き出したもの、それは紫の刀身の剣だった。

九希のそれにそっくりなその剣。

「七希？」

「そう、紫神の剣って言うんだって！」

喉が鳴った。つまり泉実拓也だと思っていた身体は既に七希の身体だったのだ。

琥雷を傷つけていると思っていたのに。

「お姉ちゃん酷い顔よお」

あははは、いつもの伊織らしからぬ笑い方が部屋に響いた。
こんな酷いことをさせているのは誰？

本当にこれが現実なのか、和美が頭を切り換えるように自分の力を具現化させた。

「やめ……やめてっ！」

「都、殺らなきゃこつちが……」

言い争っているうちに九希が自分から紅神の剣を取り上げた。

「九希？」

「和美が使いなさい。都が迷ってるうちは無駄だ」

そう言って九希が自分の身体を羽交い締めにした。

和美は受け取るとすぐさま攻防の中に突っ込んでいく。九希の力は強くて、引きはがせない。和美は簡単に琥雷の身体を捉えて真っ正面から剣を差した。

「和美っ！」

後ろから皐月の手引きで伊織が瞬間移動をして和美の身体を貫く。九希と七希の声なき声が部屋中に木霊した。仲間なんか刺したくないのに……って。

「九希！離して！ちゃんと戦うから！」

伊織は和美の身体から剣を抜くと次は奈月を抱いて放心状態にある尚哉の元へ向かった。それを見て九希を振り切って伊織の前に立ち憚る。

「ようやく出てきた、おねえちゃん」

「伊織！やめてよ」

「まだそんな甘いことを……」

自分を突き飛ばして尚哉の上に振り下ろそうとする。

「やめてえっ！」

肩口をバツサリ切られた尚哉はようやく状況を掴んで伊織を見据えた。

それでも傷が深くて肩で息をしている。

片目も見えず、武器もない自分に何ができる？

出来ることを探した。

見回すと伊織を援護して自由に力を使う皐月と目があつた。

「皐月くん！」

「来るなっ！」

「皐月くんは……自分でちゃんと決めて！ホントにこれで良いの？」

「来るなっ！俺はあんたのことを好きになっちゃいけないんだ！」

「何を……」

「俺は桜花のことが好きで……それで能力者になりたくて契約したんだから」

この力は、桜花の為に……。

そう言つて皐月は涙を流した。その皐月の心臓を伊織が突き刺す。

「まどろっこしいのは要らない」

笑いながら、体をゴミのように剣から引き剥がす。

狂っている。

皐月を回復をしようと近寄ろうとしたらすぐに伊織が向かつてきた。

紫神の剣が避けきれずに自分の身体をかすめる。

でも避けられる。

ちゃんと、この目を使えばいい。

元々左のが強いからだから。

伊織にこれ以上罪を重ねさせない為に踏ん張って立ち上がった。

刺された傷が深くて驚いた。

（治癒を……）

そう思つて傷口に触れる。

自分の元々の力が発動しない。

（え？）

罪の、代償を知った。

移動能力者でもないのに空間を荒らしたから？それとも強い人を傷つける能力を奮ったから？

治癒の力が使えなくなっているのだ。

それでもまだ自分は死ねない。この身体はまだ生きている。

そう思った瞬間に伊織は皐月の身体を貫いた。

「皐月っ！」

自分の血まみれの身体を構わずに彼の身体の元へ走った。皐月を抱きしめて振り絞るように力を使おうとした。

今！今この力が使えなくて何が賢者だ。

身体を引きずって近寄ってきた尚哉が自分の身体に触れた。

「使うぞ」

彼の特殊能力が自分の身体を漁り始める。

奈月と皐月、一度に回復する気なのだ。

それなのに……………。

「……………ない」

「え？」

「お前の身体の中に……………治癒に関する力が一欠片も残っていない」

「え？」

二人とも愕然とした。どんどん冷たくなっていく皐月に……………奈月はもう手遅れのように見える。

大きな爆発音がした。

振り返ると都が総毛立つほどの大きな力を使った後だった。だがそれすら神の剣が力を裂く。左目が強く金色に光っていた。

直後に七希の姿をした琥雷が都を襲う。

二人を相手にしても引けはなかったが苦戦しているのが分かった。九希が回復を止めようとしないうちに自分達に触れて首を振る。

剣を握りしめて立ち上がり、そして琥雷に向かって走った。

都が一瞬縋るような瞳を見せる。

「こっちは任せて」

言つと泣きそうな顔をして身体を離れた。

伊織と引き剥がした方が良い。そう思ってその身体ごと違う空間に転移させる。

琥雷が舌打ちをしてこちらをみやった。人の動きの限界を超えたような動きで攻撃の手を止めない。それを具現化した力で片っ端から燃やした。

勝たなきゃいけなかった。

皐月を、奈月を……助けられないならせめてここで……。

自分が選んだ戦場で一番にならなければいけなかった。

それがあの二人に対する償いだから。

琥雷が放った雷を中心から引き裂いて具現化した力を琥雷の核にぶつけた。

「……………くっ」

声が漏れたのは七希の身体からだ、今までと違う表情をした。

「な……………で分かった？」

「突然見えたから」

突然覚悟を決め瞬間から琥雷の核が分かるようになったのだ。もう一度、それに対して今度は最後の攻撃を仕掛ける。

強く練ったその力を、何もかもを破壊するその力を奮った。

後に残ったのは七希の身体だけ。近寄って口許に手を当てると小さく息をしているのが確認出来た。

これ以上ないくらい力を使って…………元の空間に戻るほどの力が残っていなかった。

せつかく生かしてあげたのに、戻れないや。

ごめん、七希。俺たち亜空間の水雲になるかもしれない。

和美が琥雷と消えたのを確認すると伊織を見据えた。

手から迸るプラズマ光が身に余る強い力の印。まだ慣れない片目での距離感も補うくらい運動能力の底上げを力によって行って、伊織と戦うことを決めた。

「ようやく甘さの取れた良い顔になった」

「え？」

素手と剣のリーチの差でなかなか彼女に攻撃を当てられない。しかも自分とほぼ同じ力を有する伊織では正直相手にするのが大変だった。

でももう…………。

仲間に仲間を傷つけさせたくなかった。

伊織に自分を、じゃなく。七希に自分を…………。自分に掠るたびに七希の心が壊れていくのが分かるから。

奈月も皐月も…………。七希の心も…………。伊織が全て壊していく。

そしてその原因をつくったのは…………。

揉み合って剣を奪おうとした。紫神の剣の束で突き飛ばされて和美が落としていった剣を掴む。

（九希、ごめんね）

あなたが一番戦いたくなかっただろうに…………。

剣を持った自分はあるという間に伊織から剣を奪うことに成功した。

そして伊織を拘束した状態で告げる。

「伊織、あなたは生きなさい」

「殺しなさいよ」

「殺さないわ」

「何で？偽善者！」

「生きて！生きて！生を全うしてこの目でちゃんとあなたが犯した罪を見なさい！」

伊織の左目を指してそう言った。

「自分で死ぬことは赦さない！この戦いに関わった人全員が死ぬまで生きなさい」

その言葉は呪いの言葉にも等しいものだった。

伊織が悲痛な声で笑う。

狂ったように笑う。

その声が木霊して場に貯まっていた力が拡散していくのが分かつ

た。

振り返ると死体が転がっていて、尚哉も九希も満身創痍で……自分も。

でも終わらせたのだ。

その場で伏して呻いて泣いた。

皐月に……奈月に……、殺したのは伊織でも……それをさせてしまったのは自分だという事実。

こんな力要らない。

命の神なのに死んだ人間を生かす術は知らない。

「み、やこ……」

一番傷のない九希が自分の方へ寄ってきた。

「触らないでっ！」

「都……」

「今、アナタと喋ったら私が変になる」

「しっかりしなさい」

「おにい……ちゃん」

伏していた自分の身体を無理矢理起こすとまだだ、と告げた。

「え？」

「ニュースで見ただろ？交通機関のマヒを……」

「うん」

「東京は一種の魔法陣だから」

山手線と大江戸線とそれを割くように跨ぐ路線達。それがマヒしているという事実。

そしてここが東京駅の一番下だ。

大きな地震が身体を保っていられないようにした。地に再び伏せさせて立ち上がるのを送らせる。

「どういう……こと？」

「琥雷の目的は？」

「……滅び？世界の？」

そう、琥雷は自分が滅びるのは構わないのだ。

全てを無に帰すことが目的なのだから。

地震でヒビの入った地面から水が出て来て地盤沈下が始まる。

「東京駅は元々地下水が上がってきてしまつて年間数？沈んでいるらしいね」

「冷静に言つてゐる場合じゃないでしょ！」

そんな不毛な言い争いをしている兄妹を余所目に尚哉がその水を全て自分の力で干上がらせた。

こちらを一瞥して扉に走り出す。

自分達も死体を置いて伊織だけ引きずつて走つた。

長いエスカレーターは全て停まつていて段違いになつていて走りにくい。それでも登らなければいけなくて必死に走つた。

駅員も既に避難しているのか人は殆どいない。

「山手線………大江戸線………丸の内線………中央線………あとなんだっけ？」

「知るかよっ！」

自分の問いに対して伊織を抱えて走る尚哉は苛立ちながら答えた。傷だつて浅くはない。ちよつと時間があれば治癒も出来るのに。

「バイクはどこに置いたの？」

「この上！集積所みたいなトコに」

京葉改札口から乗り越えて外に出ると地震によつて道がふさがつていた。

尚哉が舌打ちして戻ろうとするのを止めて紅神の剣を一降りして土砂を崩す。

移動能力が使えないことを本当に悔しく思つた。皐月が生きてれば、和美がいれば、自分にもう少し時間があれば無の塔で修行だつて出来たかもしれないのに。

地上が見えてきた。

銀座方面に出て伊織を九希に預けるとバイクに跨つた尚哉の後ろに乗る。

「どっ？」

「……………どこかなあ？術の中心になってるトコは……………」

後ろから抱きついていて間に治癒の力を発動させた。尚哉が苛ついたように頭を掻きむしってその後にバイクを山の手側に向かって走らせた。

「どこかなあじゃないだろうが！」

「えー？聞こえない？」

なーんて、尚哉の苛々に付き合って自分が苛々する訳にはいかないので聞こえないふりで無視した。

心はまだ落ちていて顔が引きつる感じがした。それでも周りを引きずって悲しませる訳にはいかないから虚勢でも胸を張ろう。

尚哉も同じ気持ちに違いないのだから。

「皇居……………か」

「すぐ近くだ」

呟いた自分の言葉に尚哉がすぐ反応する。2、3分で皇居は見えた。

「千鳥が淵の方に回って！」

「ああ」

バイクを滑らせて事故があちらこちらに起きている道を抜けた。信号は点滅していて首都機能が全てマヒしている環状一号線を少し離れ、武道館が見えてきた。

靖国神社の辺りにバイクを乗り捨てて尚哉の身体を引っ張って中にはいる。

鳥居を潜った瞬間から神聖な空気が身体を包む。

「ここにあるね」

本堂まで走って行くとカラスに短剣が刺さって魔法陣の一面を担っていることが分かった。短剣は見覚えのある呪具だ。

自分の蔵に収めてあったものではないが、神の道具の一つで、本来はあれで天者を殺すことが出来るといふ代物。

多分……………今までの都が殺されてきたもの。全部で何本あっただろうか？確か7本だ。

「一本目」

短剣を抜いて回収し、カラスの死体は尚哉が灰になるほどの高温で燃やした。

「一本目？」

「多分…品川神社、浜離宮、浅草寺、刺抜き地蔵尊、御苑、明治神宮……つてとこかな？」

「はあ？」

「六芒星になってると思うんだけど」

「ここは？」

「中心。短剣が七本有るでしょ？線路で魔法陣描くなら私はそうする」

「ああ」

やったのお前だもんな、て小さく言った。スミマセン、それを言われると果てしなく消えたくなりますが……。

尚哉は携帯を取り上げて何処かに掛ける。

「おい！お前は遙佳！遙佳に掛ける！」

「あ、うん」

時間がないのは確かに見て取れる。ここを崩してももう線路中を負の力がコイルしているのだから。

尚哉の相手が九希だとすると、浜離宮を任せることになる。遙佳は品川神社が近いのか。

「遙佳？」

『都ちゃん？大丈夫？』

「うん。詳しくは説明してられないんだけど品川神社と明治神宮に人を出せる？結界を敷いてる呪具を壊しに行つて貰いたいの」

『わかった。すぐに行かせる』

何の音も聞こえない、何の光もない亜空間に七希の身体と自分の身体だけ転がっていた。沈んで堕ちていくような感覚。何も聞こえないのに耳鳴りのような錯覚

どのくらい、経っただろうか？

突然地面の感覚を覚えて立ち上がることになった。ピンク色のドレスを着た番人が自分を迎える。

「無の……塔？」

「カズヨシ様、呼んで下さればもつと早く着けましたのに」

「……俺が呼ぶ資格は」

「賢者のアナタには有りますよ」

「治癒もっ！出来ないのにつ！こんな……」

人を傷つけるだけの力要らなかったのにつ！

能力を地面に叩き付けた。それを番人は動じずに見据えた。

「今日は新しい仲間をご紹介に上がりました」

「え？」

無の塔の扉をそつと開いて短い髪のサクラと同じ年くらいの女の子が出てきた。黒い髪に黒目がちな……見覚えのある顔立ちにハッとした。

「な……つ」

「その名前で呼ばないで下さいませ。彼女はユエ、今日から番人の一人になります」

「皐月も？皐月も塔に入ったの？」

「さあ？今日の新入りは一人ですが？」

「そう……」

それでも奈月がここにいる事実。彼女の死を現していて……。

ようやくちゃんと涙が出た。

ようやく自分を責める以外の感情を感じた。ユエの身体を抱いて呻くように泣いた。

御苑の……最後の短剣を抜いて、それでも地面の震動は止まっていなかった。

（まずいな……遅かったか？）

唇を噛んで地面に触れる。尚哉が九希からのメールを受信した。

「全員終わつたみたいだ」

それでもまだ振動は止まない。

この首都機能マヒでどれだけの人間が死んだのだろうか？

その人間の命が誘導コイルになってしまっていて止まらない。

「尚哉……………」

「何？」

「手分けしてやりたいんだけど」

「ん？」

「一番大きく力が渦巻いてるのが大江戸線と山手線なのよ」

「……………周回しやすい形だからな」

円形になっているから。

魔法陣の正しく外周になっているその線路さえどうにかしてしまえば少しは納まるはずだ。本当は和美がいれば良いんだが……………。

「出来る？」

「は？」

「コイルしてる力と逆向きに力を伝わせるの。私山手線行くから尚哉には地下を」

「誰にモノ言つてんだよ！出来るに決まってるんだろ」

御苑から走って新宿駅に向かった。力尽きるまで命の浄化を行えばいい。ただ、それだけだ。

あれから二ヶ月、復興の為の費用として多額の寄付がある団体から行われた。

首都機能の整備拡張には逆に喜ばしい結果になったとかで意外に大事に至らなかった。

朝のニュースでは芸能人の近辺を報道して、既に平穩を取り戻しつつある。

人は沢山死に、仲間も死んだが自分は生き残ってしまったのだ。

新宿駅、尚哉と二人で浄化の拠点にしたこの駅に尚哉と待ち合わせる。

残念ながら地下鉄機能はまだ復興にほど遠い。だが地上は既に賑わいを取り戻していた。

「お待たせ」

「ホントだよ」

相変わらずの遅刻魔っぷりに呆れながらも以前と変わらずに手を繋いだ。

だがあれ以来なのだ。

今から和美と御苑で待ち合せている。

正直言ってかなり気が重かった。

奈月が死んだ事後処理に追われていた尚哉、皐月が死んで落ち込む桜花をちゃんと振った和美。それでも尚哉が好きな自分。三者三様で。

「都？元氣ないね？」

「うん………出ない」

「何言ってるの？」

「………だって、和美くんに会いたくなくて」

「仲良かったのに？」

仕方ないな、って顔をした尚哉はいつもとあんまり変わらない。もともとあんまり会えなかった二人だし、尚哉と自分の関係はあまり変わらないかもしれないな。

「七希さんは目覚めないらしいよ」

「え？」

「身体機能には問題ないんだけど精神的に………」

ああ、そっか。納得出来て顔を顰めていると尚哉が頬を抓った。

「お見舞いに行くだろ？」

「私が行って喜ぶかな？」

「卑屈！」

更に力を強めて頬を抓られた。

「いひゃいい」

「一緒に行こう」

「うん」

ああ、それでも二人で一緒に生きていくんだな……。青い空を見上げてボロボロの街並みに祈った。

それでも、一緒に生きていきたい自分が居るって……。

御苑前に行くと少し身長が伸びて大人っぽくなった和美が立っていた。緊張が進るが尚哉の手が力を強めたので気持ちを隠して微笑んだ。

「都？元氣？」

「あ、うん。だいたいね」

「そっか。右目は？」

奪われた右目は取り返していなかった。伊織の身体に未だに鎮座している。

取りに行くのが怖くて……。

表情を見て和美が溜め息を吐く。

「まあ、見れば分かるけどさ」

「うん。仲間を殺した力だから……」

「じゃあ俺に頂戴？」

「え？」

「伊織に持たせるワケにはいかないでしょ？都が呪いの言葉で伊織の力封じたとはいえ」

「う、うん」

「じゃあ俺が預かるから」

一方的に言う和美にただ何度も頷いた。

「君の傷が癒えたら……取りにおいで？」

「私元気だよ？」

「心の傷！皐月の事……微妙に好きだっただろ？」

和美が言った瞬間に尚哉の表情が険しくなった。いや、アナタには怒る資格無いデスヨ。

アリガトウ、そう言う代わりに微笑んだ。

もうすぐ学校も始まるからそしたらまた顔を付き合わす日々。

それまではみんな……心を癒して……お大事に、と。

和美を見送って二人になると尚哉は何も言わずに歩き始めた。
その背中を見ていたら寂しくなっただけで前へ回ってキスをしようとした。

それを避けられる。

「ぬあ！なんでえ！」

「いや……だって喪に服してますし」

「49日は過ぎましたけど！」

「奈月にも皐月にも悪い気がして……」

「じゃあ別れるって事お？」

こんな事で別れるなら奈月も土の中から這い上がってきて怒るんじゃないのか？

「まあいいや。ってかもいいや」

「は？」

「今日は帰ります！」

「ああ、ウソウソ。都ちゃんと一緒に居たい！今日は予定空けてきた」

「ホント？」

「ホント」

そう言っただけで尚哉の腕がいつものように自分の身体を絡め取るように抱きしめた。奪うようなキスも、強い腕も……今日生きたご褒美として。

無垢の信頼、征服の欲望（後書き）

最近の仕事柄、電車に詳しくなりました。色々な場所に行くことが多くなつて、昔より場所の描写が増えたかも？

車でも電車でも歩きでも都内の散策はするから警察屋さんよりも詳しいかも♪

あと、尚哉の設定の為にクラシック音楽を聞くようになりました。『神の蔵の守人』の時なんですけどね、オペラとか、ヴァイオリンとか…もちろんピアノも聞いて、ホントは実在の曲なんかは使わない方が良さのかもしれないけど私の書き方として未熟だから全部創造することが出来ずに実在のモノを色々使いました。

音楽の感性は凄いい。癒される曲、病みそうになる曲、一つ一つの音が重なって楽しい音になるって素敵です。機会があれば自分でも習ったりしたいです。

しかし最近音楽もネットでも携帯でもダウンロード出来るし便利だなあ。買いに行く行為をしなくなったデス。

あと、ストレス解消の行為が二つ。

食べ歩きとショッピングです。

食べ歩きについては会社でケーキ部に所属してしまいました。

ショッピング、最近自分バビロンのお洋服が大好きです。カイライフのお洋服にいつも惚れるんですけど全然手が出せない額のモノに心惹かれて泣く泣く諦めます。

物語の皆様はというと、都さんに着せてる服はアクアガールとかのインポート着てたり。遊びに行く時はフリーズシヨップとか…：バッグはコーチが好き。まあ普通にお嬢様系の服を着る今時のコです。自分の服の趣味そのまま当ててきてます。エヘヘッ。

尚哉はエディフィスとかトランコンチネンツ。ディオールオムとかドルガバ。

これも私が好きなの。一年くらい前に弟とね、

私「エディフィスの服は高いけどカッコイイよね？」

弟「ああ、ホストみたいだね？」

私「え？だってスーツじゃないのもあるよ？」

弟「だから……『ホストの休日』的な？」

私「エロティックなの？ワインまわしちゃうの？」

弟「そうそう。シロサキジンみたいな！」

みたいな会話をしていたら尚哉的イメージが確立されちゃいました。

小物類はポールスミスで遊んだり。

和美は今時のカッコなんだけどオボツチャマが抜けきらない感じのテイスト。グラムの服とかを着てます。（ウエンツみたいな感じで）

帽子が好きでC A 4 L Aとかによく通ってます。

桜花様はツモリチサト。これは昔頃からそういうイメージで書いてたので抜けません。ツモリワークとかのゴツカワの靴履いてサロペットとか……。でも最近のツモリって少しテイスト変わっちゃったからシンシアローリーとかレベッカテイラーの服も着てそう。

奈月は本人がファッションモデルと言うことでオシャレさんです。なんでも着ちやいますけどんなファッション誌のモデルかあんまり考えてません。でもC a n C a mとかJ Jじゃなさそうだね？エビちゃんとかじゃなく梨花路線にしたいからS W E E Tぐらいにしたいんです。そうすると好きなブランド……なんだろう？レイビームとかアダムエロペ……ロツソとかが本人のイメージなんだけどS W E E Tっぽくないかも。オデットオデールの靴が気に入りでよく通ってます。

悠宇はジーンズメイトです（笑）お金に困ってないだろうけど服に金掛けてなさそう。あえて着るならフリークストアに置いてあるようなアメカジテイスト？

遙佳は尚哉と少し被ったようなカッコウで。でももちつとカッチ

リしてそう。トゥモローランドとかアーバンリサーチとかシッブスとかの服。

伊織様は加賀友禅とか着てそうですね。九希と伊織はまあ普通にオートクチュールとか？ブランドですらないようなモノを着るそうです。

こうして書いてみるとセシルとか着てるようなギャルはいないんですね。いや分かってましたよ。だって時代を反映させるような口の効き方をされるとものすごい困るんだもん。

さて、次話は順序通りに『唯一のモノ』。

和美ちゃんと都さんのその後です。

ぶっちゃけて、ホントは違う人とくつついたあとの話だったので、どうしようか迷ってます。

物語中の皆様の幸せを祈って……………。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7183q/>

心の欠片

2011年2月11日01時26分発行